

小澤卯之助著

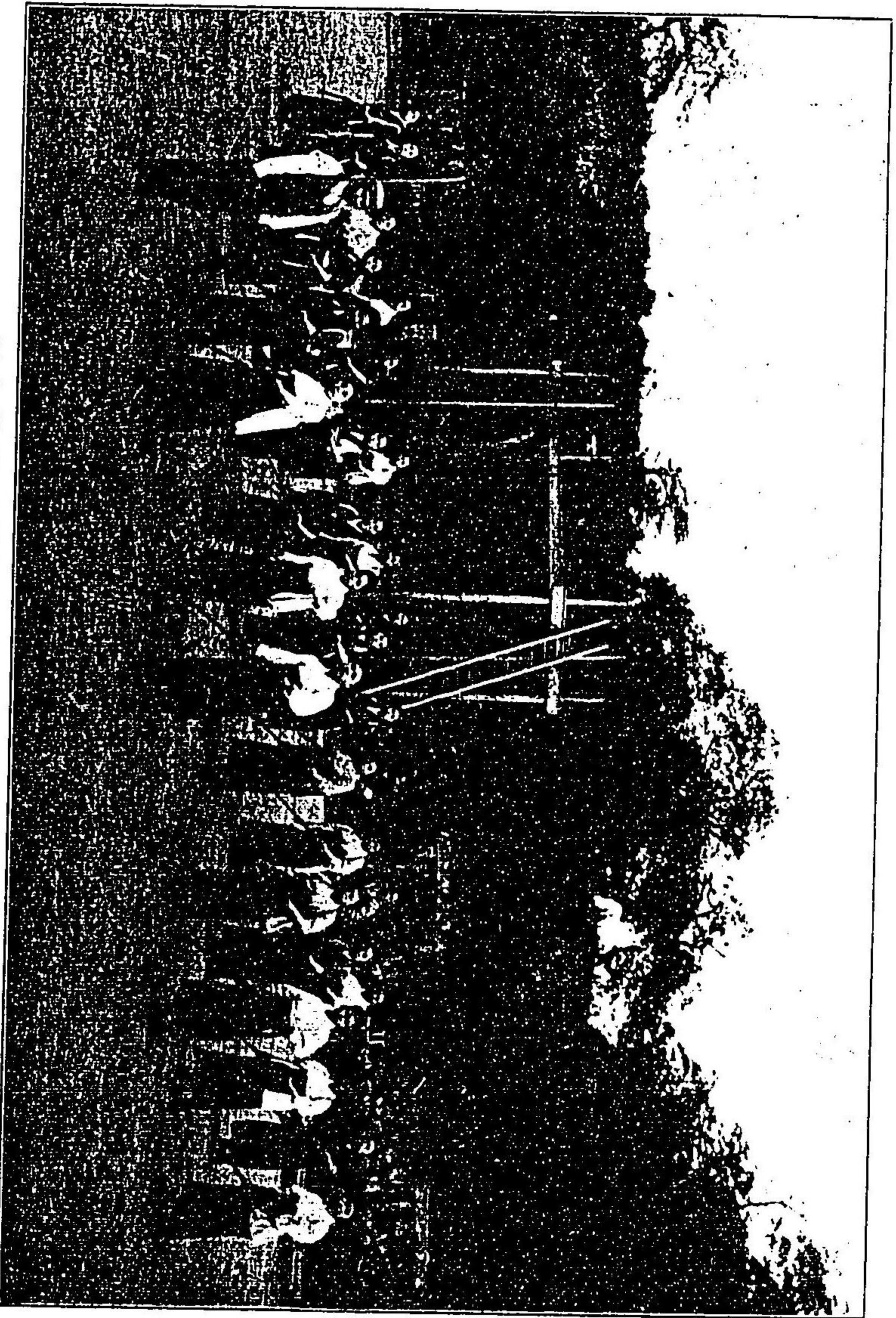


體操法
初段

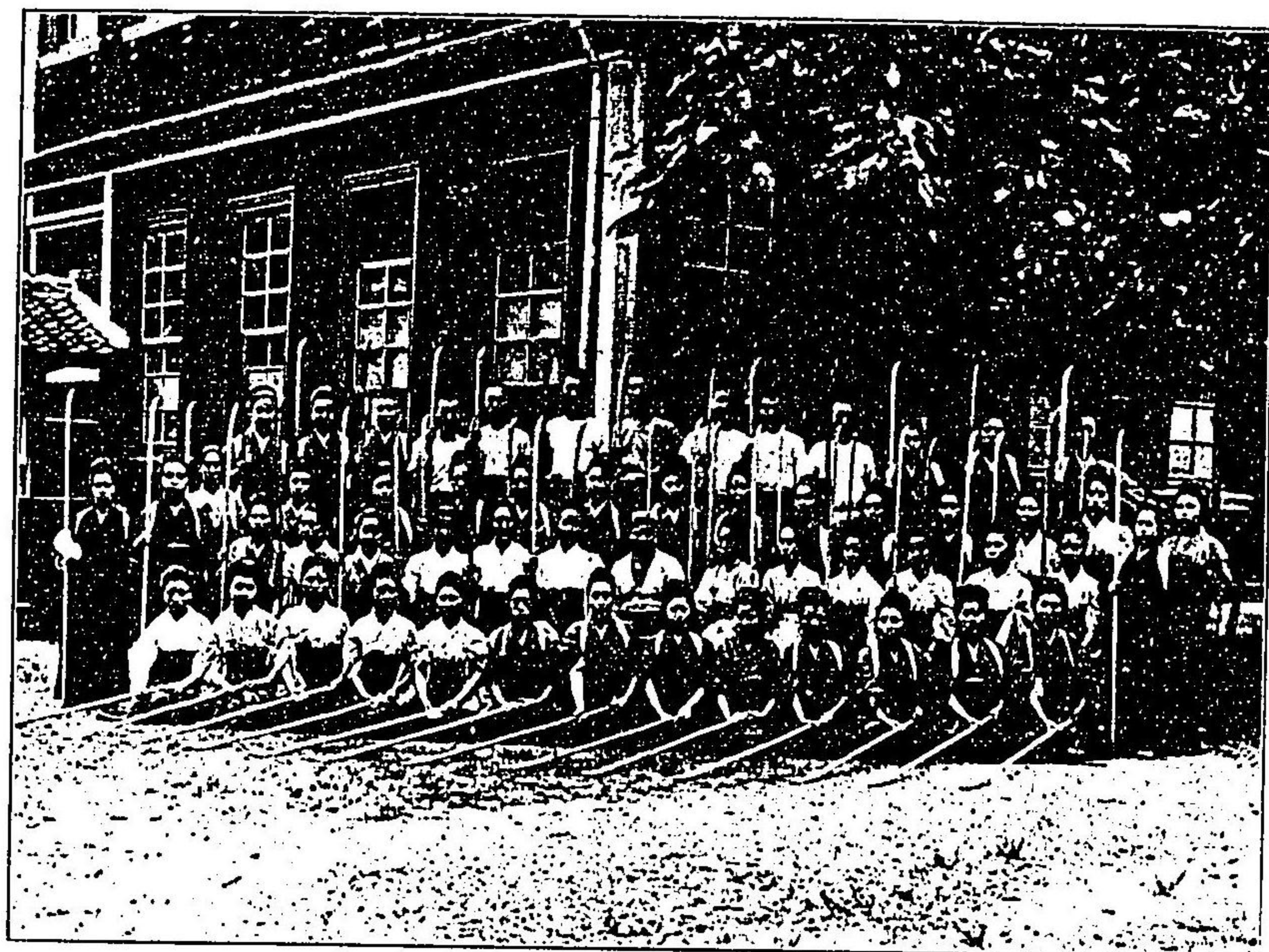
東京
大阪

寶文館藏版

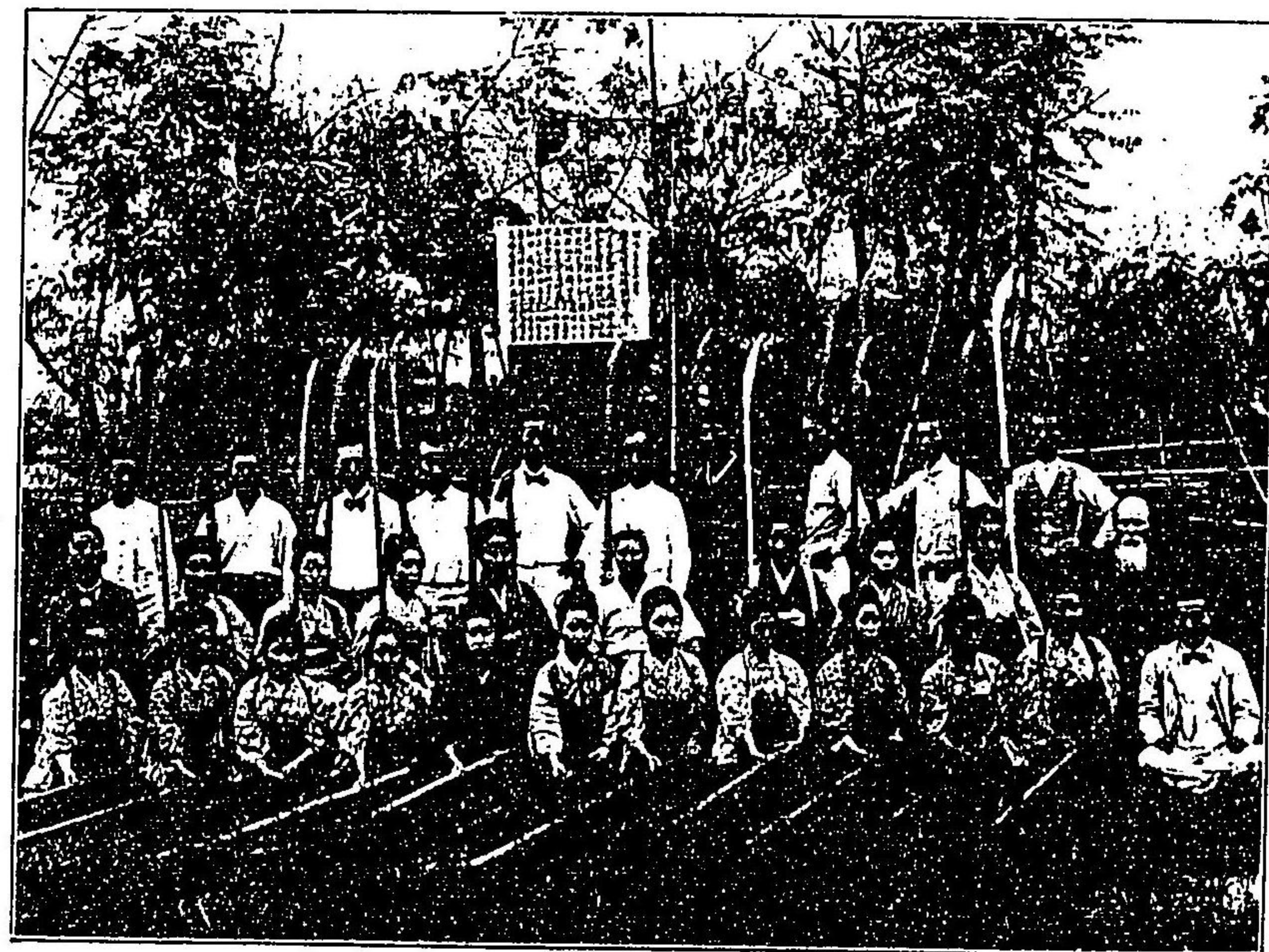




圖之操體刀雅部于女校學操體會育體本日
(內攝會育體本日)



會習講操體刀薙期夏縣口山年五十三治明
(內構校學範師縣口山)



會習講操體刀薙期夏縣島廣年五十三治明
(內構校學女等高縣島廣)

自序

我が邦古來薙刀術に數多の流義が有る其の諸流の薙刀術の法式を體操に同化せしめた者が此の薙刀體操で有る薙刀體操は老弱男女に通じて行はるゝ者で有るから一種の普通體操で有る併し武術の本旨を失なふて居らぬ故武術の方面から見れば純乎たる一流の薙刀術で有る體育流薙刀術と名づけたのは此の理由で有る且つ易より難簡より繁に及ぼす可く組立てゝ有るから教授法改良の薙刀術で有る各流義の精を抜き萃を摘みたる者で諸流の特長を網羅して有るから諸流派の薙刀術を學んだと同様な効力が有る予が創始せる薙刀體操及び木劍體操などが漸く識者の同情を得社會の歡迎を受けつゝ有るを機とし予が八年前に拙著武術體操論に述べた事や九年前に教育時論や文武叢誌などで論じた事を今更ら我が物顔に喋々する輩が

二
一二人見える様になつたのは是れぞ此の體育方法が世人に持嘶さるゝ証左で有る前兆で有ると思へば誠に喜ぶ可き現象で有ると云はざるを得ない予は東都に於いて固有武術の法式を知る者に就き幾んど學び盡くし又地方に在つても武術を知る者あらば就いて學ぶを勉め既に數十名の師を得るに至つたが未だ地方の舊藩所在地などには藩の指南役等が生き残り若しくは傳へ遺して置いたもめが所々に在る引讀き四國九州中國を始め東海東北千島の極までも東奔西走南帆北轅して益々技術上の蘊奥を究め體育上の學理を應用して此の日本式體操を完成せしめ度いので有る依りて今茲に一言希望を述べて江湖諸彦の批正を乞ひます次第で有ります又續いて本書の續篇及び木劍體操などの改正した分を世た公に致します故御斷りを申上げ置きます

明治卅六年七月下旬山口の客舎に於て

著者誌

薙刀體操法緒言

一、此の書は予が曩きに棒術、劍術、薙刀術、槍術等本邦固有武道各流派の法式中體育方法として適當なるものを拔萃し且つ歩兵操典、騎兵操典、體操教範、劍術教範、船刀操法、船槍操法、陸軍禮式、普通禮法、普通體操法等の諸書を參酌し之れを體操に同化せしめ興味を感じつゝ、少時間を以て能く體育の目的を達し傍ら實用に益せしめんが爲めに著せる所の武術體操法の内の薙刀體操の部を其の後滿六箇年間實地經驗を積み改訂せる者なり

一、薙刀體操の利益明治二十九年七月拙著武術體操論に詳述せり中、心膽を練り徳行を修むるもの其の一に居るを以て教官は薙刀體操修業者をして常に快活剛毅なる精

神と高尚優美なる氣風とを持せしめ苟も粗暴野卑の言行無からしめんことを要す

一、對面の禮解散の禮始業終業の藝禮は最も謹嚴にして衷心より出でしめ薙刀體操をして有形の修身科たらしむ可きを期すべし

一、各自演習と對向演習とを論ぜず演技者演習中事故に仍りて中止を要する時は「暫く」と請ひ復た始めんとする時は失禮と呼びつゝ目禮すべし

一、生徒を懇篤に教育し熟達に至らしむるは演習の經過急速ならざると復習を厭はざるとに在り之れが爲め多くの時日を費やすことを豫定するを要す

一、教官は意味適切にして明瞭なる僅少の語を以て各動作を説明し而して先づ自ら動作の模範を示し生徒をして

模倣せしめ始めは可成緩徐に之れを行ひ各生の體勢及動作の整正と快速とは漸次に之れを求むべし

一、薙刀體操は老若男女に通じて行ふべき者なれども修業者の年齢と體格とに應じ宜しく斟酌する所あるべし

一、生徒演習中疲勞せる時は何時にても適宜休めの姿勢を執りて可なり但他生徒の妨害にならざる様注意すべし

一、定位操練位置即ち普通體操に所謂排列に在りて正面する時、左前方即ち正面線より左に四十五度の角度を有せる方向を左前隅ヒョウマキと云ひ正面線より右方に四十五度の角度を有せる方向を右前隅と云ふ左後隅ヒョウマキ、右後隅亦此の例なり

一、説明中方向を示すに句點ある者と句點なき者とあり假令ば刀尖を左後上方に云々及び左、後、上方に云々と云ふ

が如し左後上方は左後の上方にして左後上方は刀を左方に運び夫れより後方に廻はして上方に上ぐるが如きを云ふ

一、各圖中頭上若しくは武器の傍らに書ける○は用意の姿勢を示し一、二、三、四等は第一動作、第二動作、第三動作、第四動作等を示し又太刀筋チヌを示せる點線に屬せる進行標の尖頭に一、二、三、四等の數字を施せるは武器進行の順序及び第何舉動なるやを示し足の進退線に附屬せる進行標の尖頭に附せる數字も亦進退の順序及び第何舉動なるやを示せる者なり

一、古來武道の構方は此の流義に在りて他の流義に無き者あり又流義によりて構方に多少の差あるのみならず其の名をも異にせる者あり本書は各武道各流派より各構

方を取り名稱の異なる者は適切と信ずる名稱に従へり其の名稱なき者及び新たに加へたる者は著者が法式の名を取り或は構備の形狀に考へ之れに命名せり

一、豫備體操、薙刀體操共に各節に名稱を附せるは生徒に記憶し易からしめん爲めなり

一、從來の左上段、右上段等と區別せん爲めに構方其の者に左右の文字を冠せしめずして、左構、右構とせり即ち右上段、左上段と云はずして右構上段、左構上段と云ふが如し

一、身體各部平等の發達と練習とを期せんが爲めに右にて演習せしむる者は必ず左にて演習せしめ右より始むるを通例とす然れども初めて教授する際は先づ左方の動作を教ふるを可とす是れ始めて教授を受くる左(右)方は必ず多くの試演を爲すべきを以て通常右上肢、右下肢よ

り劣れる左上肢左下肢の發育と動作の練習を助く可ければなり而して尙ほ左上、下肢の發育可ならざる者ありと認むる時は便宜左方の回数を一、二回多からしむるを要す

一、演技進退の歩長は各自の身長に従ひ最も多く力の入り易く且つ氣合の入るべきを度とし進退すべし即ち各人平生歩行の歩長を最も適度なりとす若し歩長を制限して身長と同じからざる衆生徒をして同一の歩長に出でしめんとするも實行し難きのみならず武道の本旨を失ひ且つ氣合に影響して體育の目的を達し難ければなり而して舊位に復するには各自進みたる丈け退き退きたる丈け進むべき者とす

一、片足立等特殊の體勢の外常に兩腳を少しく屈し體重を

兩足に平等に托し力と氣合とを全身に平等に行渡らしめ決して諸關節を凝硬ならしむ可からず即ち術語に所謂地に居着かず輕からず前後左右に偏らずと云ふの體勢を保つべし

一、我が眼目は主として前列生の頭首若しくは對手の眼目に注ぎ且つ對手の動作武器の活動等に注目し決して他を亂視すべからず

一、面を斬打撃する方法にて横面、肩、小手を撃つは勿論或る構備によりては胸、腰、脚をも撃つを得、又脚を斬打撃する方法にて腰、胸は勿論或る構備によりては肩、小手、横面をも撃つを得、又面を突撃する方法にて喉、胸、水月、下腹等を突撃するを得べきが故に教官は適宜號令を變じて各部の斬突打撃部を撃たしむるも可なり

一、或る構より或る斬突打撃部を撃つに當り他の構よりも其の斬突打撃部を撃つを得べき者は教官は適宜號令を變じて各構より或る斬突打撃部を撃たしむべし假令ば脇構を横構に變じ横構を脇構に變じ中段を下段に下段を中段に變じ又上段霞と下段霞とを變ずるが如し

一、號令を分ちて豫令動令とす豫令は明瞭に發唱し最後の
一音を稍高くし動令は短簡快活に發唱すべし豫令動令間には凡そ二三秒の時間を存すべし豫令は其の文字の下に線を引きて動令と區別す

一、教官たる者生徒の演技を矯正せんと欲せば矯正せんとする動作の終らんとする時「待て」と令し其の體勢を保たしむるを便なりとす演習を止め氣を附の姿勢を保たしめんと欲する時は「止め」と令し演習を終はらんと欲する

時は終りと呼ぶべし

一、體操教師が毎日三時間以上教授する時は或は發聲機を過勞せしむることあり故に教師たる者は適宜暗號を用ふるを可とす予は實驗により左記の三方法を確定せり

「待て」の暗號、左(右)手を自然に開掌の儘(小指を下にし)前方より側方に開張し掌を反らす

「止め」の暗號、左(右)手を自然に開掌のまま(小指を下にし)前方より小しく左(右)方に開き掌を反らせ且つ手頸より左(右)に折り直ちに前方に復せしめ同時に掌を手頸より左(右)方に折る

「右(左)へ」準への暗號、豫令の代はりに左(右)手の食指のみを伸ばし前方に平伸す、動令の代はりに左(右)手を左(右)側方に平伸す

右詰めし進めの令も亦此の方法に従ふ可し

一、毎節の演習回数は大概一舉動なれば八回二舉動なれば四回四舉動以上なれば二回或は一回宛とす左右交動は毎節の左右演習數に同じ回數を行ふを通例とすれども時間の都合を計り多小増減するも妨げなし増減する場合には號令を下すの前教師は其の回數(二回或は五回)等と呼ぶべし既に制規の回數を行はしめ尙ほ續いて制規の回數を行はしめんと欲する時は「續け」の號令を下し更らに始めに反り舉動を唱へしむべし

一、稱法は一節二舉動なる時は一二番號を用ゆ之れを四回行ふ時は一二二二、三二、四二、と稱へ一節四舉動なる時は「一四番號を用る一二三四、二二三四」と稱す斯の如く番號の名は第一回の呼唱の始終の數字を取り命ずる者とす

故に六舉動なる時第一回呼唱即ち一二三四五六の始終の數字を取り一六番號と名づく其の他皆此の例に準じて知るべし而して一節一舉動なる時は「一八番號を用ゆ」稱法は數を唱へずして矢⁺曳⁺當⁺の掛聲を用ふるも可なり假令は一節二舉動なる時は矢曳と呼び三舉動なる時は矢、曳、當と呼び四舉動以上なれば始終に矢、當を用ひ他は曳々と呼び曳を舉動數に應じて重ね唱ふべし又稱法は斬突打撃部を唱ふるも可なり假令は面を斬突打する時は御面、胴なれば御胴と云ふが如し而して掛聲と斬突打撃部と混用するも可なり但し一呼稱にて二舉動あるものは短急に曳々と呼ぶべし

一、稱法は始めより直れの令ある迄發唱すべく其の唱へ方は舌頭にて發音せずして咽喉にて發音するの心持を以

て高聲短簡且つ活潑にして舉動を終はる時發するを要す

一、各體操其の各節に熟練せる後は連續施行せしむるを常とすべし最初の一節に豫令動令を下すのみにて生徒は每節演技の終りに一と呼びつゝ氣を附の姿勢を取らんとする一の動作を爲し二と呼びつゝ次節の構備を取り續いて行ふ可き者とす且又第一節に於いても動令を省かんとする時は第何節用意又は單に用意と呼ばずして第何節及び節名或は單に各節の名稱のみを呼ぶべし左すれば生徒は一と呼びつゝ用意を爲し續いて動作を始むべき者とすれば大いに便宜なり

一、生徒既に對向演習に迄も熟練せる後ちは適宜進退演習を行はしむべし進退演習とは二回進ましむれば二回退

かしめ二回退かしむれば二回進ましめ或は場所の廣狹により四回進退せしめ若しくは四回退進せしめ或は各自演習なれば幾歩にても進ましめ復幾歩にても退かしめ或は又前進(退却)すべき場所なきに至らば右(左)轉回蹈込して尙ほ定位迄進ましむる如きを云ふ

一、袴の股立は體操を妨げざる限り何時にても取りて可なり其の取り方は袴の前笹稜の中央部を撮みて髀骨の前端に當る帶に挿むべし相引の上部を撮みて髀骨邊に挿むは百姓股立と云ひて古來武士の忌める所なり

一、初段十五節の體育上の説明は主として身體の何れの部分の運動なるやを記述せり是れ我が邦現時の體育社會の進度に適はん事を欲してなり該説明中武器の抵抗力に關する事及び武器を握る屈指筋の運動は其の煩を避

け一々説明せざりしを以て茲に一言し置く者なり
一、豫備體操は初段各自演習教授の前に教へず各自演習教授中必要に應じ教授するも可なり

薙刀體操法初段目次

第一章 薙刀の種類及斬突部 一頁より

第二章 十項 八頁より

一 集合及肩薙刀の體勢 二 整容及休息休息より不動の姿勢 三 整頓右(左)へ準へ直れ 四 對面及解散の禮 五 番號 六 分列法 七 開列法 八 始業終業の藝禮 九 閉列法 一〇 解散の禮 附記薙刀掛

第三章 豫備體操 十四節 三十頁より

一 揃足踏込 二 半身 三 送足 四 飛退 五 膝姿 六 回轉踏込 七 隅飛半回轉 八 片足立 九 圓相 十 張翼 十一 片手突 十二 突拂 十三 脇卷 十四 七分卷

第四章 各自演習 十五節 五十頁より

一 脇構 附 橫構 二 立構 三 胴打 四 下段霞 五 膝掬 六 水車 七 風車 八 下段脚斬 九 突 一〇 打落 一一 脛拂 一二 脚拒面撃 一三 斂

留 一四上段横面 一五隅飛胴

第五章 對向演習 十三節

百五十六頁より

一脇構 二立構 三脚打 四下段霞 五股掬 六水車 七風車 八精

眼脚斬 九立構と下段霞 一〇突と打落 一一下段脚斬と足拒面撃

一二風車と繳留 一三上段横面と隅飛胴

第六章 狹所演習 八節

百六十八頁より

一脇構但し面撃に變ず 二立構 四下段霞 五勝掬 七風車の早交動

及二回轉 八下段脚斬 九突き 十二脚拒面撃

薙刀體操法初段目次終

薙刀體操法 初段

小澤卯之助著

第一章

薙刀の部分、種類、斬突部

第一節 薙刀の部分

薙刀に中身、鞘、中心、鐔、柄、鍔の六部分あり左に之れを細説す
べし

一中身の部分の名稱は刀の部分の名稱に同じと云へども
薙刀には必ず冠落として棟の中途より刀尖に近き部分迄薄
くなれる部分あり而して身の形狀の纖細なるを靜形と云
ひ肥大なるを巴形と云ふ又と反對の部分を刀背又棟とも

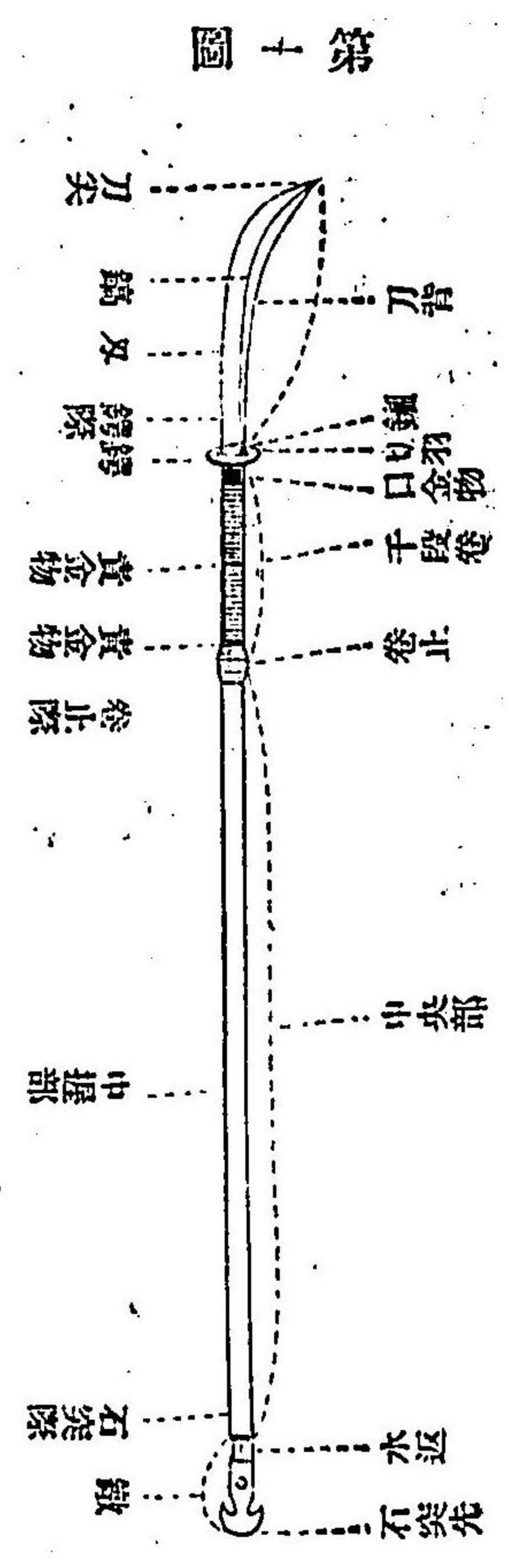


云ふ、刀尖は切先或は鈍子とも云ふ、刀背と刀刃とに並行して鐔際より刀尖に達する稜形を鐔と云ふ、鐔は無き者あり血流は又樋とも云ひ一條より二條三條に達する者あり或は全く無き者あり

二鞘は中身の長さに應じたる者故大身薙刀を除くの外何れも短かく刀鞘に比すれば栗形なく鐙の部分の刀尖状をなせるを異なりとす往々鞘に定紋を畫ける者あり

三中心の部分の名稱も刀の中心の部分の名稱に同じと云へとも刀の中心に比すれば概ね割合長くして稀には鐙に達する者あるを異なりとす中心は或は小身とも云ひ目釘穴一若しくは二三、位あり

四鐔は刀の如く大ならず通常食出鐔と稱し極めて小にして柄より僅かに食出せるのみ又稀れに十字鐔と稱して圓



第一圖

形を成さずして十字形を爲し小ならざる者あり皆上、下に切羽と釦とを備ふること刀に同じ

五柄は千段巻部、素扱部に二分せられ素扱部に鐙際、卷止際、中央部中握部の四あり千段巻部とは通例鐔より下部、中心の挿入しある部分を麻若しくは藤蔓にて捲き漆を塗り又は絹糸を捲きたる者にて中心を挿入する爲めに柄の一部を切り取り他の木を埋めたる部分の抑へなり此部分には口金物及一の責二の責(口金物に近き方より數ふ)三の責と

て數箇の責金物即ち胴輪あり千段捲止(單に捲止とも云ふ)あり一箇若しくは二三箇の目釘穴あり以上千段捲及金物、目釘は何れも薙刀の柄裂け中身を脱離せしめざらんが爲めの功用あるものなり、鐵際は石突に近き部分を云ひ捲止際は千段捲止に近き部分を云ひ中握部は精眼に構へたる時握る可き部分に名づけたるなり

六 鐵に乳頸形、椎實形、銀杏形、錐形等の種類あり何れも一二箇の目釘穴あり又別に少し大なる一個の穴を穿てる者あり此穴は紐類を濡らして貫き、堀崖等に懸け之れを昇降する等功用多し、鐵に接して水返しと稱する金物あり此の金物は體裁の爲めにして差したる功用無きが如し石突の末端を鐵尖と云ふ

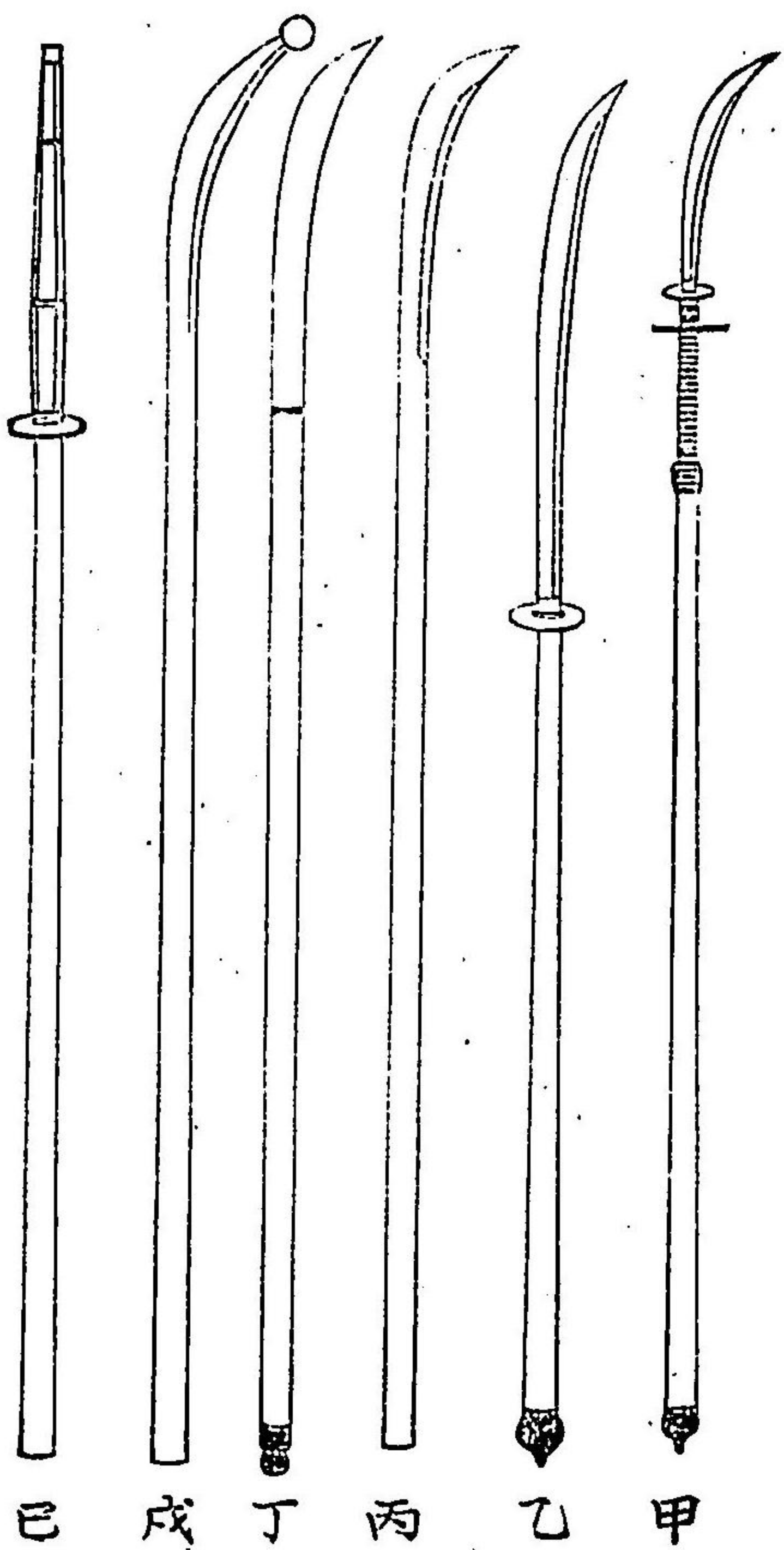
第二節 薙刀の種類

- 一 小鳥とて刀尖より凡そ五寸位の間棟に双の附着する者あり此は小鳥と云ふ名刀が刀尖に兩刃あるに取りて名づけたる者なりと云ふ
- 二 大身薙刀とは中身の長さ三尺内外ありて柄も之れに適へるを云ふ
- 三 袋薙刀とは筒穂に柄を挿入せる者にて中心無きを云ふ
- 四 鍵付薙刀とは鐵の細き方柱を鐔下の口金物に接して表裏に貫けるものなり(第二圖甲)
- 五 薙刀の一種の如くにして中巻と稱する者あり此の武器は長刀に長き柄を着けたる者にて武藏坊辨慶の持ちたるは此の中巻なりと云へり中巻にも亦或は鍵の附着せる者あり(同圖乙)
- 六 型薙刀(法式の稽古薙刀)は全體極製にして薙刀の形狀を

備ふる迄にて鏝なく千段巻なく鍛なく柄と身との境界も

六

第 二 圖



なく只双、棟切先の形状を具ふ(同圖丙)而して鍵付の薙刀には細き方柱を貫けり體操用薙刀は即ち此の型薙刀なれとも著者が昨春より之れに意匠を加へ形法の稽古薙刀に鏝を着け柄を着色し石突を取着け眞の薙刀に摸擬せる者を

製作せり丁圖是れなり

七試合薙刀は型薙刀の刀尖に毬毛ケウモを附着せる者あり(同圖戊)又竹刀を中身の部分に取り着けたる者あり(同圖己)

第三節 斬突打撃部

甲斬打撃部 刃を以て斬撃し得べき左記斬撃部は又柄を以て打撃することを得べし故に斬撃部と打撃部とは畧同一部分なりと知るべし

一面、左右面即ち左右横面 二左右肩 三左右小手 四左

右胸 五胸 六下腹 七脚 八翠丸

斬突撃部

一面 二喉 三胸 四水月 五下腹 六左右胸 七腰、股等

右の如く定むと雖とも眞劍に在りては身體の何れの部分

七

たりとも斬突して効ありと知る可し唯要部に非ざれば其の効少なきのみ

第二章 準備 十項

薙刀體操の準備演習は現行普通體操の方法と違ふ所無しと雖とも往々薙刀體操に適合せしめんが爲め小變し且つ更らに必要なる方法をも添加せるを以て本章には只其の異なる點及び之れに關係せる必要の條項のみを記述すべし

第一項 集合及肩薙刀の體勢

一 集合 體操準備の第一着手として生徒を集合せしめんが爲めに教師は第三圖の如く薙刀(豫備體操なれば右手)を上げ若しくは集まれ一の號令を下す可し

第三圖



此の合圖又は號令を聞くや各生徒は肅々(男子は駈足にて)として一定の場所にて教師に對向し右方より身長の順序に従ひ整列すべし之れを正面整列と云ふ其の整列法左の如し

各生徒は左隣生徒の列に着くとき左掌を髑骨上に當て(四指を前にし拇指を後にし)左肘を正しく側方に張り左隣生の右手に軽く觸れしめ以て左隣生との間隔を取り號令を待つ事なく左手を列中に下す
但し薙刀置場の都合によりては初めより薙刀を把持し集合せしむるを便なりとす

二 薙刀の把持法

左手は自然に垂れ右手は下垂せるまゝ、手指を軽く伸ばし
外股前股の境界線にて薙刀の鍔より凡そ一尺五寸位の部
分を把持す其の把持法左の如し

第四圖



刃を前に向け鍔を地上凡そ五寸許りの高さにて在らしめ此
時右手を前方に平舉すれば薙刀は肩の凹所に擔はれ前後
に一直線上に在るべし柄を拇指柄の左方に當てと食指中
指柄の外前方に當てとの股に支へ他の二指柄の後方に當
てを外つし恰かも筆を握るが如くす而して下端即ち鍔は
垂直より少しく前方に在るべし(第四圖)

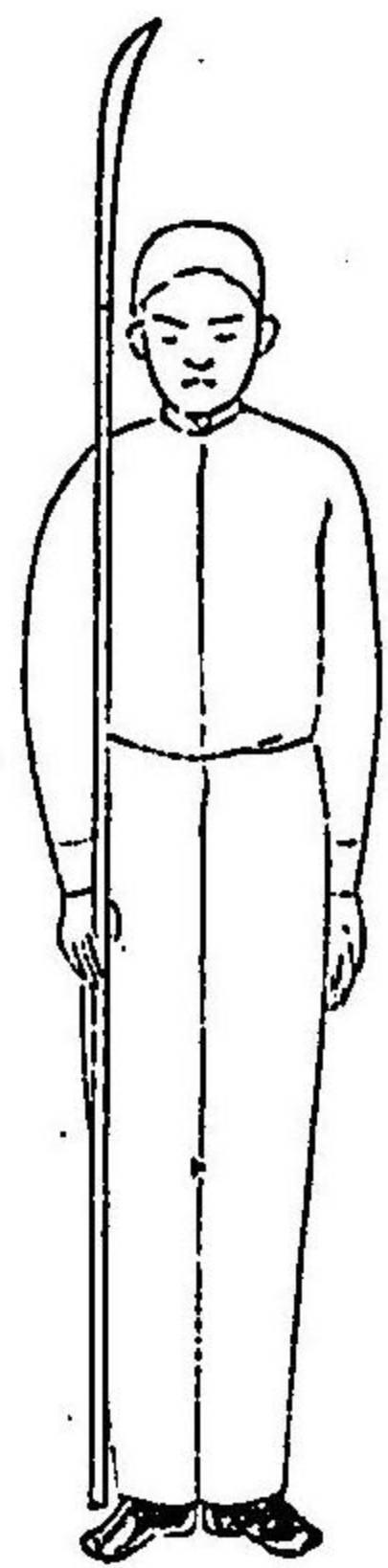
第二項 整容及休息

一 整容 各生徒をして不動(氣を附け)の姿勢を取らしめん

が爲め左の號令を下す

一 氣を附け 此の令を聞くや各生徒は速に兩踵を揃(横)に
一直線上にへて密接し其の指尖を適宜に開(男子は矩形よ
り稍狭く)き兩膝は凝らざる様伸ばし上體を正しく腰に托
し兩肩は故らに張る事なく後方に引きて一様に下げ兩臂
は自然に垂れ指を軽く屈して小指を外股(男子なれば袴の
縫目の後ろに)に當て掌を少しく前に向け頭を自然に正し
く保ち兩眼は前面を直視(地上を見るべからず)し演習を終
りたるるときも必ず此の體勢を保つべし

第五圖



薙刀を持てる時不動の姿勢

生徒は氣を附けの令下りたるときは氣を附けの姿勢のま

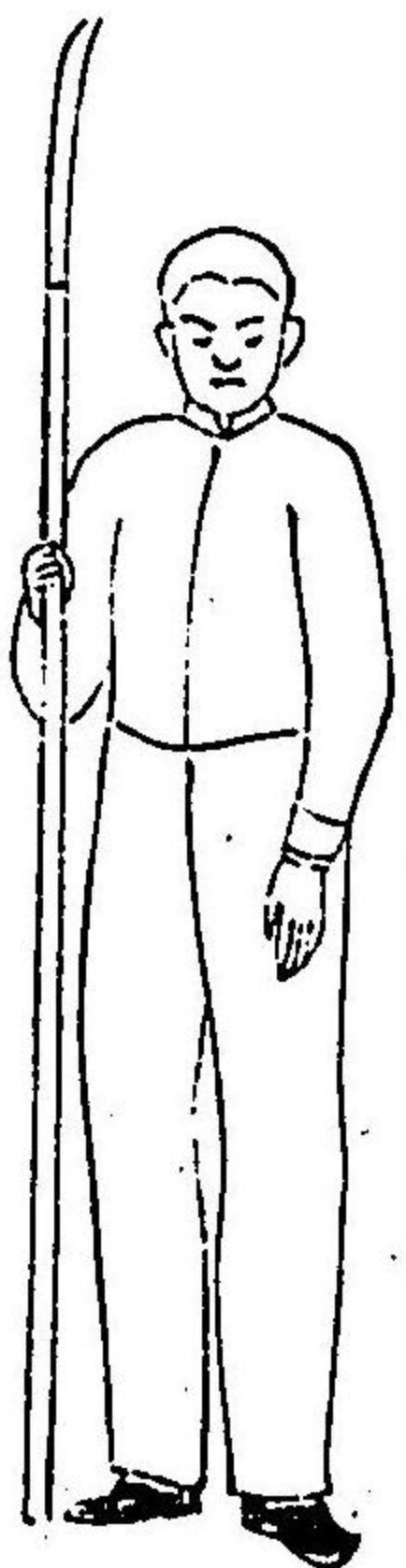
、肩薙刀の體勢を取る其の方法左の如し
 第一舉動 左手を右肩に運び薙刀を軽く握(甲を前にし)る
 第二舉動 左手を列中に下さ(第五圖)
 二休息

教師は各生徒の疲勞度に過ぎん事を恐れ適宜に小時間の休息を爲さしめんと欲するときは左の號令を下す

一、休め

各生徒は一と呼びつゝ、左足を少しく前方に踏出すと同時に薙刀を下げて鍬を地に着けつゝ、右手を扱上げ乳の高さに至らしめ不動の姿勢を崩して休息す(豫備體操なれば唯

第六圖



足を少しく踏出すのみ)

休息中右足を前方に踏出さんとするときは先づ左足を定位に復し後右足を踏出すべし又踏出せる足を定位に退け(兩足を揃へ)たるまゝ、休息するも妨げなし(第六圖)

生徒は休息中談話と見苦しき態度を爲さず又油斷すべからず

三休息より不動の姿勢

休息せるとき不動の姿勢を保たしめんとするときは左の令を下す

一、氣を着け

此の令を聞くや生徒は左の二舉動にて不動の姿勢を取る
 第一舉動 定位にて兩足を揃へると同時に左手にて右手の上部を握りて其の拳を右肩に着け右手を扱き下ぐ

第二舉動 左手を列中に下す

第三項 整頓

一 全列生を右(左)なる首位生に準ひ整頓せしめんと欲するときは教師は左の令を下す

一、右(左)へ……………豫令

一、準へ……………動令

準への令にて薙刀を持てるときは肩薙刀の體勢のまゝ、各生(除首位生)は眼を同列生の眼線に注ぎ靜かに頭を右(左)方に向(左)右眼は體の正中線に在らしめ己れより第三番目の生徒の胸を纒かに見るべし」と同時に左掌を左腕骨上に當(拇指を後方に當て他の四指を密接して前に當つて)左肘は正しく側方に張り右肘は僅かに右隣生の左肘(張り居る)に觸れしむ可し

二 右(左)に準へる生徒をして氣を附けの姿勢を取らしめんと欲するときは教師は左の號令を下す

一、直れ

此の令にて各生徒は肅々たる態度を以て頭を正面に復すると同時に左手を列中に下す

教授上の注意

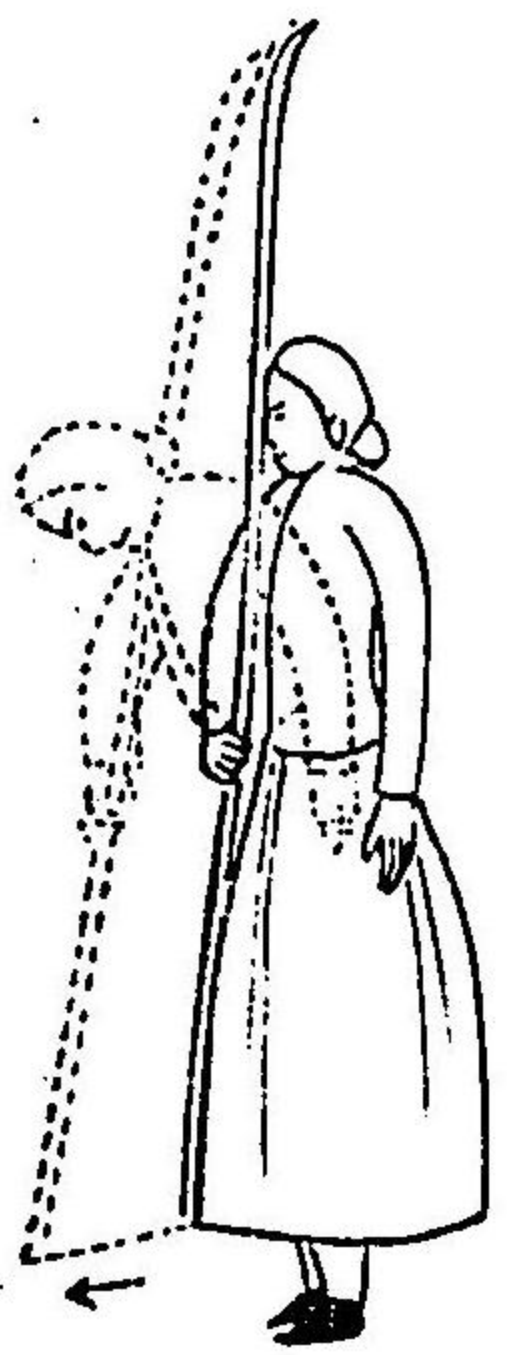
生徒が集合、整容、及整頓に熟鍊せる後ちは「集まれ」の令にて直ちに右へ準はしむるを可とす生徒も體操時間來らば「集まれ」の令を待たず自己の整列すべき整列線中自己の占む可き位置と思しき場所に立ちて教師の合圖又は號令を待つ可し而して分列を作らば首位たるべき各生徒を假りに右翼生と定め假右翼生以下の生徒は各此の假右翼生に準ふべき者とすれば些少の時間にて能く整頓を終るべ

きを以て此の方法に従ふを便利なりとす
又場中に散在せる生徒をして「集まれ」の令にて直ちに各
分列線に整頓せしむるも一の便宜法なり此の場合には教
師は左の號令を下すべし
一、分列線集まれ

第四項 對面の禮及解散の禮

體操準備中始めて氣を附けの姿勢を取りたる時及び演
習を終へ解散せんとするとき各生徒は教師に對し靜かに
敬禮すべし教師も亦生徒の敬禮を待たず生徒と同時に禮
をなすべし其の方法左の如し

第七圖



姿勢を正しくし視線を教師の目に注ぎ教師も視線を正面
生の目に注ぎ體の上部を少しく前方に傾け禮を爲したる
後ち上體を舊に復し再び教師の目に注目すべし
但し肩薙刀の體勢より敬禮を爲さんが爲め上體を少しく
前に傾けたるときは鍬を少しく前方に出でしむ(第七圖)

第五項 番號

番號に四數番號と順數番號とあり四數番號とは四、一二三
四、一二三四、と唱ふるを云ひ順數番號とは一二三四五六七
八等順に數ふるを云ふ生徒に番號を附せんと欲する時は
教官は左の號令を下す

一、四數番號、又は順數番號

此の令にて首位生より順次其の頭を少しく左に向くると
同時に四、一二三四又は一二三四五六等の各番號を唱へ靜

かに頭を正面に復すべし
 各生徒は唱へたる番號を忘れざる様注意すべし
 但し番號は薙刀體操に於いては順數番號豫備體操開列法に於いては四數番號を用ゆることに定まり居るが故に生徒が之れを熟知するに至れる後ちは單に番號と令するも可なり

第六項 分列法

全生を體操場中に適宜に配置せんが爲めに長き一列を數列に分たんと欲するときは左の號令を下す
 一、分列作れ
 一、進め
 進めの令にて整列線上に在る各生中各列の首位生たるべき先頭の生徒は正面に進み同時に首位生以下の生徒は右

向を爲し首位生に追隨して所定の分列線上に達すれば各右向を爲し分列線上を進みて一定の場所迄行き直ちに左向(正面向)を爲し右に準ふ
 次ぎに直れの號令を下して氣を附けの姿勢を保たしむ
 第三節に述べたる如く「分列線集まれ」の號令を下し直ちに分列線に整頓せしめたるときは勿論「分列作れ」進めの號令を下すに及ばず若又側面行進中分列を作らしめんと欲せば全列の先頭生即ち第一列の首位生たるべき生徒の第一分列線に近づきたるとき「分列作れ」進めの號令を下すべし
 各分列線上の距離は大人と小供及薙刀の長短に關係すと云へとも大概六尺とし步數三步とす故に第二列生は三步、第三列生は六步と云ふ如く自己の列名の數字より一を減

じて三を乗ずる者と知るべし
各列の首位生たる可き生徒と分列線とは豫め定め置くべし然れども缺席生のある場合等に各列の生徒数を等しからしめんと欲するときは順數番號を唱へしめ直ちに各首位生たるべき生徒の番號を呼び後ちに「分列作れ」進め」の號令を下すべし

假令ば六十名の生徒を一列八人宛になさんとするときは教師は九番十七番廿五番三十三番四十一番四十九番五十七番と呼び分列作れ」進め」の號令を下すが如し

第七項 開列法

一分列を作りたる後ち列を開かしめんと欲するときは教師は左の號令を下す

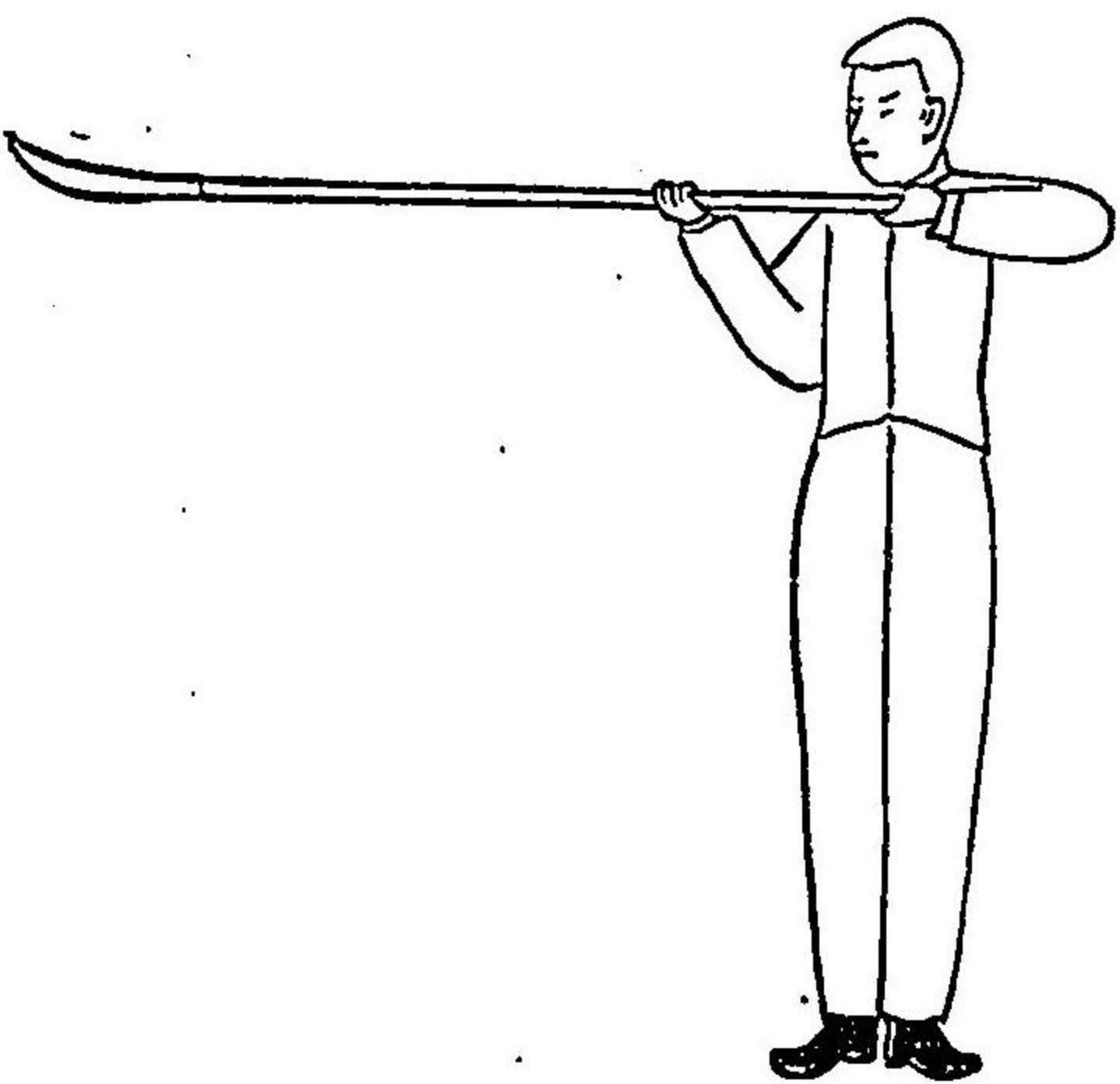
一、開け」

一、進め

豫備體操に於いては先づ四數番號を唱へしめ續いて「開け」進め」の號令を下し各生をして四數番號の數字に等しき步數丈け前に進ましめ薙刀體操各自演習にありては順數番號を唱へしめ續いて「開け

」進め」の號令を下し各生をして左向を爲さしめ各自の番號の數に三を乗ぜし丈けの步數を左足より進ましめ正面をなすと同時に左の方向に従ひ間隔を取らしむ」(第八圖)

第八圖



刀尖(刃を前にし)を右前隅に仆すと同時に左手にて鐲を抑

（甲を上にし）へ其手を喉頭に持ち來り上臂前臂を水平にすると同時に刀尖を右方に至らしめ薙刀を横に一直線にして刃を前にし水平ならしめつゝ頭を右に向け右臂は肘を軽く脇に接着す而して刀尖は右隣生を離るゝ事凡そ一尺とすと雖も熟練せざる内は成るべく廣く間隔を取るを必要とするが故に場所廣き時は二尺乃至三尺とするを可とす

右の如く前後の距離及左右の間隔を取り演習に適當なる位置を定位と名づく即ち一定の位置の義なり

平の解 開列法に於いて刃を前にするは即ち薙刀を平にするなり平にするとは刃を前後又は左右に向くることにて即ち柄の長徑を前後又は左右にし柄の短徑を上下にするを云ふ

又間隔を取る時始め刀尖を右前隅に仆すは萬一過ちて右隣生を打つ事なからしめんが爲めなり

二 對向演習に間隔を取るの法

對向演習に在りては二人を相對向せしめざる可からず故に右の方法により定位を取りたる後ち教官は左の號令を下し對向せしむ可し

一、奇數左へ偶數右へ向け

一、進め

右の方法に依らずして木環體操の對向法によるも可なり即ち先づ「右向け」右の號令を下し次に「奇數廻れ」右の號令を下すも可なり

以上二方法は何れも奇數と偶數とを相對向せしむる方法なれども若し又奇列と偶列とを相對向せしめんと欲する

時は豆囊體操の對向法に同じ方法に従ふ可し其の號令左の如し

一、偶列廻れ

一、右

奇數と偶數とを對向せしむると奇列と偶列とを對向せしむるとは互ひに一得一失あり即ち甲の場合は一列七人、九人と云ふ如く奇數なる時は一列は對手を得る能はざる可き不便あれども對手を得る能はざる末位の奇數生に限り偶列生を廻れ一右をさせ相對向せしむ可し教官が全生の演技を見通すに便利なり乙の場合に在りては教官が全生の演技を見通す能はざる不利あれども何時も對手を得る能はざる不利なし故に教官たる者は生徒の數場所の廣狹、日向き如何等を考へ適宜二方法の内一を擇ぶ可し

三狹所演習に間隔を取るの法

第六項により分列を作りたる後ち教官は左の號令を下す即ち豆囊體操の間隔の取方に同じ

一、小間隔左へ

一、進め

又棍棒體操の間隔の取方に従ふも可なり

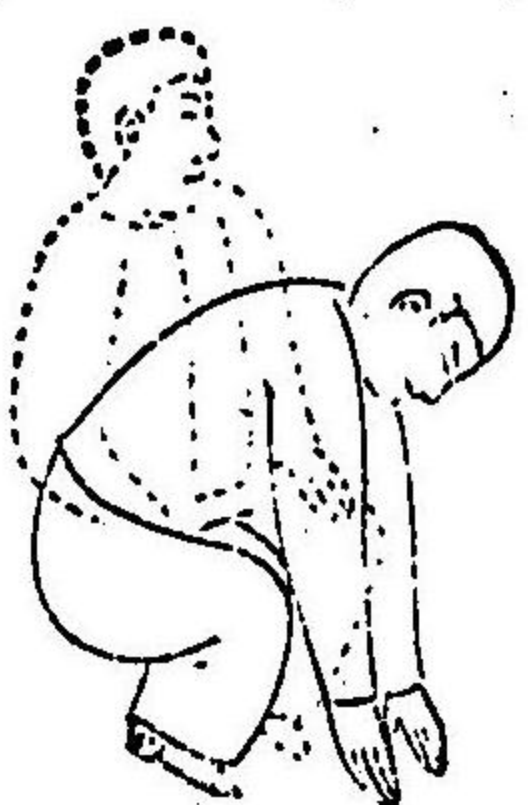
場所廣き時は我が指頭と右隣生との間を一尺位隔てしむべく又場所狹き時は我が指頭を右隣生の肩上に載せしむ可し

第八項 藝禮

藝禮は教師と生徒との別なく互ひに演習の終始に行ふ者にして定位を取りたる後ち及終りの號令下りたる後ち靜かに行ふべき者なり其の始業の時行ふを始業の藝禮と云

ひ終業の時行ふを終業の藝禮と云ふ其の方法左の如し
一氣を附けの姿勢即ち肩薙刀の姿勢にあるとき右手にて
薙刀を前方に仆し刃を内にし前後に一直線ならしめ右脇
に置き兩膝を屈し兩足を爪立て(女子は兩膝を開かざるも
可なり又女子は土間に非ざる場所なれば兩膝を地に着く

第九圖



三上體を直立せしめて一の姿勢に復す(第九圖)

るも可なり何れにしても一律に行は
しむるを要す(臀部を兩踵にて支へ兩
掌を兩膝上に置き上體を正直に保ち
視線を正面の眼の高さに注ぐ對向者
ある時は互に注目す
二兩掌を下げ指頭を僅かに地に觸れ
しむると同時に上體を屈め禮を爲す

四右手にて薙刀を取り起ちつゝ氣を附けの姿勢に復す
熟練せる後ちは舉動を唱へず各生をして肅々として一齊
に行はしむべし

第九項 閉列法

終業の藝禮を行ひたる後ち列を閉ちしめんと欲する時は
教師は左の號令を下す

- 一、右詰め
- 一、進め

此の令にて各生徒は靜かに右向きを爲し最初分列を作り
たる位置に向て左足より進み左向(正面)を爲し右に準ふ
直れの令にて正面に復し氣を附けの姿勢を保つ

第十項 解散

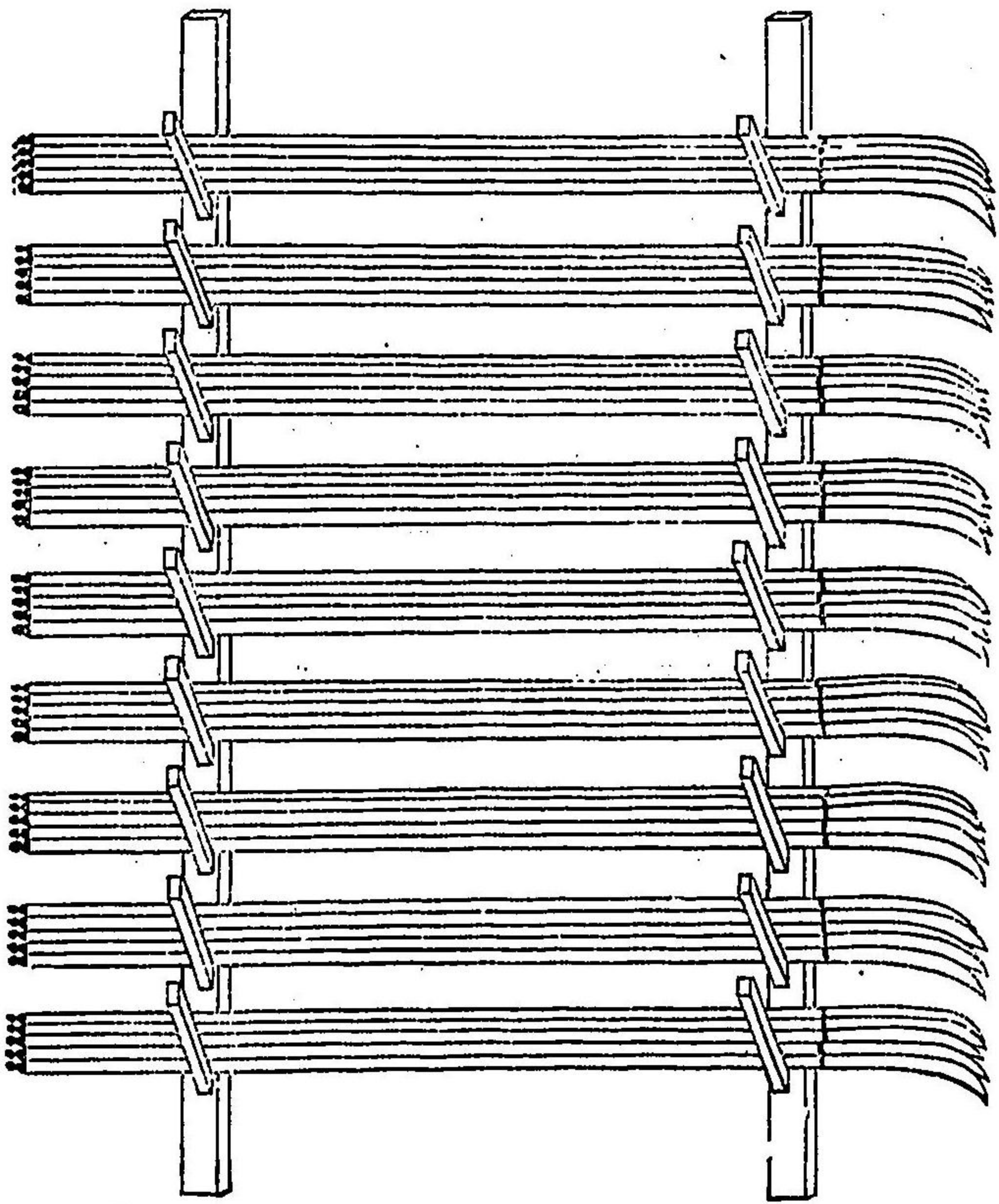
前項直れの令にて氣を附けの姿勢にあるとき直ちに解散

せしめんと欲するときは教師は第四節の要領に従ひ生徒と共に解散の令を行ふ可し解散の禮を行ひたる後ち右左向きを爲さしめ第一列(末列)より順次各列に及ぼし側面行進を爲さしめ薙刀を薙刀掛に掛け置かしめ隨意解散を爲さしむるか或は薙刀を置き順次に側面行進を爲して全隊を停止せしめ「左右」へ正面直れの令にて整頓せしめ又解散の禮を爲して解散せしむるも可なり

附記 薙刀掛第十圖

薙刀は左圖の如く刀尖を右にし刃を上にし一段に數本を掛け置くべし而して取る時も掛け置く時も漸次上方の段より下方段に及ぼす可く定め置くべし
此の薙刀掛に球竿を掛け置く時は普通の球竿懸に比し場所を要すること多からず且つ廉價にて辨する利あり

第十圖



第三章 豫備體操 第十四節

豫備體操は薙刀體操を修練せんとする前豫備として行ふべき一種の矯正術とも徒手體操とも云ふ可き者にして身體各部均齊の發達を遂げしむると同時に進退を敏捷にし各機關の凝硬を解消し成育の不正を矯正し諸の動作に慣れしめ薙刀體操の習熟を容易ならしむるを以て目的とす附記 此體操は薙刀體操のみならず劍術、懷劍術、棒術、柔術等の諸武術を學び又此等諸武術を應用せる運動をなさんとする豫備演習として適當なる者なり

第一節 稱名 揃足踏込 二舉動

此運動を始めんとする時は教師は左の號令を下すべし(以下略之)

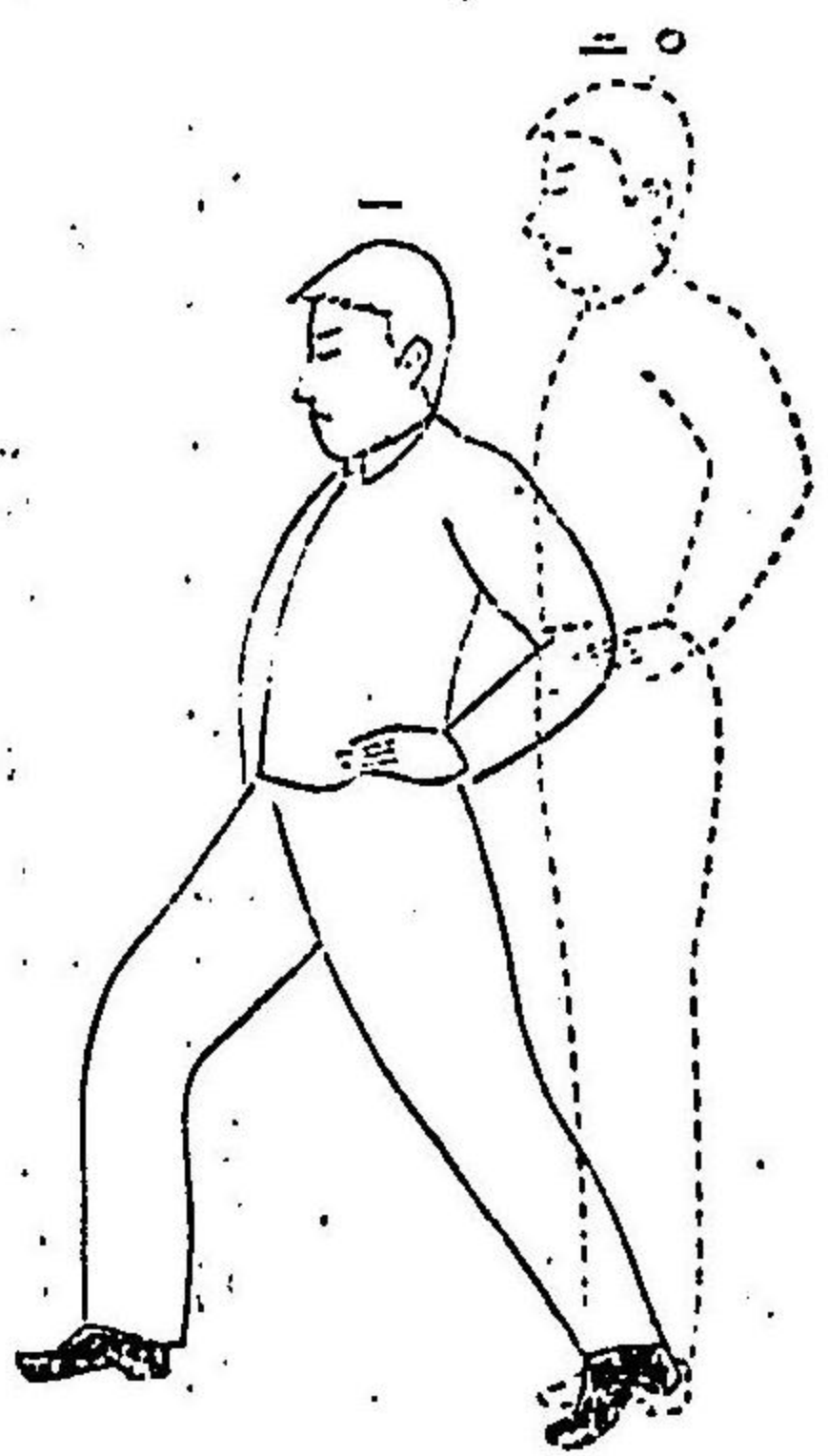
一、揃足踏込(豫令) (以下略之)

一、始め (動令) (以下略之)

氣を附けの姿勢にあるとき揃足踏込の豫令にて兩掌を兩髖骨に當て用意を爲す(第九圖點線圖) 但し凡へて豫令は名稱を呼ばずして第何節と呼ぶも可なり(以下略之)

始めの動令にて左の動作を始む(以下略之)

第一舉動 以後第一舉動を略して一とし第二舉動を二とす第三舉動第四舉動等又之れに準ず



第一節 第十圖

右足を一步前に踏込み左足を爪立て兩脰を少しく屈し體重を兩足に等しく托す 但し踏込む時は爪先きよ

り蹈着け漸次全蹠を蹈着くべし以下之に倣ふ
二右足を舊位(定位)に退く(第十一圖)

此の如くして四回之れを行ひ次ぎに左足を踏出して右と
同一の動作を四回行ひ續いて四回左右交動(左右交動とは
左右交互動作の略なり)を行ふ但し四回目(第二舉動は左
足を定位に復するや否直ちに右足を一步前に踏込み一八
番號を用ゐる左の動作をなす

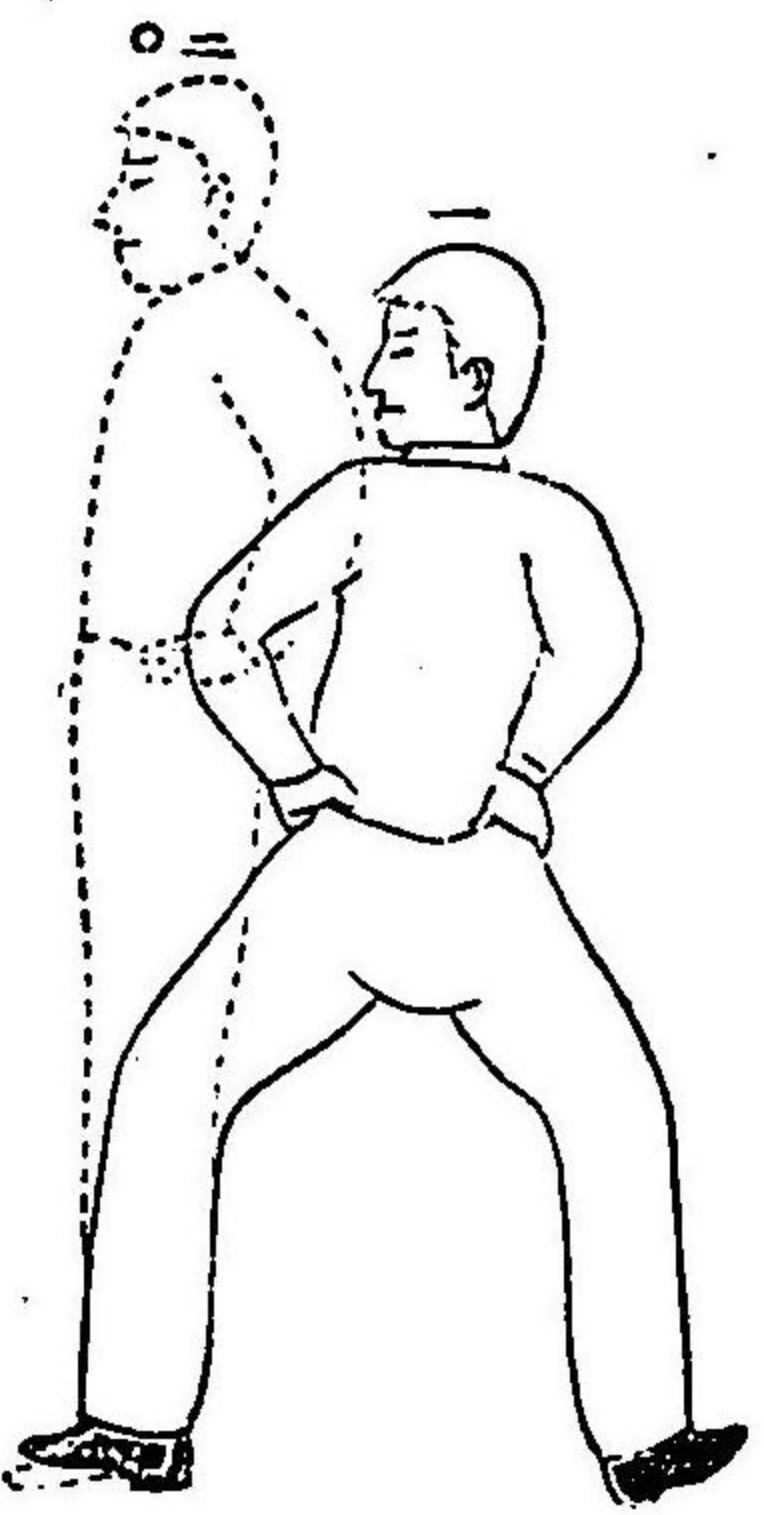
一右足を定位に復するや否左足を一步前に踏出す
二左足を定位に復するや否右足を一步前に踏出す

此の如く左右交互に八回行ふて後ち直ちに一と呼びつゝ
右足を定位に復し兩手を列中に下し氣を附の姿勢を取り
二と呼びつゝ兩掌を左右各髖骨に當て次節の用意を爲す
何れの演習に在りても定位を離れざる様注意すべし

第二節 半身 二舉動但し早交動は一舉動

一右足を後方に一步退くと同時に體を右に向け頭は動
かさず正面の儘にす(是れ左半身を敵に向くるが故に左半
身と云ふ)

第二節 第二十圖



二右足を定位に進め體を
正面に復す(第十二圖)

此の如くして四回之れを
行ひ次ぎに左足を退け右
半身に構へ前と同一の運

動を四回行ひ續いて四回左右交動を爲し又續いて一八番
號を用ゐる左右早交動を八回行ひ一と呼びつゝ右足を定位
に進め氣を附けの姿勢を取り二と呼びつゝ左足を一步退
くると同時に兩掌を兩髖骨に當て次節の用意を爲す

但し左右交動の四回目の第二舉動は早交動を爲さんが爲め左足を定位に進め兩足を揃ふるや否右足を退けて左半身に構ふ

半身の早交動とは一右足を定位に進め體を正面するや否左足を退け右半身に構へ二左足を定位に進め體を正面するや否右足を退け左半身に構ふを云ふ

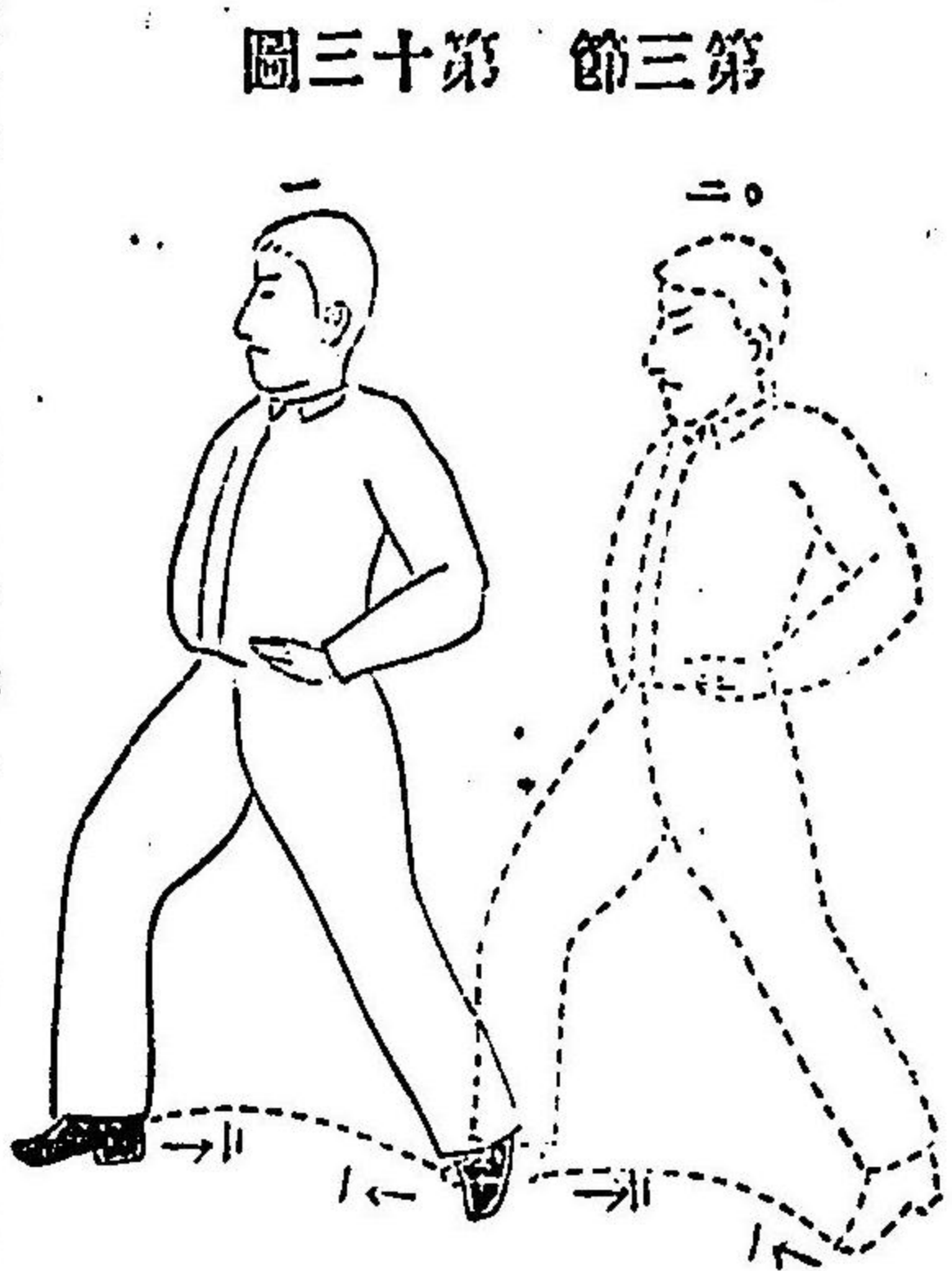
第三節 稱名送足又連足とも云ふ(二舉動)

一前足なる右足を前方に踏込むや否其踏込たる距離程左足を連れ進む(第十三圖)

二左足を後方(舊位)に退くるや否右足を連足にて定位に退く

(注意) 進むときは前足の踵を少しく擧げ體重を後足に托し後足にて地を蹴るが如くして前足より進み後足を爪立

て置き退くときは前足に力を入れ前足にて地を蹴るが如くして後足より退くべし又進みたる時も退きたる時も兩足の距離は必ず一步の間隔を取るを要す



此の如くして四回之れを行ふ但し四回目の第二舉動は前足なる右足を後方に退け左足を定位に置く
次に左足より踏込み右と同一の運動を四回行ふ但し

四回目の第二舉動は前但書に同じ
續いて四回目の動作により四回左右交動を行ひ一と呼びつ、左足を定位に進め氣を附けの姿勢を取り二と呼びつ、右足を踏込むと同時に兩掌を兩髖骨に當て次節の用意

を爲す

第四節 名稱 飛退 二舉動

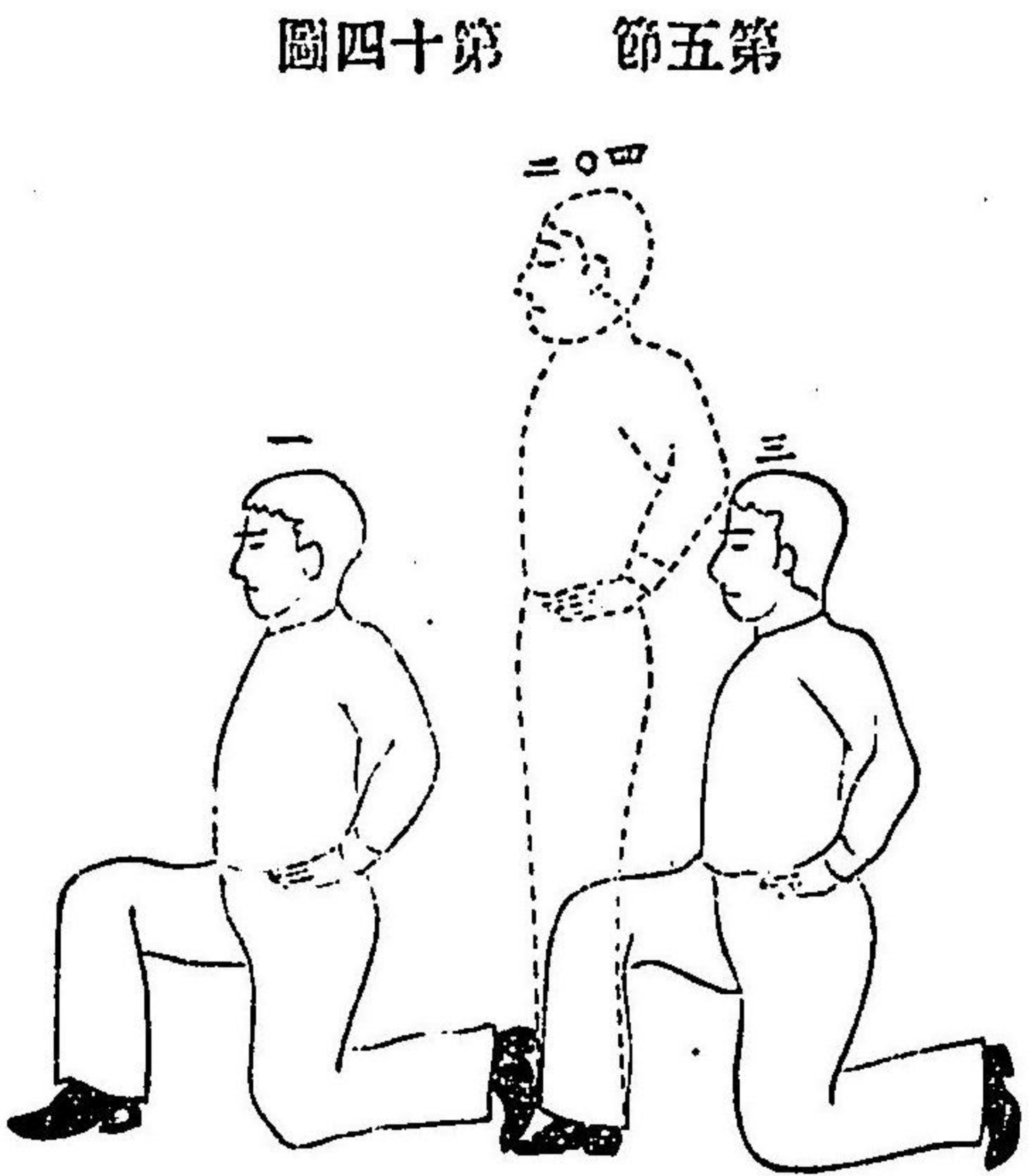
一 兩足にて飛退(足尖より蹈着くべし)き右半身の姿勢を取り
 二 飛進み舊位に復し舊姿勢を取る
 (注意) 熟練するに従ひ飛退飛進みの距離多大なるを得べし

此の如くして四回之れを行ふ但し四回目の第二舉動は飛進みつゝ體を右に轉回して右足を舊位に置き左足を前方即ち舊右足の位置に置き用意(左半身)の姿勢を取る
 次ぎに左半身にて前と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は前但書に同じ
 續いて四回目の動作により四回左右交動を行ひ一と呼び

つゝ右足を定位に退け氣を附けの姿勢を取り二と呼びつゝ
 兩掌を兩髁骨に當て次節の用意を爲す

第五節 名稱 膝姿 四舉動但し早交動は一舉動

一 左足を踏込むと同時に右膝を地に着け右足尖を爪立(其の指腹を地に着く)つ之れを右折敷(右膝姿)と云ふ



第五節 第四十圖

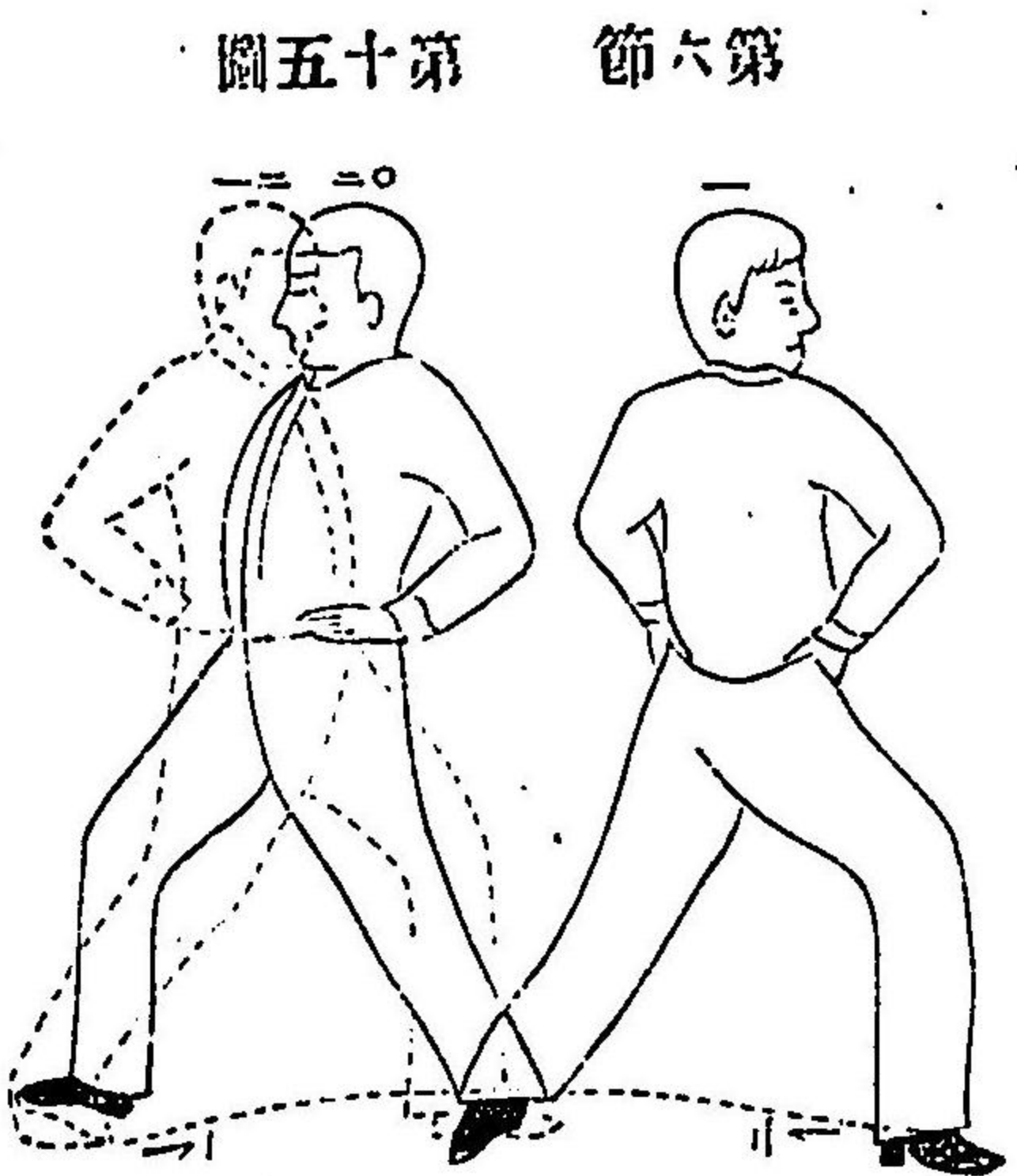
二 立ちて左足を定位に復す
 三 右足を退け右膝を地に着け第一舉動の姿勢をなす
 四 立ちて右足を定位に進む

第十四圖は左膝姿の説明なり
 此の如くして二回之れを行ひ次に左膝を地に着け前と
 同一の動作を二回行ひ續いて左右早交動を行ふ其方法は
 一揃足踏込右膝姿を爲す(左足を踏込む)
 二起ちつ、飛違(右足を前方に踏込み左足を後方に退け)へ
 左膝姿をなす
 三起ちつ、飛違へ右膝姿に變ず此の如くして八回之れを
 行ひ一と呼びつ、右足を定位に退け氣を附けの姿勢を取
 り二と呼びつ、右足を進むると同時に兩手を兩髖骨に當
 て次節の用意を爲す

第六節 稱名 轉回踏込 二舉動

一兩足尖にて左轉回を爲すや否右足を前方(舊背面)に踏出
 す(第十五圖)

二右足を舊位に復するや否兩足尖にて右轉回を爲し用意
 の體勢に復す



此の如くして四回之れを行ふ但し四回目の第二舉動は右
 足を左足の側(定位)に退け左
 轉回を爲しつ、左足を前方
 に踏込む
 次に右轉回をなし前と同
 一の運動を四回行ふ但し四
 回目の第二舉動は前但書に
 同じ

續いて四回目の動作により四回左右交動を行ひ一と呼び
 つ、右足を定位に退け氣を附けの姿勢を取り二と呼びつ
 、左足を退くると同時に兩掌を兩髖骨に當て次節の用意

をなす

本節は熟練せる後は教官は適宜に轉回踏込折敷の號令を下し一の姿勢の後足の膝を地に着け膝姿をなさしむ可し

第七節

名 稱 隅 飛 半 轉 回 二 舉 動

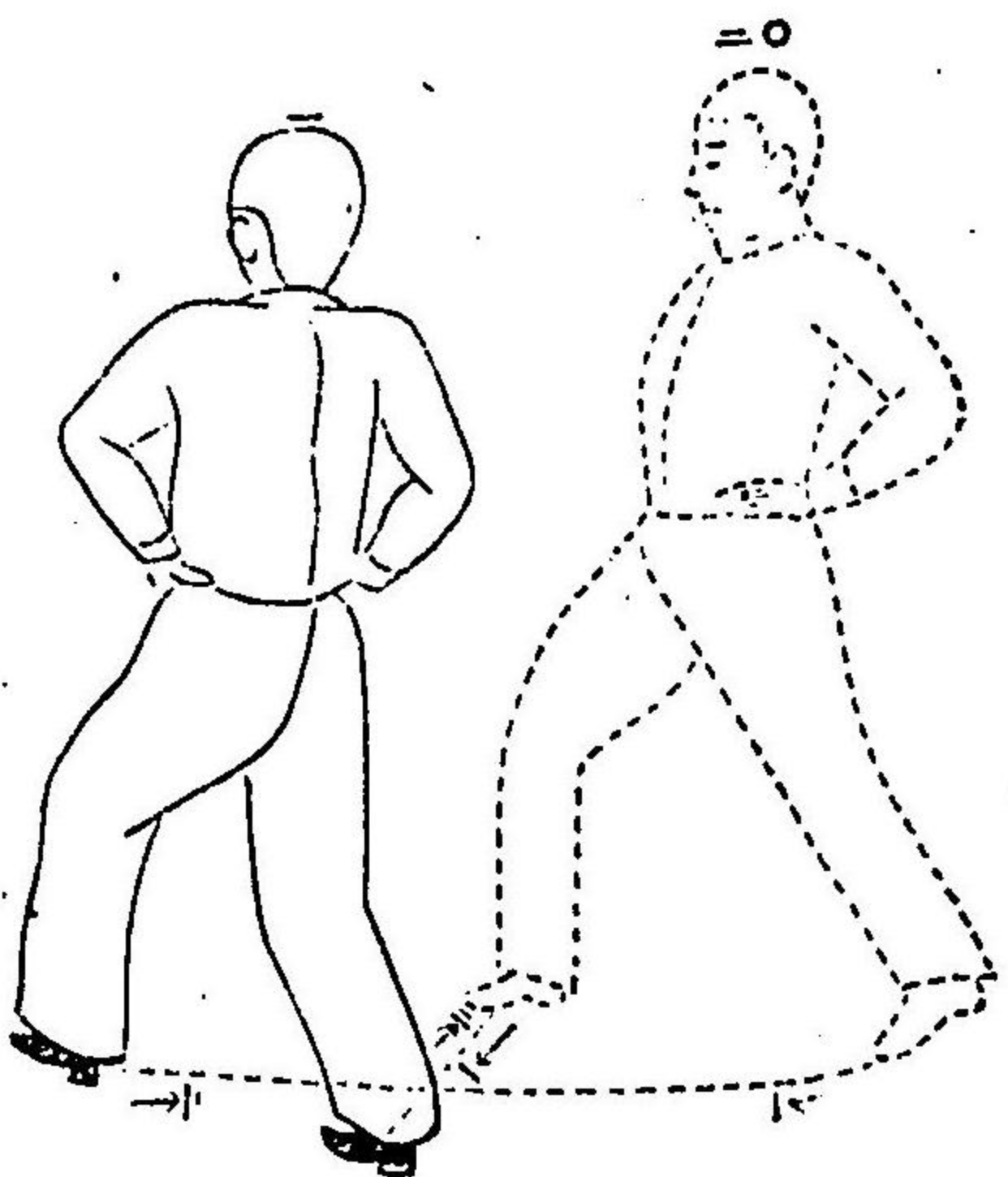
一 後足なる左足を左前隅に踏込み其の足尖を軸とし右前隅を向きつゝ右足を後方(左後隅)に移す

二 右足より舊位に復す(第十六圖)

此の如くして四回行ふ但し四回目第二舉動は右足を定位より一步後方(右構にて左足の在りし所)に退け左足を連足にて定位に退け構を變ず

次に左構にて前と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は右但書の方法により右構に變ず續いて變ずる

第七節 第十六圖



方法により四回左右交動を行ひ一と呼びつゝ左足を定位に進め氣を附けの姿勢を取り二と呼びつゝ右足を踏込み兩掌を兩腕骨に當て次節の用意を爲す

附記 生徒が豫備體操の各節に熟練せる後は教官は適宜隅飛轉回又は隅飛踏込の命令を下し本節を小變して演習せしむ可し

(1) 隅飛轉回の隅飛半轉回と異なる所

隅飛半轉回は後足を四十五度轉回し上體は右前隅を向く者なれども隅飛轉回は後足を百三十五度轉回せしめ

て上體は右後隅を向くにあり

(2) 隅飛踏込 四舉動(二回)

一 右足を右前隅に踏込むや否左足を右足の前方に踏込み上體は正面を向き顔面は左前隅を向き敵に注目す

二 左足より舊位に退き用意の姿勢に復す

三 左足を左前隅に踏込むや否直に右足を左足の前方に踏込み上體は正面を向き顔面は右前隅を向き敵に注目す

四 左足より舊位に復し用意の姿勢に復す

構を換ふるときは前足を定位より一步後方に退け後足を連足にて定位に退くべし

前述隅飛の半轉回、轉回踏込とも熟練せる後ちは教官は適宜折敷動作を爲さしむ折敷は必ず後脚の膝を地に着くべし

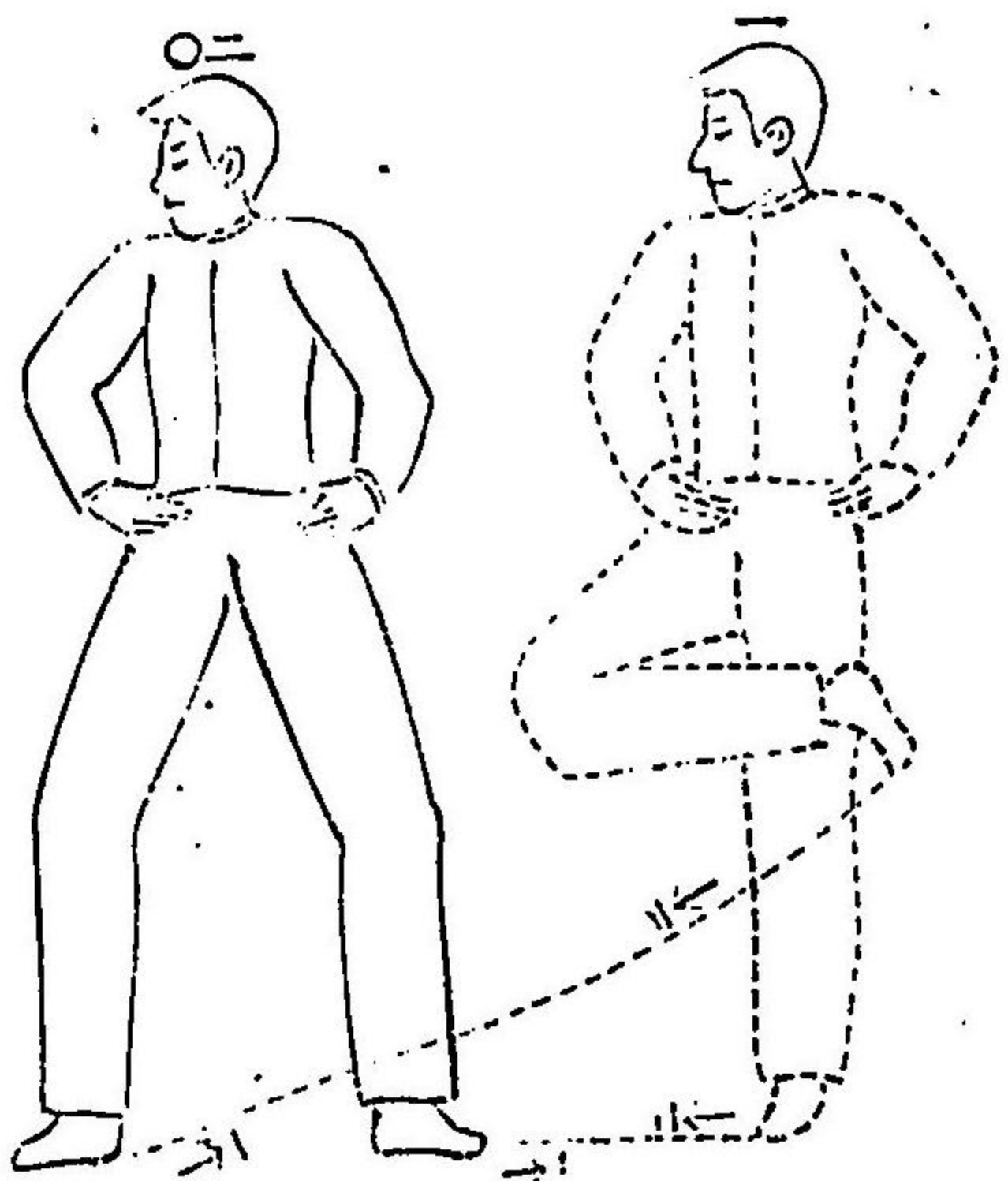
第八節 名 稱 片足立 二舉動

一 送足にて退くと同時に右足を左後方(右足頸を左腿部に擦上げ右膝を成る可く高く上ぐ)に上げ

二 左足より進み構の姿勢に復す(第十七圖)

此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は右足を定位に踏着け左足を定位の一步前に踏込み左構に變ず次ぎに左構にて

第八節 第十七圖



右と同一の運動を四回行ふ其の四回目の第二舉動は右構に變ず

續いて四回左右交動を行ひ次ぎに一八番號にて左右早交

動を爲す其の方法左の如し

- 一 右足を左後方に上ぐる事前述の如くす
- 二 右足を地(定位)に踏着くると同時に左足を上ぐ(上げ方は前述の如し)
- 三 左足を定位に踏着くると同時に右足を上ぐ

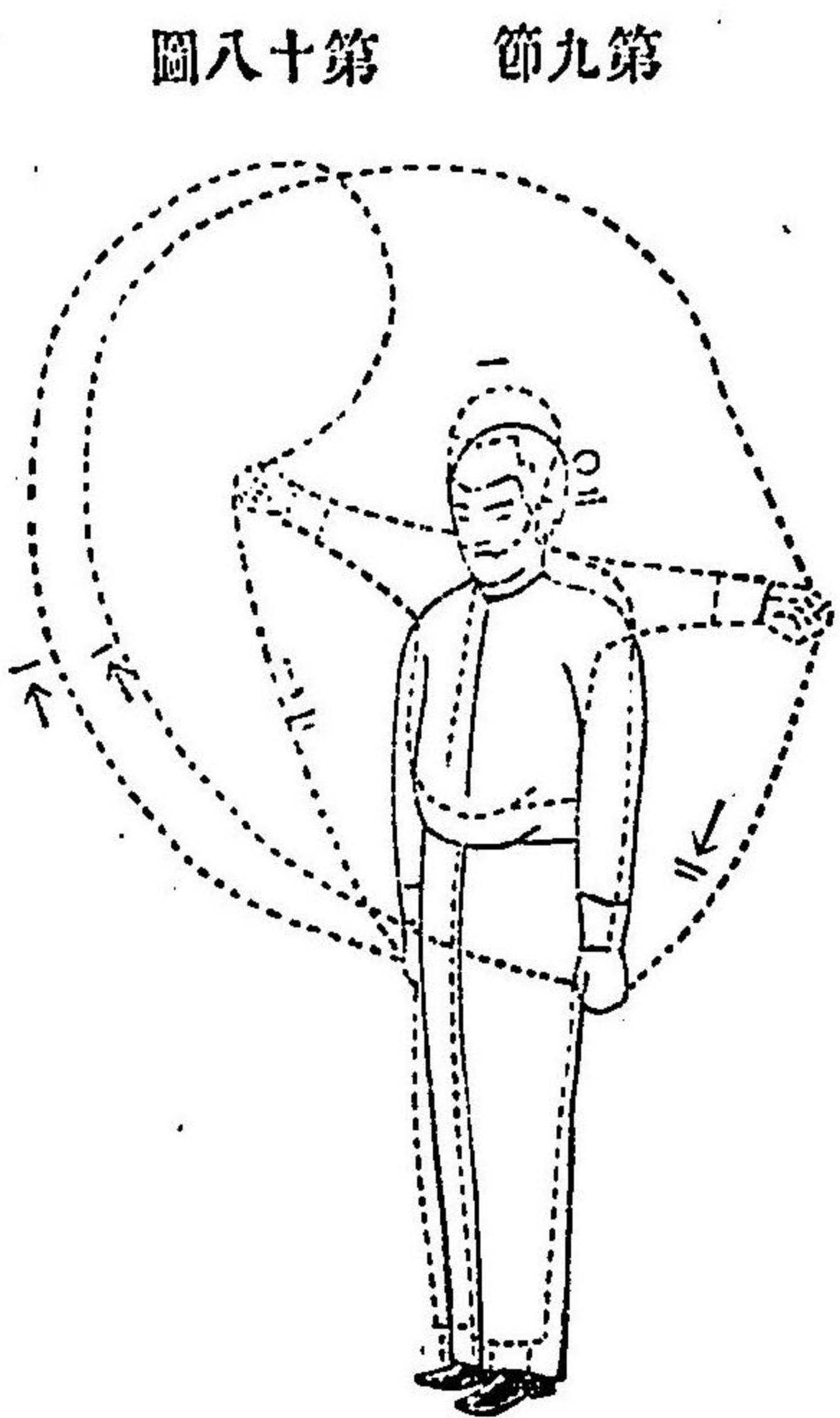
此の如くして八回行ひ一と呼びつゝ左足を定位に踏着くると同時に両手を列中に下し氣を附けの姿勢を取り二と呼びつゝ両手を緊握し爪を内にし軽く股に着け次節の用意を爲す但し緊握の方法は先つ四指を屈し次に拇指を人指指の外側に屈す

第九節 名圓相 二舉動(四回)

此の名稱及方法は眞影流の型より取れり

- 一 兩踵を上ぐると同時に兩臂を屈する事なく靜かに正面

より頭上に直舉(爪を外にし兩手甲を接する如くして)し側面より肩と水平の位置まで下げつゝ成る可く後方に張開(爪を上にして)吸息す

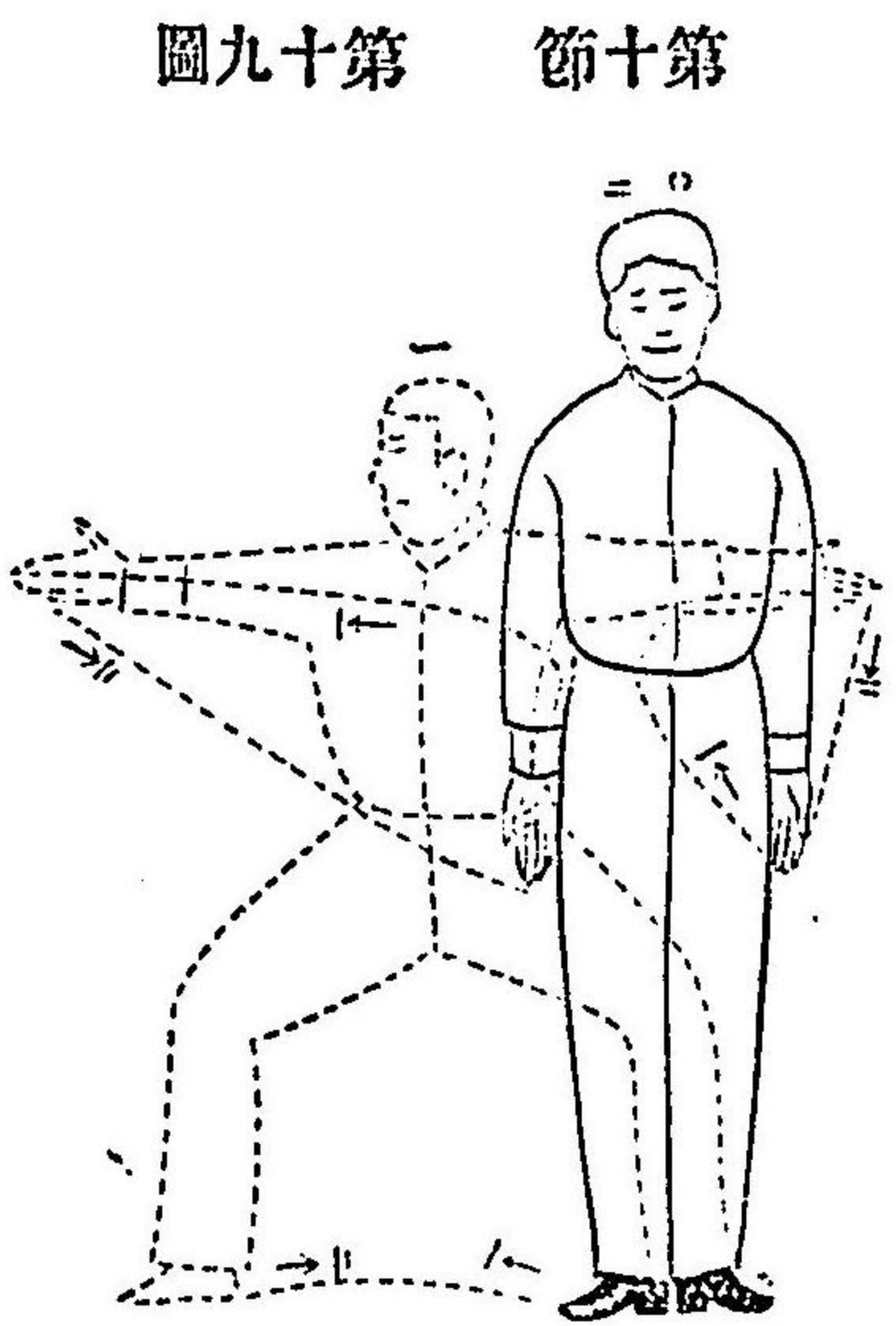


二 兩臂を屈する事なく下垂して軽く外股を打つと同時に兩踵を下げ呼息す(第十八圖)

此の如くして四回行ひ一と呼びつゝ掌を開きて氣を附けの姿勢を取り二と呼びつゝ兩手を緊握すると同時に左向を爲し面は依然右向(即ち正面)を爲す是れ次節の用意の姿勢なり

第十節 名 稱 張翼 二舉動

右足を右側方に踏込(少しく兩膝を屈し腰を下げ體量を兩足に等しく托す)むと同時に兩掌を前方に平舉(掌を内にして)するや否兩側方に張開し(掌を前にして)吸息す



第十節 圖九十第

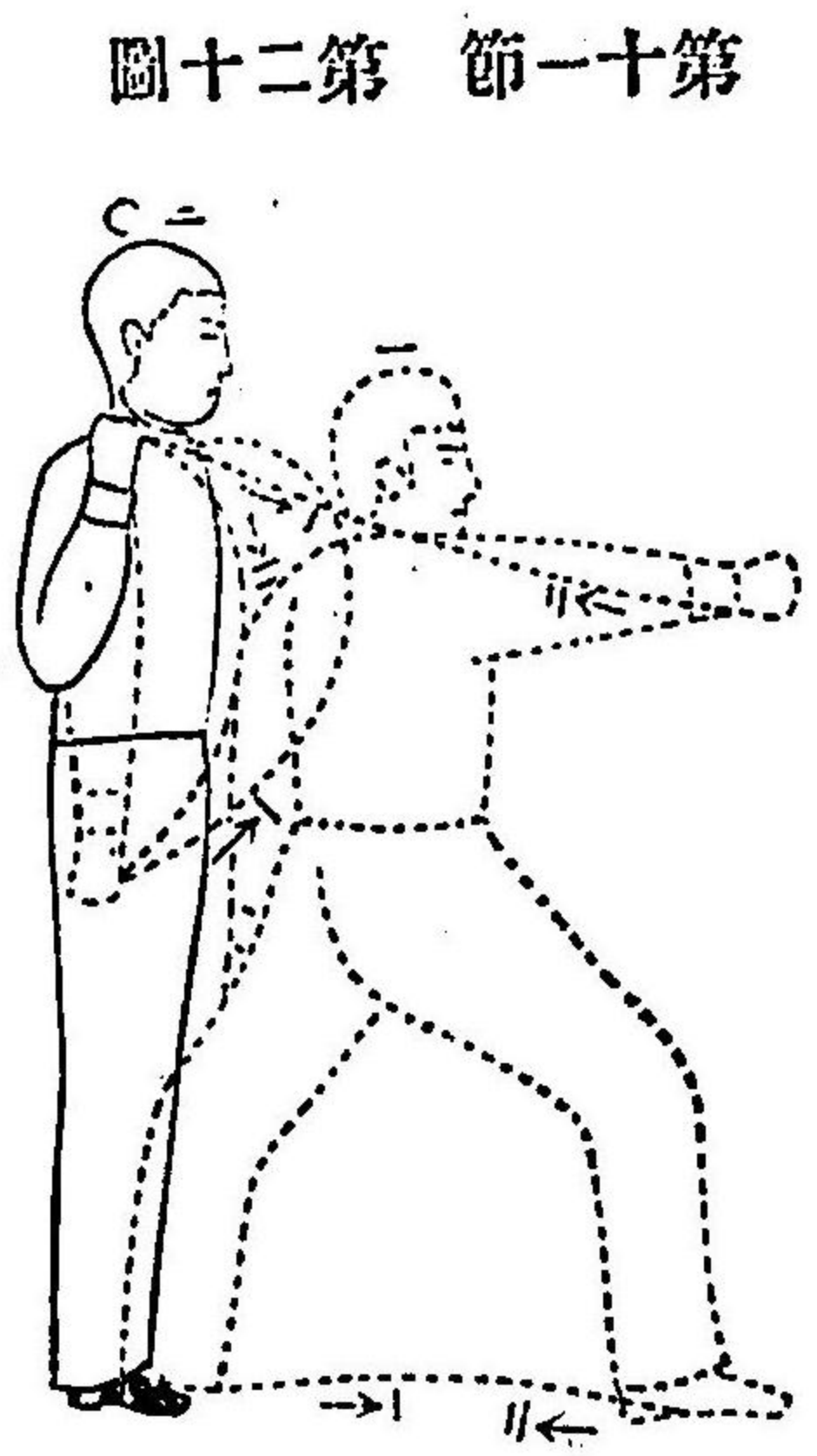
左方にて四回行ひ續いて左右交互に四回行ひ一と呼びつゝ、右向を爲し氣を附けの姿勢を取り二と呼びつゝ、兩手を緊握し次節の構を取る但し左構は面を左向にす

二右足を舊位に復すると同時に兩臂を下げ兩手を緊握しつゝ、軽く外股を打ち呼息し構に復す(第十九圖)

此の如くして四回行ひ又

第十一節 名 稱 片手突 二舉動

一右肘を前上方に折り拳(爪を内にして)を右肩の高さに上げつゝ成るべく肘を後方に引き右足を踏込むと同時に右臂を正面に水平に伸(爪を内に)し(ばして)前を突く如くす



第十一節 圖十二第

二右足を舊位に復すると同時に肘を前上方に折りて強く後方に引き拳を右肩の高さに持來り直ちに之を列中に下だす(第二十圖)

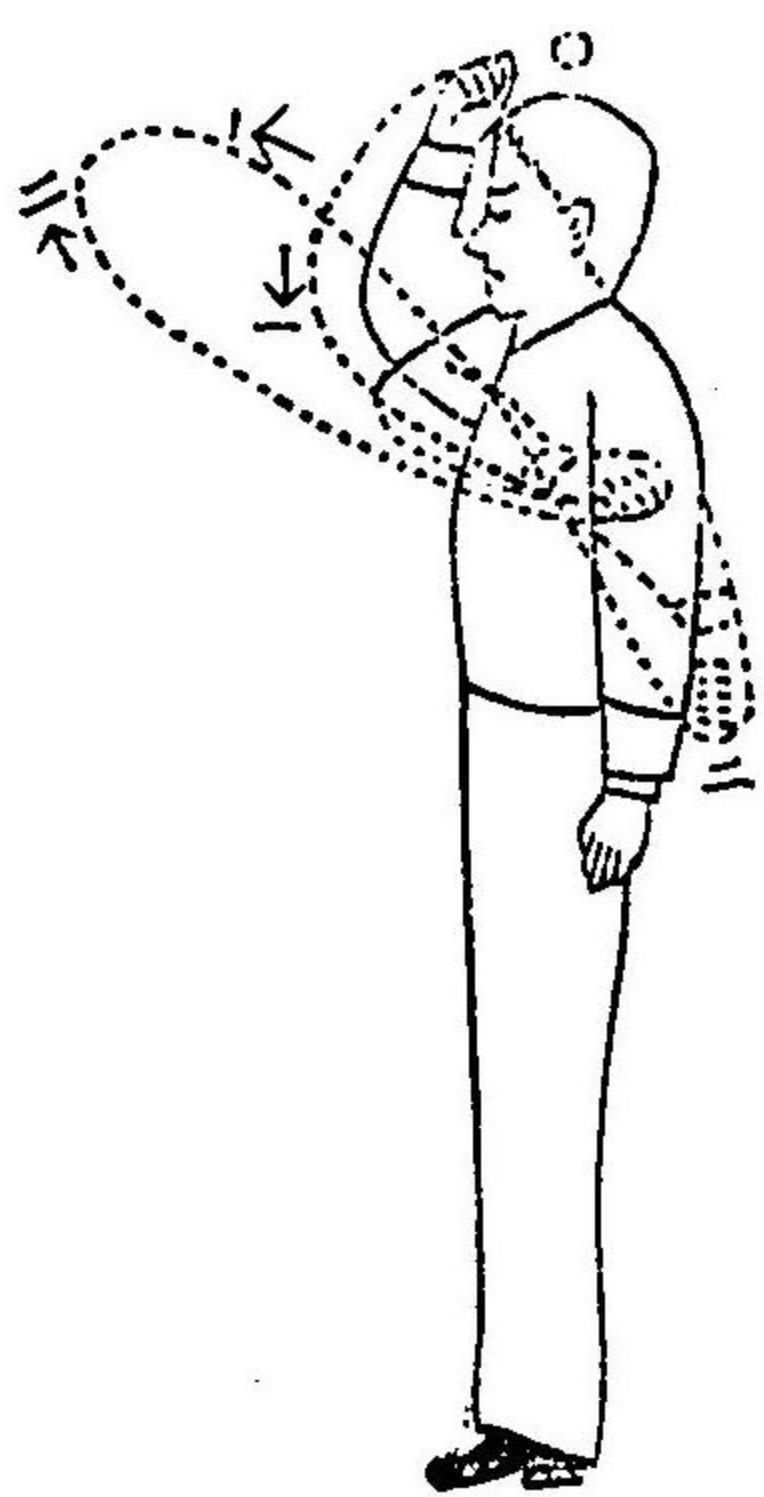
此の如くして四回之れを行ひ續いて左手左足にて同一の運動を四回行ひ續いて四回宛左右交動及び左右合動を行(但し此合動は兩足を動かすこと無く且つ爪を上にする)ひ一

と呼びつゝ、氣を附けの姿勢を取り二と呼びつゝ、兩手を緊握し右拳を頭上に冠り上段に構ふ

第十二節 名稱 突拂 二舉動

一 右拳を斜めに左下方に揮りて左後臂の外中部を打(爪を内にし)つ

第二十節 第一圖



二 右拳を前、右、後下、左方に揮りて前臂の脊にて成るべく脊の上部を打つ但し二回目以後の第一舉動は第一回の二舉動の脊打の

姿勢より一舉動を行ふ(第廿一圖)

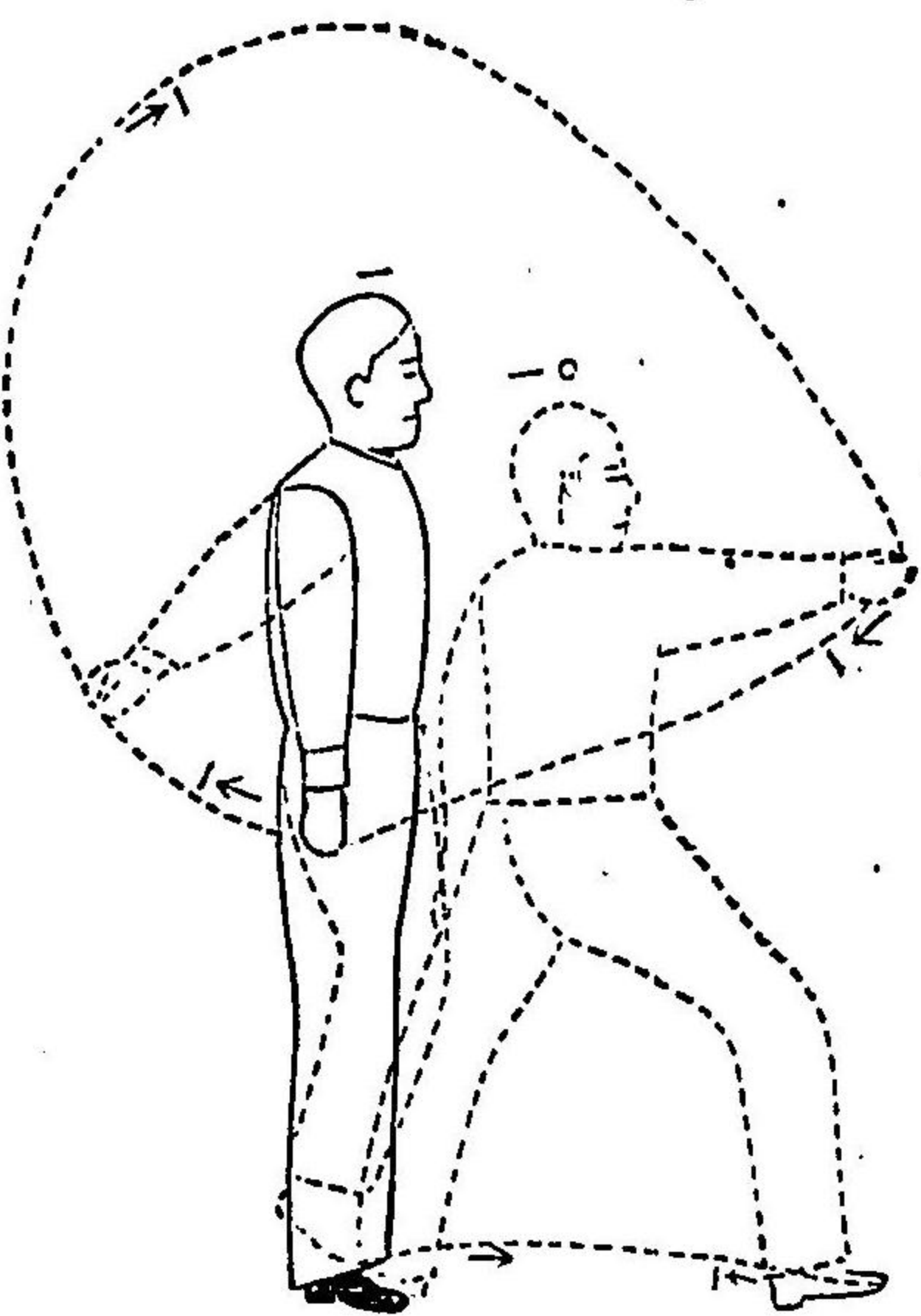
此の如くして四回行ふて後ち一と呼びつゝ、右拳を列中に下し二と呼びつゝ、左拳を頭上に冠る事前の如くし左手に

て前と同一の運動を四回行ふて後ち一と呼びつゝ、左拳を列中に下し二と呼びつゝ、兩拳を頭上に冠りて右構の揃足上段に構へ續いて左右合交動を爲す其の方法左の如し
一 同時に兩拳を左(右)下方に斜めに揮りて左臂を下にし右臂を上にして左(右)後臂の後側上部を打つ
二 同時に兩拳を前(左)右(後)下、右(左)方に揮り右拳を上にし前臂の脊を以て成るべく脊の上部を打つ
第二回目の第一、第二、兩舉動は右臂右拳を下にし左臂左拳を上にする
此の如く(兩臂兩拳を交互に上下)して四回行ふて後ち一と呼びつゝ、掌を開きて兩手を列中に下し二と呼びつゝ、兩手を緊握し右足を踏出すと同時に右拳を正面に平伸(爪を内にし)す

第十三節

名脇卷 一舉動

一右足を定位に復し又踏出すと同時に體の右側に於いて右臂を下、後上、前方に廻はして用意の體勢に復す(第廿二圖)



圖二十第 節三十第

方に出だして用意の體勢を取り左拳にて前と同一の運動を八回行ひ一と呼びつゝ、左足を定位に復すると同時に左拳を列中に下し二と呼びつゝ、兩拳を前方に出して用意の

此の如くして八回之れを行ふて後ち一と呼びつゝ、右足を定位に復すると同時に右拳を列中に下し二と呼びつゝ、左足を踏出すと同時に左拳を前

體勢を取り左右早合動を爲す

左右早合動とは兩足を進退せしめず旋回する臂を一々用意の位置に止めずして連續して旋回し臂の上りたるとき體を浮かせて兩足尖にて立ち臂の下りたるとき兩踵を地に着くるを云ふ此早合動を八回行ひ續いて反對の旋回早合動を八回行ひ一と呼びつゝ、兩手を列中に下し氣を附けの姿勢を取り二と呼びつゝ、兩手を緊握し次節の用意をなす但し始めは臂を下、後、上前方に廻はし次は反對に廻はす

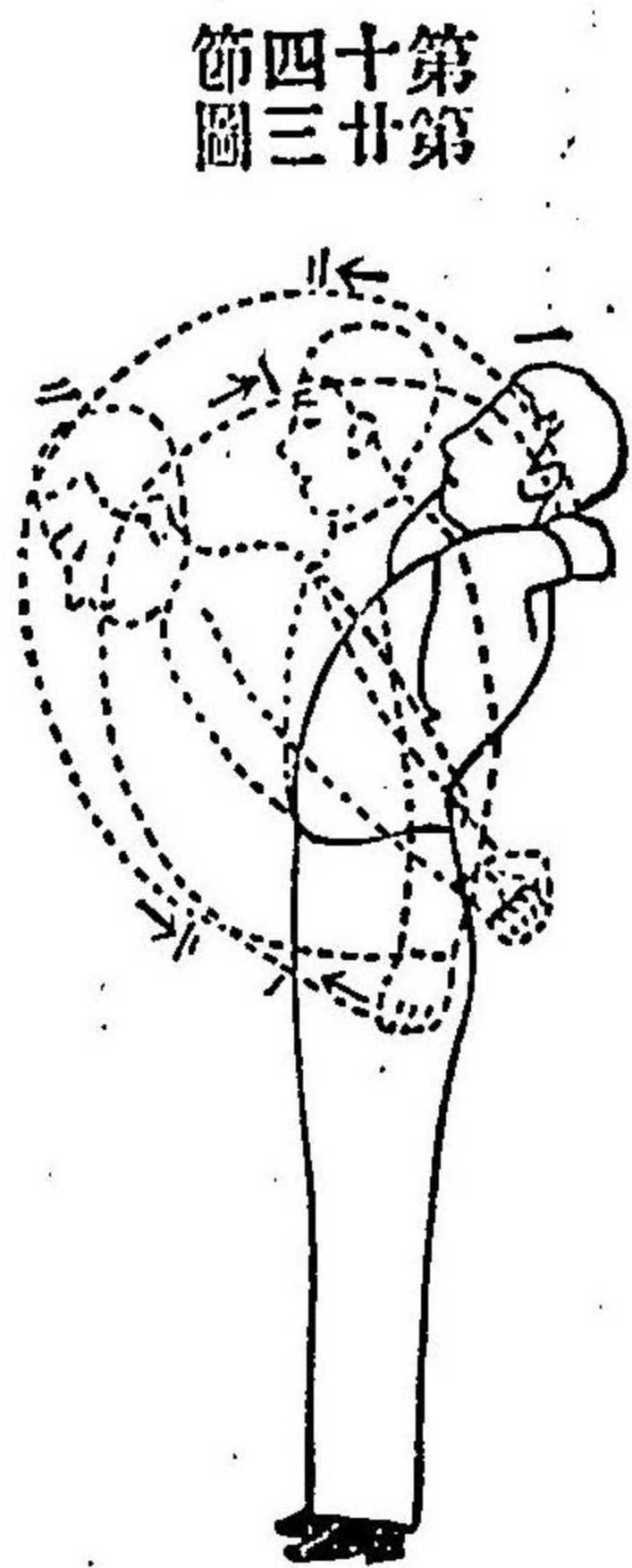
第十四節

名七分卷 二舉動

一兩足を爪立て兩膝を少しく折り上體を反らしむると同時に兩臂を(爪を内にし)屈しつゝ、兩拳を前方より後上方に強く引く

二兩踵を一層上げて地に着け上體を前に屈むると同時に

兩臂を上^ニに伸ばしつゝ(拳の爪を前にし乍ら兩臂を前下後方に廻はす)爪は自然後方を向く(第廿三圖)此の如くして四回行ひ一と呼びつゝ列中に下し氣を附けの體勢を取り二と呼びつゝ氣を附けの姿勢を取る



第四章 薙刀體操初段 十五節

初段は薙刀體操の基本演習にして該體操の中段上段は初段の方法を連続せしめ或は變化せしめて組立てたる者なれば初段に精熟すれば中段上段は容易く精熟するを得べし故に予は殊に本章に力を用る慎重に精密に説明せり初段各節は何れも二舉動宛なり(合交動は非此限)

第一節 脇構ワキガタ 脇構より腰を撃つ

生徒が初段各節に熟練せる時は教官は便宜斬突部を變化せしむ可し即ち本節に於いては脚又は胴若しくは横面或は面を撃たしむ可し此の場合に於ては教官は脚擊若しくは胴打等の號令を下すべし第二節以下之れを畧し單に變化せしめ得べき斬突部即ち變化打の部分として記述せん本節は構換法のみを四舉動に分解す

甲動作上の説明

用意の令にて矢又は一と呼びつゝ右脇構の姿勢を取る右脇構の説明

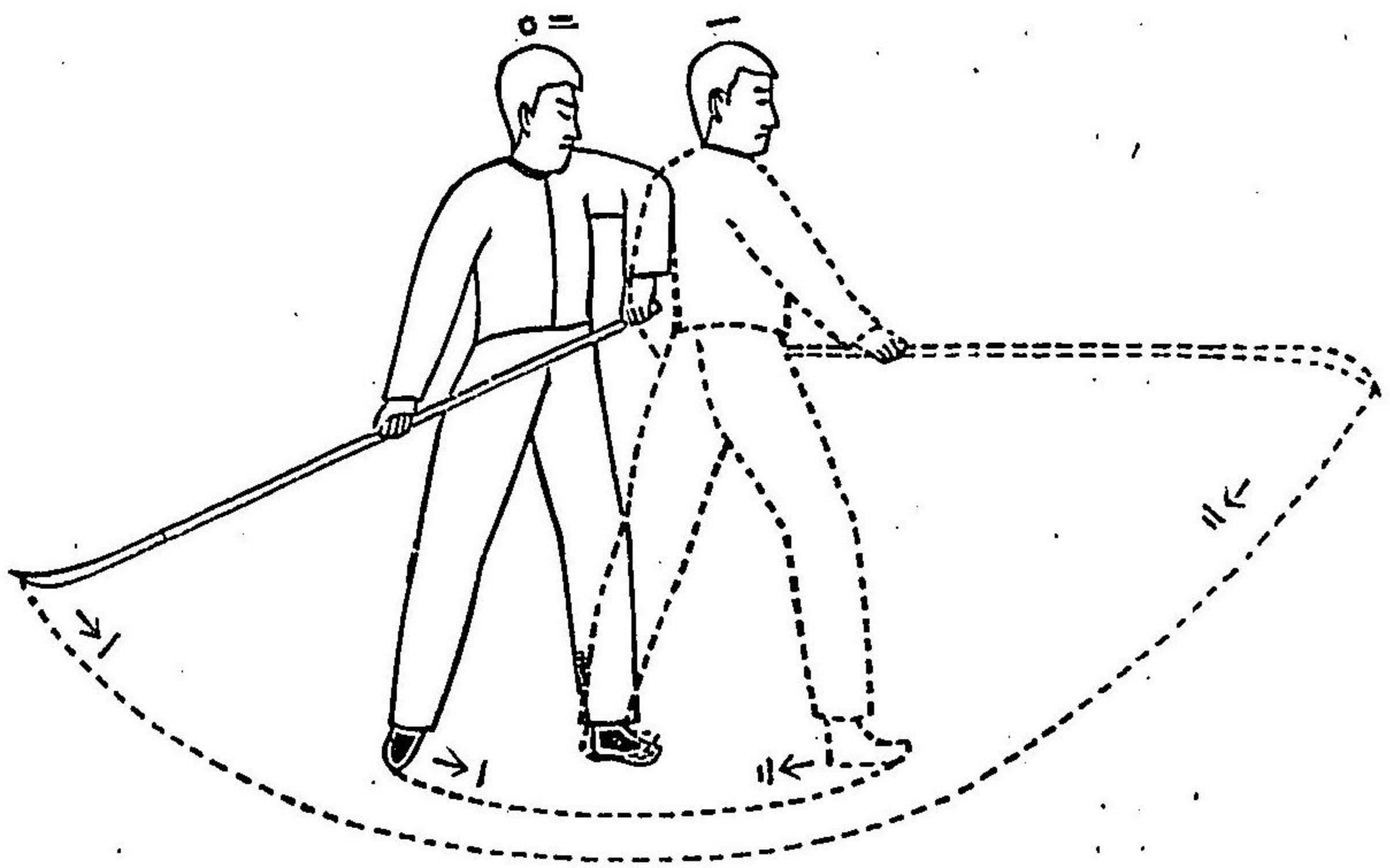
脇構とは薙刀を體の脇の方に前後に横へる故に名づくるなり氣を附けの姿勢にありて用意の令(用意の令を下す前に教官は第一節若しくは脇構等の演習を爲すべき旨の注

意を與ふ可し下る時は矢若しくは一と呼びつゝ右足を退くると同時に刀尖を後下方に倒しつゝ左手にて鐏を握り脇構の姿勢を取る此時薙刀は刃を外に向け前後に一直線ならしめて刀尖を地上五寸内外の高さに在らしめ右上肢は後下方に斜めに一直線ならしめ左上肢は肘を折りて百度内外の角度と爲し左手の握拳を左肘より右下方に在らしむ兩足の位置は前後に一直線内にあらしむるを可とすれども上體は半身ならしめずして出來得る丈け前を向かしむ但し顔面は必ず正面を向き眼を對手に注ぐべし

鐏の握方 鐏形の無き稽古薙刀に在りては柄の端に小指の半ばを外づれしめ鐏形ある薙刀なれば石突の縊れ目に小指の半ばを外づれしむ

右構動作

第一節 第四圖



一一と呼びつゝ右足を踏込み體を右半身に構ふると同時に薙刀尖を右前方に廻はしつゝ右手を少しく鐏の方に扱き(薙刀を少しく右掌内を滑り出でしめ)鐏を握れる左手にて左腰を打ち薙刀を平に且つ水平にし敵の左腰を斬る

二二と呼びつゝ右足を退け舊位に復すると同時に切先を右後方に廻はしつゝ右手を少しく刀尖の方

に扱き右脇構の姿勢に復す

此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は左構に變ずべし

右構換法

一分解二、二と呼びつゝ左手にて鐵を強く下方に押し放し前上方より廻り來れる薙刀の中央部を左手にて受け握る

分解三、三と呼びつゝ右手を扱き鐵を握る

分解四、四と呼びつゝ送足にて退くと同時に左手を適宜に扱きて左構の脇構に取る

右分解法に熟鍊せる後ちは以上三舉動を短縮して二と呼びつゝ一舉動に行ふ但し始めは三舉動に行ひ只分解四の時のみ二と呼ぶ之れを三舉動一呼唱と云ふ漸く熟するに

従ひ一舉動一呼唱と爲すべし其の方法左の如し

二二と呼びつゝ送足にて退くと同時に左手にて鐵を強く下方に押し放し前上方より廻り來たれる薙刀の中央部を左手にて受け握り右手を鐵迄扱き左手も適宜石突の方に扱きて左脇構の姿勢を取る

左構にて右構と同一の方法により四回之れを行ふ但し四回目の第二舉動は右構に變ず

左構換法

右構換法と同じくして只左右の相違あるのみなるを以て之れを略す以下倣之

左右交動

續いて構換法により四回左右交動を行ひ一二と呼びつゝ二舉動にて以上十二字は以下之れを略す氣を附けの姿勢

を取る

乙 技術上の説明

打込むときと構に復するとき刀尖を左(右)前方又は左(右)後方に廻はすには共に同一の太刀筋を經過せしむ可し其の太刀筋は刀尖を上下せしめず波線を生ぜしめず又弧線ならしむ可からず太刀筋正しからざれば善く切れざる者なり

左(右)手にて左(右)腰を打つときは左(右)手の四指(除拇指)の爪を腰に當つべし斯く左(右)手にて左(右)腰を打つ時は切尖に大いに力の這入る者なり然して此の時右(左)手を右(左)方に寄らしめざるを可とす

數ヶ處の斬突部の内にて腰を撰びし所以は腰を打つは薙刀を水平ならしむる故に最も行ひ易く且つ腰の上下何れ

を打たんとするにも應用し易かる可く又腰を据える練習をなすに便利なる故なり

斬突防拂は電光石火の如く極めて急速ならざる可からず故に各節必ず風を切り迂鳴を生ぜしむ可き動作あり本節に於いては一の場合是れなり

丙 教授上の注意

構に復したる時は右(左)方を向かず正面向きをなさしむ可し殊に構に復せるときは刀尖の動搖せざる様注意すべし且つ打込む時足を踏込と刀尖にて斬ると呼唱とは必ず同時ならざる可からず之れを心氣力の一致又は眼意足の一致と云ふ斯くすれば熟するに隨ひ自然氣合の籠まる者なり以下之れを略す

丁 體育上の説明

體育上の説明は用意即ち左右構は右構のみ左右構動作は右構動作のみを掲げ左右交動は右構より左構に變ずるもの即ち右構換法のみを記す是れ右方を記すれば左方は推知するを得べければなり

用意即ち脇構の姿勢の運動 右足を退け上體を成るべく正面せしむるが故に左右兩足を外旋(髀臼關節の外旋)せしむ、左右兩手は薙刀を握る故に左右手の屈指筋、兩手頸(腕關節)を後屈せしむる運動、左肘(肘關節)を前屈せしめ左前臂を廻前せしむる諸筋の運動、左上臂を肩の水平より少し低く舉ぐる(左肩胛關節)運動、右臂を後下方に斜めに伸ばして少しく回後せしめ右手頸を折る運動、頭を正面の儘にする故頭を左に向くる(載域樞椎關節)運動

一の動作 右足を前に踏込む運動、右足は外旋左足は内旋

せしむる運動、右臂を前下方に斜めに伸ばし手頸も伸ばし右前臂を内旋せしむる運動、左手頸を伸ばし左手を左體骨下に着くる運動、體を右半身にし正面するが故に頭を右に向くる運動

二の動作 右足を後方に退くる運動、左右兩足を外旋する運動、右手頸を後屈せしめ右臂を伸ばしたるまゝ、回後せしむる運動、左手頸を後屈せしめ左肘を折り左前臂を回前せしめ左上臂を肩の水平より少し低く舉ぐる運動、頭を左に向くる運動

右構換法 先づ後足より退くが故に兩膝を開く(髀臼關節の外轉)及兩脾臼關節の外旋運動、左手にて薙刀を押放す故に左掌を伸ばす、伸指筋運動及び左肘を伸ばす(上臂後側筋)の運動、左前臂を回後せしめ右前臂を回前せしむる諸筋の

運動、左右兩手頸(腕關節)及び兩肘(肘關節)を屈伸し兩上臂を上下せしむる肩胛關節諸筋の運動

右に述ぶる頭を左右に向くる運動は實際は頭を動かして左右に向けしむるに非ず顔面は正面の儘に置きて上體を左右に向くる者故に腦を振盪すること鮮く頭痛眩暈を患ふる者此の運動を爲すも之れが爲め苦痛を感ぜざる可し

第二節

名立構

立構より面を撃つ

變化せしめ得べき斬突部 横面、肩、胸、腰、脚

甲動作上の説明

用意の令にて矢又は一と呼びつゝ、右足を退くと同時に右立構の姿勢を取る

右立構の説明

立構とは薙刀を立つる故に名づくるなり氣を附けの姿勢

にありて用意の令下る時は一又は矢と呼びつゝ、右足を退くと同時に左掌を左髖骨に當て(四指を前方にし拇指を後方に爲して)右手を扱き上げ凡そ耳の高さに至らしめつ

、鐵にて地を突き

(此の時右

手の握拳

は自然乳

の高さに

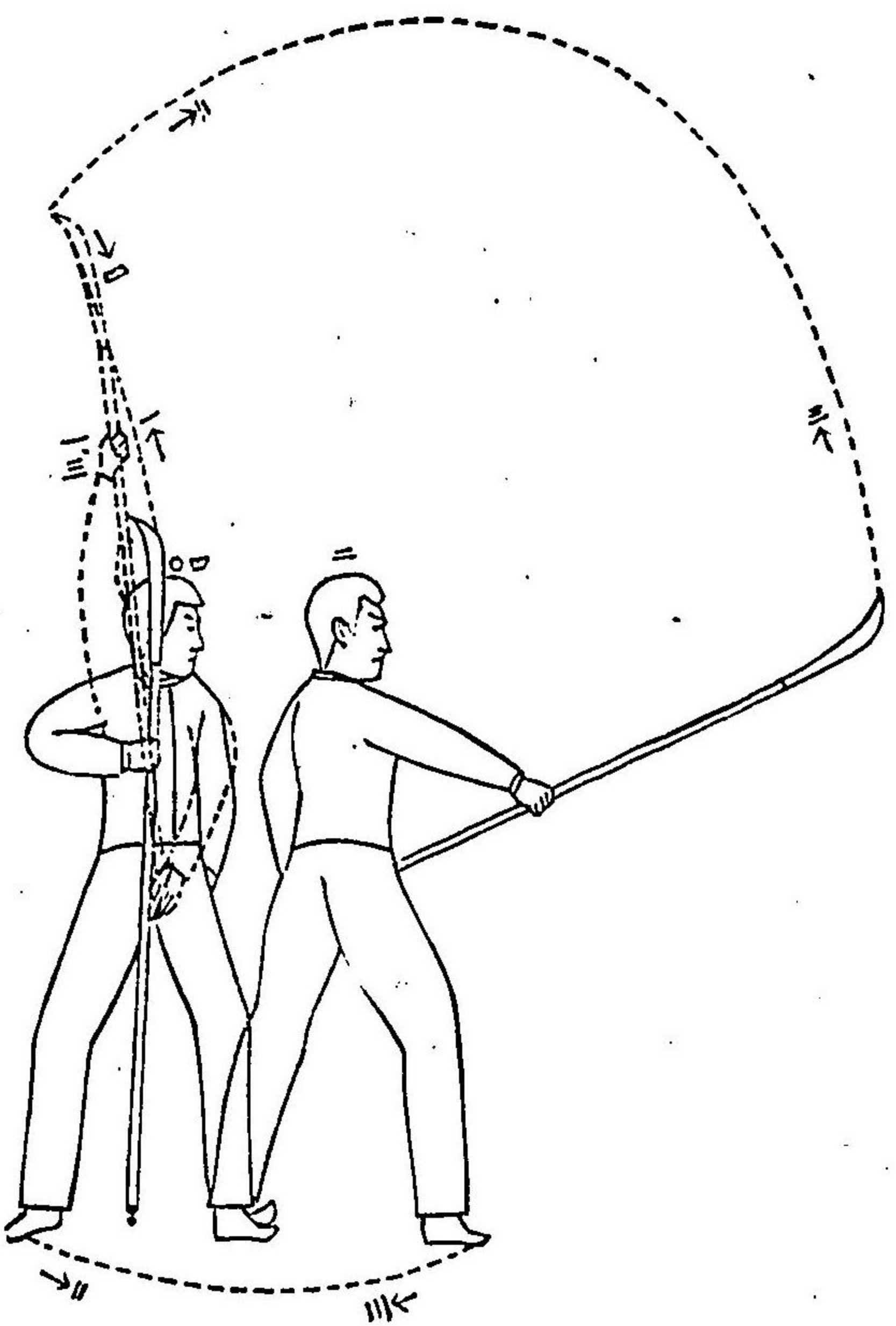
至る)立構

の姿勢を

取る尙ほ

之れを詳言すれば左右兩足は前後に一直線内に在らしめ

第 二 節 第 廿 五 圖



ずして右足は左足より右方に在らしむるも可なり(左右交動は此の限りにあらず)左右兩足と石突きとは各其の距離を相等しからしむる事鼎足の如くす薙刀は鉛直に立て刃は前(少しく外方)に向け右肘を張りて右前臂を水平ならしめ上體は成るべく前を向かしめ體重は兩足に等しく托す

右構動作

一右足を踏込むと同時に面を打つ

二右足を退け舊位に復すると同時に立構に復す

尙ほ教授の始めは左右構動作共に左の如く四舉動に分解し四四の唱法を用ゐる教授す分解演習は教授する時のみにて熟練せる後は二舉動に行ふべし

一分解一、一と呼びつゝ上體を少しく反らせて胸を張ると同時に右手は頭上に舉げ左手は右手の下際より薙刀を

軽く扱き下げて鍔を握る此の時左手は勉めて體の右下方に在らしむ可し

分解二、二と呼びつゝ右足を踏込むと同時に右手を少しく石突きの方に扱き(右肘は伸ばし置く)左手は左の前股に當(肘を少しく折りて)て右半身に構へ敵の面を斬り下げ刀尖を我が頭頂の高さに止む是れ即ち次節に説く處の星眼の構なり

二分解三、三と呼びつゝ右足を退け舊位に復し上體を少しく反らしむると同時に右手を頭上に舉げ左手を右下方に直伸し分解一の姿勢に復す

分解四、四と呼びつゝ左手を放して左髖骨に當つると同時に右手にて薙刀を下げ鍔にて強く地を突き立構に復す此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は左構に變

ずべし

右構換法(始めは五舉動に分解し後ちに四舉動に分解す)

二送足にて退くと同時に左構に取る

尙ほ教授の始めは構換法及び左右交動共に五舉動に分解し分解一二の兩舉動は左右構動作分解一二に同じく分解三四五の三舉動は左に述ぶるが如し但し少しく熟練せば分解三四を合して三と爲す故に構換法の分解三四を小分解三四と云ふ随つて分解五を繰上げて分解四と爲すべし
 二小分解三、左手にて鐵を押し放し直ちに左手にて右手の上凡そ八寸程の部分を握り薙刀を鉛直にす
 小分解四、送足にて退きつゝ、兩手を握りたる儘兩臂を伸ばして左上方に舉げ薙刀を鉛直にす
 分解五、右手を放して右腕骨に當つると同時に左手にて

強く薙刀を下げ地上を突き左立構の姿勢を取る

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は右構に變ず

左右交動、續いて構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢を取る

乙技術上の説明

分解一を行ふ時左(右)手を右(左手)の下際より軽く扱き下ぐる時は石突を握り損ずる患ひなく又薙刀を拂落さるゝ憂なし

分解一を行ふ時右手を頭上に舉げ薙刀の垂直ならざるは分解二を行ふ時眞向を切込まんが爲めなり打込みたる時は體重を前足に多く托し後足を爪立つべし

左右構動作分解三の時石突を握れる左(右)手を右(左)下方に伸ばすは分解四を行ふ時地上を突くも自分の足の胛を突くの憂ひ勿らしめんが爲めなり
敵の面を打込(分解二)みて刀尖を頭頂の高さに止むるは我が姿勢を崩さず又二度目の斬突を急速に行ひ易からしめんが爲めなり

本節に於いて風を切り迂鳴りを生ぜしむ可き動作は分解二なり

丙 教授上の注意

構換法分解三を行ふ時左(右)手は右(左手)の何寸程上部を握りて可なるやは演習者の身長の如何により異なる可ければ地上を突きたる時我が乳頭の高さに當る部分を握る者と心得べし

立構に復せし時側面或は左、右前隅を向かざる様注意すべし

最初分解教授を爲し稍熟したる時は動作は尙ほ分解法により行ひ只呼唱のみを二呼唱ならしむ此の場合に於いては分解一を行ふ時は黙し居り分解二を行ふ時一と呼び分解三を行ふ時黙し居り分解四を行ふ時二と呼ぶべし之れを四舉動二呼唱と云ふ而して漸次分解動作を早く行ひ遂に通常速度即ち二舉動二呼唱と爲すべし(以下倣之)

丁 體育上の説明

右の立構 脚部は第一節の運動に同じ、左掌を伸ばし(伸指筋の運動)左手頸(腕關節)を後屈せしめ左前臂を回前せしめ(回前筋の運動)左肘を折り(二頭膊筋の運動)左上臂を少しく舉ぐ(左肩胛關節及び諸筋及胸、脊諸筋の運動)右手にて薙刀

を握り(屈指筋の運動)右肘(肘關節)を折り(右上臂前側筋の運動)右前臂を内旋せしめ(回前筋の運動)右上臂を舉げ(右肩胛關節及び諸筋及胸脊諸筋の運動)頭を左に向くる(頭の回旋諸筋及載域樞椎關節)運動

一分解一の運動、右臂を頭上に舉ぐる運動(肩胛關節及び臂の舉上諸筋即ち肩胛筋、胸背諸筋の運動)左臂を右下方に内轉せしむる運動、上體を後方に反らす運動

分解二の運動、右足を踏込み左足尖を爪立つる運動、右肘を屈せず右臂を前下方に回轉せしめ左手を左髖骨下に當つる運動、頭を右に向くる運動

二分解三の運動、右足を退け右臂を前下方より舉上する外分解一の運動に同じ

分解四の運動、構に復する動作なるが故に右手に力を入

れ急に下げ左手を左髖骨下に運ぶ外、用意の運動に同じ
右構換法

二分解三の動作、送足にて退くは第一節の構換法に同じ、左手にて薙刀を押放して復握る運動、左臂を舉上し右肘と右手頸とを折り右手を左頭側に舉ぐる運動

分解四の動作、舉上せる左手に力を入れ急に下げ右手を右髖骨下に當つる運動の外用意の運動に同じ

第三節

名 胴打

稱 精眼より鐵にて胴を打つ

變化打の部分は脚、腰、横面なり

甲動作上の説明

用意の令にて一又は矢と呼びつゝ、右精眼に構ふ

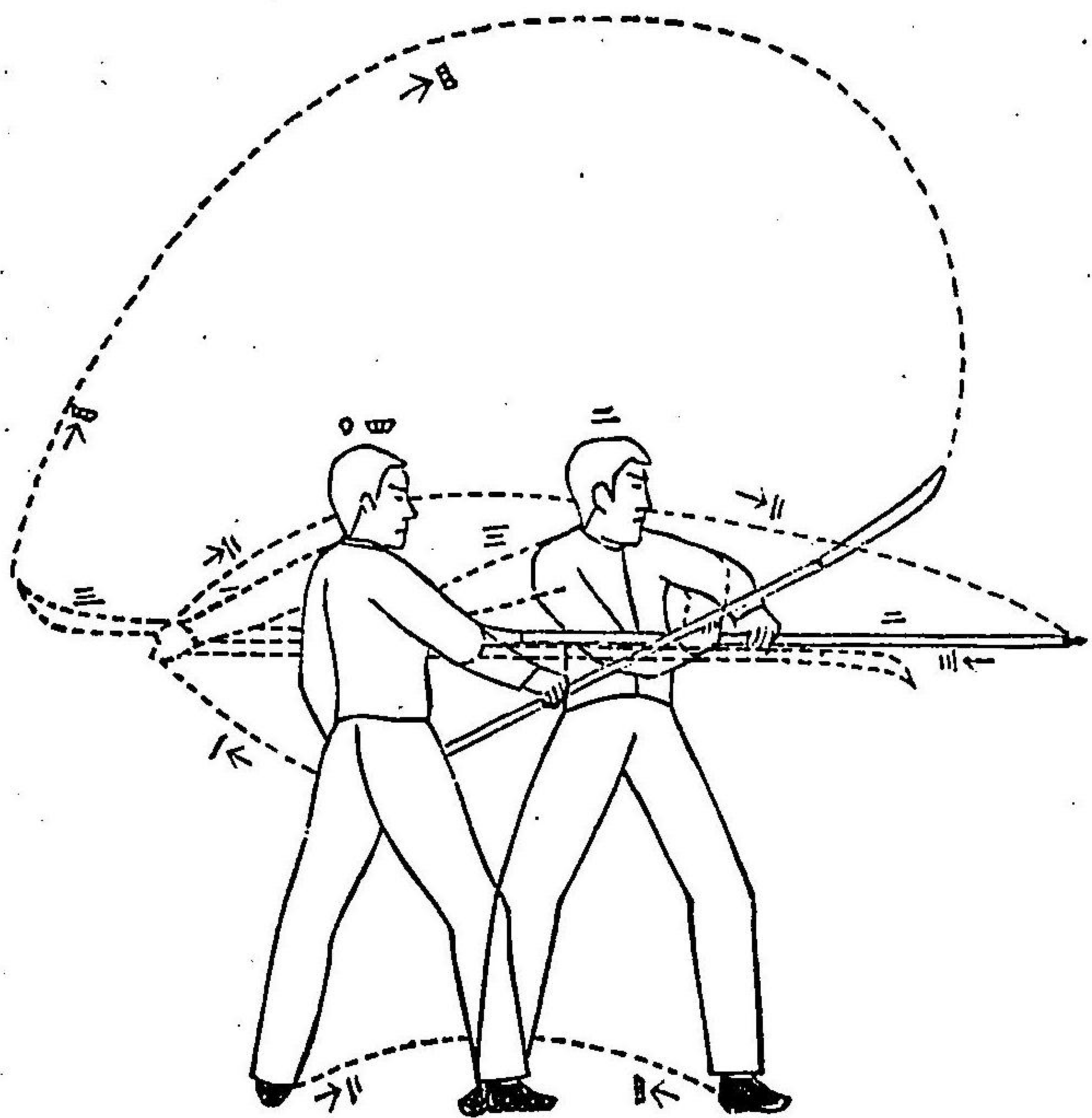
右構精眼の説明

(セイガン)は心影流にては精眼一刀流にては星眼又稀れに

は青眼、清眼、晴眼、正眼、と書く流義あり何れも我が武器の切先きを敵の目の前に(チラツカ)しむる意なり其の構方は前

節立構の面打の
姿勢に同じ即ち
右足を退くると
同時に薙刀を前
方に倒し刀尖を
頭頂の高さに在
らしめ左手にて
石突を握り鼠蹊
線の邊りに着け
左肘は少しく撓
む右上肢は直線

第三節 第六十圖



をなして右手は水平より凡そ四寸位下げ體を右半身になし體重は兩足に等しく托す

右構動作

- 一 左足を踏込むと同時に敵の右胸を打つ
- 二 左足を舊位に退くると同時に精眼に復す

分解教授法左の如し

一 分解一、石突を握れる左手を後方に引くと同時に右肘を凡そ九十度に折り右前臂を水平にし薙刀を平(刃)を外方即ち左方に向けに且つ水平にして水月の高さに在らしむ

分解二、左足を踏込むと同時に左手を扱きて右手を離る

凡そ四五寸の所に至らしめつ、薙刀を水平の儘石突を左前方に廻はし兩手を伸ばし石突の腹にて敵の右胸を打つ

二分解三、現在の水月の高さに於いて右手にて薙刀を後方に引き、薙刀は左掌内を滑べらし、右上肢を後方に伸ばし、左手にて石突を握(此の時左肘は自然凡そ九十度に折るこゝとなる可く而して左前臂を水平にす)り薙刀を依然として水平にす

分解四、左足を退け舊位に復すると同時に刀尖を上、前方に廻はし敵の面を斬る氣勢にて(右手を少しく石突の方に扱き左手を前股に當て)精眼に復す

此の如くして四回行ふ

但し四回目の第二舉動は構換法により左構に變ず

右構換法

二送足にて退くと同時に左構の精眼に取る

分解教授法左の如し

二分解三、右手にて薙刀を上方に押し放し右手にて薙刀を撫で、石突に至り之れを握りて右脚の前股に着け略左精眼の形をなす

分解四、送り足にて退きつゝ、左手は適宜に石突又は刀尖の方に扱き左構精眼に構ふ

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず

左右交動

續いて構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢を取る

乙技術上の注意

分解一に於て薙刀を後方に引くは打込みたる時薙刀の

石突を比較的遠き距離に達せしめんが爲めなり前方に在る上肢の肘を折るは短き薙刀に在つて前なる左(右)手を鏝際より七八寸の隔たりに在らしめて打込みたる時刀尖にて上臂に傷を受けざらしめ且つ體育上の効果多からしめんが爲なり故に若し薙刀の寸尺長き時は技術上より云へば前方なる臂の肘も折らずして可なり薙刀を平にし刃を外に向くるも亦打込みたる時刃にて自體を傷つけざらんが爲めなり

打込みたる時後足を爪立て體重を前足に多く托(場合により)上體は少しく前に屈むす可し左すれば力も籠まり比較的距離遠き者をも打つを得べし

本節の風を切り迂鳴りを生ぜしむ可き動作は分解の動作二なり

丙 教授上の注意

分解二の動作を行ふには石突を上下せしめず薙刀を水平の儘打込み打込みたる後ちも薙刀を水平ならしむ可し

分解四の刀尖を上前方に廻はす動作は頭上を經過せしむる様注意すべし

丁 體育上の説明

用意即ち精眼の構 左足を一步退け左手を左髖骨下に當て右手を前方に伸ばす運動、頭を右に向くる運動

一分解一の動作、左臂を後方に伸ばし廻前し手指を伸ばし右肘を折り回後せしめ握りを緩むる運動

分解二の動作、左足を踏込み左臂を左前方に廻はし左手腕關節を外轉せしむる運動、右臂を内轉せしめつゝ右手指を伸ばし右手腕を脊屈外轉せしむる運動及び頭を左に向

くる運動

二分解三の動作、右臂を後方に伸ばし左肘を折る運動
分解四の動作、右足を退け右臂を後上前方に廻轉せしめ
左手を左髖骨下に當て頭を右に向くる運動
右構換法

二分解三の動作、左臂を回後せしめ右臂を内旋せしめ右
髖骨下に當つる運動
分解四の動作、右足より送足にて退く運動

第四節

名 稱 下段霞 下段霞より面打を拂ひ脚
打を防ぐ

刀劍或は薙刀の切先きを前方に出だし刃を上方に向くる
を霞むと云ふ下段霞は霞みて刀尖を下方に下ぐるなり
甲動作上の説明

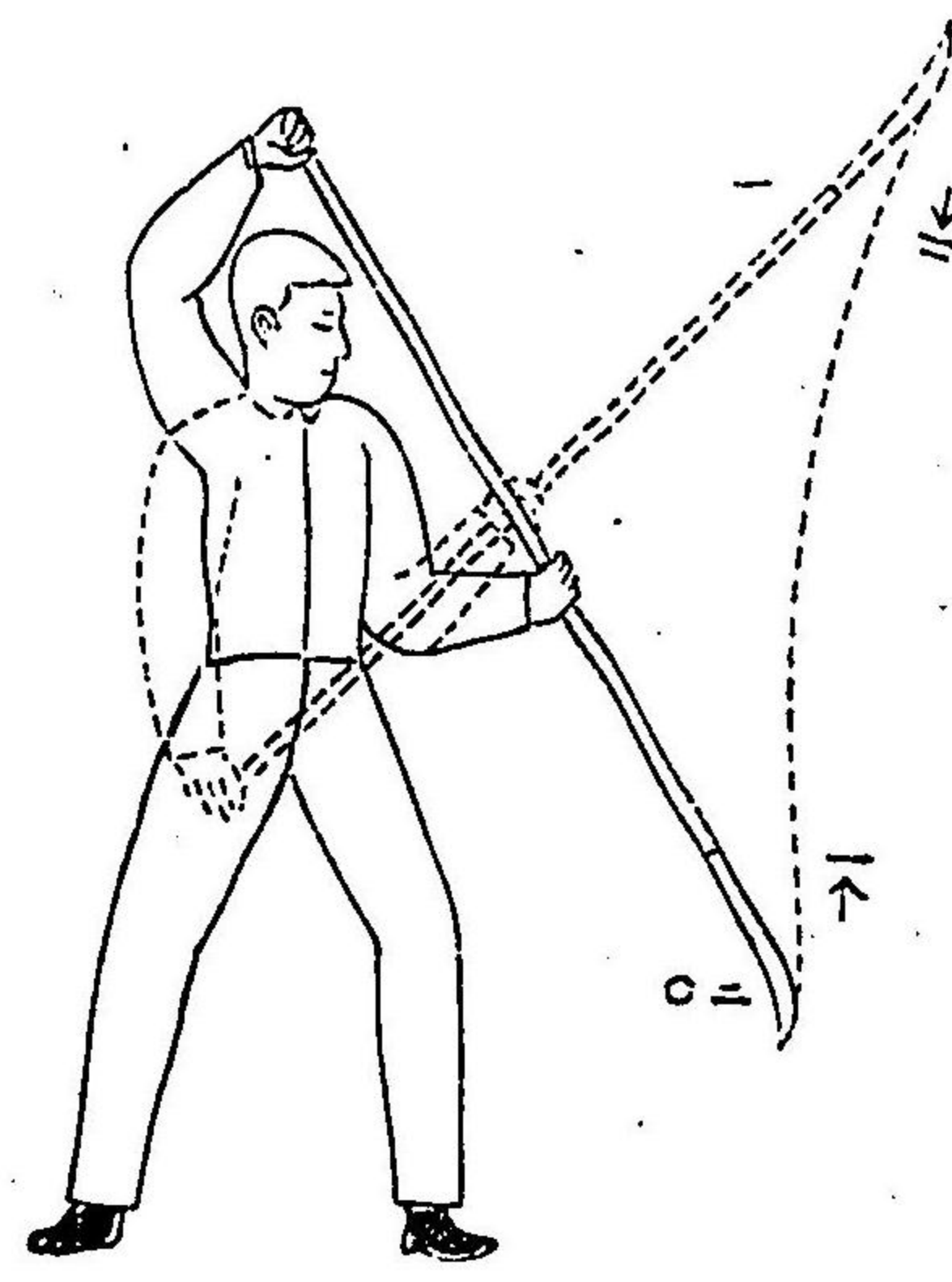
用意の令にて矢又は一と呼びつゝ、左足を退け右、下段霞の
構を取る

右下段霞の説明

左足を退け左手にて鐵を握り左肘を折り頭上に舉げ刃を
上に向けて刀尖は地上凡そ五寸許りの高さに下げ右肘は
右脇に着け右前臂を水平ならしむ顔は正面を向く事勿論

にして左右兩眼にて薙
刀の左右兩方を見るな
り

一 左上肢を伸ばし左手
を左下(少しく前方)方に
廻(左方に半楕圓環を畫
き)はし左の前股を打つ



圖七廿第 節四第

此の動作を行ふ時右肘は體を放さず右手も位置を變ぜざる可し故に刀尖は右、上、左、少しく後方方に廻、右方に半楕圓環を畫きはり敵の打下ろす太刀を左方に刎ね飛ばす又は自然下を向く

二左上肢と左手を復び先の太刀筋を經由して後頭上に擧げ下段霞に復せしむ刀尖も自然先の太刀筋を經由して元在りし所に復すべし是れ即ち脚打を拒ぐの方法なり

此の如くして三回行ひ四回目の第一二兩舉動は構換法を行ふ

構換法

一右に示す第一第二兩舉動を合して一舉動に行ふ

二は足を進め右足に踏着くると同時に薙刀を左右に一直線(刀尖を右にす)ならしめ刀尖を上、左方に廻はしつゝ左手

を撫で扱きて右手の握部を握り右手は扱きて石突に至らしめ右足を退くると同時に右手を頭上に擧げ左構の下段霞に取る

左構にて右と同一の動作を三回行ひ四回目は構換法により右構に變ず續いて構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢を取る

乙技術上の説明

前手を支點とし後手即ち石突を握れる手を力點とし切先を重點とし活潑に急速に石突を上下せしむる故切先きは大に力の這入る者なり決して前手即ち支點に力を入れ支點にて防拂を爲す可からず支點に力を入れ防拂をなさんとすれば切先きに力の這入らぬ者なり

面打を拂ふも脚打ちを防ぐも何れも棟を少しく外方に向

け双をして敵の武器に當らざらしむ可し左すれば双を缺損するの憂なく且つ身の折れ易からざる利あり
構換法の足の踏違へば幾んど飛違の如く急速に行ふべし之れを早踏違と云ふ

本節は一二兩舉動共に風を切り迂鳴りを生ぜしむ可し

丙教授上の注意

左(右)構動作は一、二兩舉動何れも風を切り迂鳴りを生ずるが如く急速に行ふ可しと云へども各舉動の間合は早きに失せざる様注意すべし

演習中顔面を正面せしむ可し

構換法二を行ふとき刀尖を右(左)上前方に廻はす可からず一二兩舉動を行ふ時前なる臂の上臂は必ず脇腹より離れしめざる様注意すべし

切先にて左右方に半楕圓環を畫かしめんと欲せば鐵にて右(左)方に半楕圓環を畫くを要す故に鐵を握れる上肢は強めて右(左)方少しく前方に伸張し半回せしむ可し尙ほ此の運動を確實に行はしめんと欲せば徐々に行ふ可く又一二兩舉動を四舉動に分解するも可なり其の方法分解一、左右手を左右方に伸張(薙刀を水平に)す分解二、左(右)手にて前股を打つ分解三、分解一の姿勢に復す分解四、構に復す
丁體育上の説明

用意の運動、左足を退け體重を兩足に等しく托し腰を割る故に兩髀臼關節を少しく外轉し膝關節と足跗關節とを少しく折る運動、左前臂を廻前せしめつゝ、左肘關節を凡そ直角に折り左手を頭上に擧ぐる左肩胛關節の運動、右肘關節を直角に折り右前臂を回後せしめ右手腕關節を後屈せし

むる運動頭を右に向くる運動

一左肘を伸ばし左臂を上方より前轉せしめ右前臂を内旋せしめつゝ右手指を握り締むる運動即ち手指の練習及び充分に吸氣を爲す肺の運動

二左臂を下方より前轉せしめつゝ左肘を直角に折り右前臂を廻後せしめつゝ右手指を少しく伸ばす運動即ち手指の練習及び充分に吸氣を爲す肺の運動

右構換法

一前二項の一二兩舉動の運動を兼ね且臂を前轉せしむる敏捷運動

二兩足の早踏違即ち下肢三關節の運動兩手指の練習兩肩胛兩肘兩手腕關節の運動及左臂の回後と右臂の回前及頭を左に向くる運動

本節左右交動は殊に敏活なる動作に慣れしむる効あり

第五章

稱名

股掬マタムキ

揃足乳間ソバシチケ

より股を掬ふ

甲動作上の説明

用意の令にて矢又は一と呼びつゝ右揃足乳間に構ふ

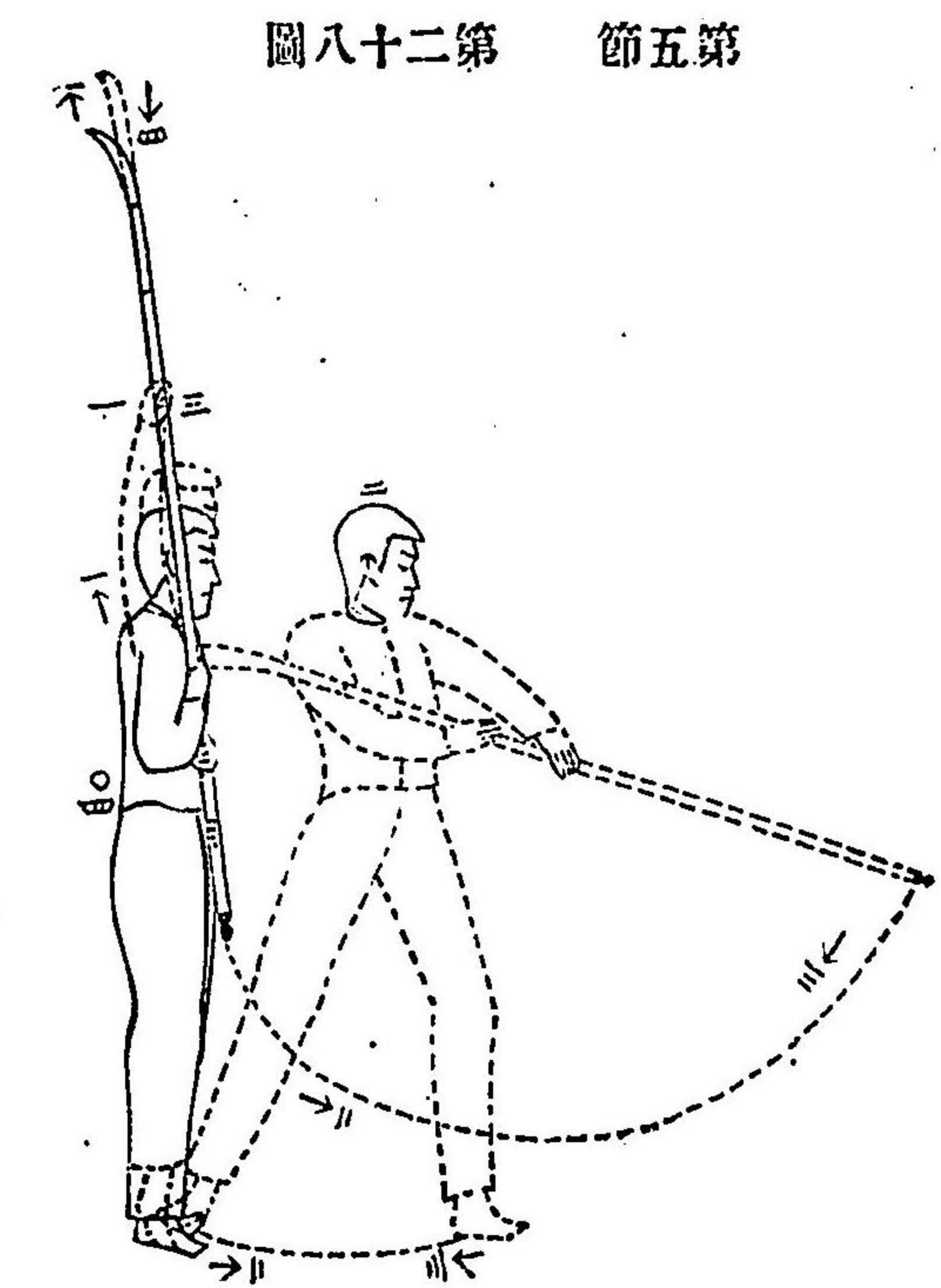
右構の揃足乳間の説明

氣を附の姿勢に在つて右手にて薙刀を上げつゝ左手にて右手の下方凡そ三寸許りの所を握り右手を右乳頸チノネの上際に至らしめ左手を左乳頸の下際に至らしめ薙刀尖を右上方に石突を左下方に在らしめ薙刀傾斜の度は環の十六分の一とす刃を前にす

右構動作

一兩足尖にて立ち左足を踏出すと同時に右手を扱上げ石突を扱出して敵の胯を掬ふ

二左足を退け舊位に復せしめ兩足尖にて立つと同時に薙刀を右手にて扱上げ右手を扱下げ揃足乳間に復す
尚ほ教授の始めは左の如く分解教授を爲すべし



第五節 第八十二圖

を左掌内を滑べらして石突を下前上(胯の高さ)方に出だし

一分解一、兩足尖にて立つと同時に右手にて薙刀を扱き其の拳を斜めに右上方に至らしむ
分解二、左足を踏込むと同時に右手を下げ薙刀

左手にて右手の凡そ五寸程前を握り兩手を前に伸ばし石突にて敵の股を掬ふ

二分解三、左足を退け右足に踏着くると同時に兩足を爪立て右手は固く握りて右上方に舉げ左手は緩く握り薙刀の滑りを自由ならしめつゝ左乳頸の下際に復せしむ
分解四、兩踵を地に着くると同時に右手を扱き下げ右乳頸の上際に至らしむ

此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により左構の揃足乳間に變ず

構換法

二左足を舊位に復し兩足を揃へ兩足尖にて立つと同時に右手にて薙刀を押し放ち右手にて石突を距る一尺許りの部分を握りて胸に着け左手を扱下げ揃足乳間に取る

尙ほ分解教授法を左に述べし

二分解三、右手にて薙刀尖を上前左方に押放ち右手にて右構の時左手の握りたる部分を握り薙刀尖を左上方にし薙刀を斜めにす

分解四、左足を退ぞけ右足に踏着け兩足を爪立つると同時に右手を右乳頸の下際に着け兩踵を地に着けしむると同時に左手を扱き下げ左乳頸の上際に至らしむ

左構動作、左構にて右と同一の動作を四回行ひ四回目の第二舉動に至り構換法により右構に變ず

左右交動、續いて構換法により四回左右交動を行ひ一二と呼びつゝ二舉動にて氣を附けの姿勢を取る

乙 技術上の説明

薙刀の長短と演者身長の如何により構方の執握部を異に

す即ち分解法一の右(左手)を斜めに扱き上げた時其手は少なくとも鐔より八寸位隔たり居るを度とし執握部を決定すべし若し鐔際を握る時は刀尖にて自身を傷くる患ひあるべし

右手を斜めに上ぐるは石突を多く扱き出さんが爲めなり分解法二の動作を爲さんとする時は先づ薙刀を鉛直にして我が體の正中線と並行せしめ然る後ち石突を出だす其石突の太刀筋は彎形ならしむ可く又風を切り迂鳴りを生ぜしむ可し風を切り迂鳴りを生ぜしむ可き動作は斬突防拂を爲す動作なるを以て以下略之

丙 教授上の注意

分解一を行ふときは右手は斜めに伸ぶ可く而して左手を下げざる様注意すべし

股を掬ひたるるとき石突は袴の高さに在らしむべし
構に復したる時執握部の變更せざる様注意すべし

丁 體育上の説明

用意、兩肘を折り兩前臂を内旋せしめ左手を左乳下、右手を
右乳上に着くる運動

一 分解一の動作、兩足尖にて立つ脛部後側諸筋と足跗關
節との運動、右肘(肘關節)を伸ばし右臂を外上方に直舉する
諸筋及肩胛關節の運動

分解二の動作、左足を踏込み左膝を少しく折り右足尖を
屈曲せしめ左肘を伸ばし左臂を回前せしめ左手腕關節を
後屈及外轉せしめ右肘を伸ばし右臂を内旋せしめつゝ内
轉せしめ右手腕關節を外轉せしめ兩手指を少しく伸ばす
運動、頭を左に向くる運動

二 分解三の動作、左足を退くる運動、兩足尖の屈曲、右臂を
外上方に舉げ左肘を折り左乳下に着くる運動、兩手指を握
締め頭を正面に向くる運動

分解四の動作、兩足尖の展伸及右肘を折り上臂を下げ右
手を右乳の上部に着くる運動

右構換法

分解三の動作、右手を伸ばし且つ握り左前臂を廻後せし
むる運動

分解四の動作、兩足尖の屈曲展伸、兩肘を折り兩前臂を内
旋せしめ右手を右乳下、左手を左乳上に着くる運動

第六節

名 水車 小脇より水車の方法にて脚
を切る

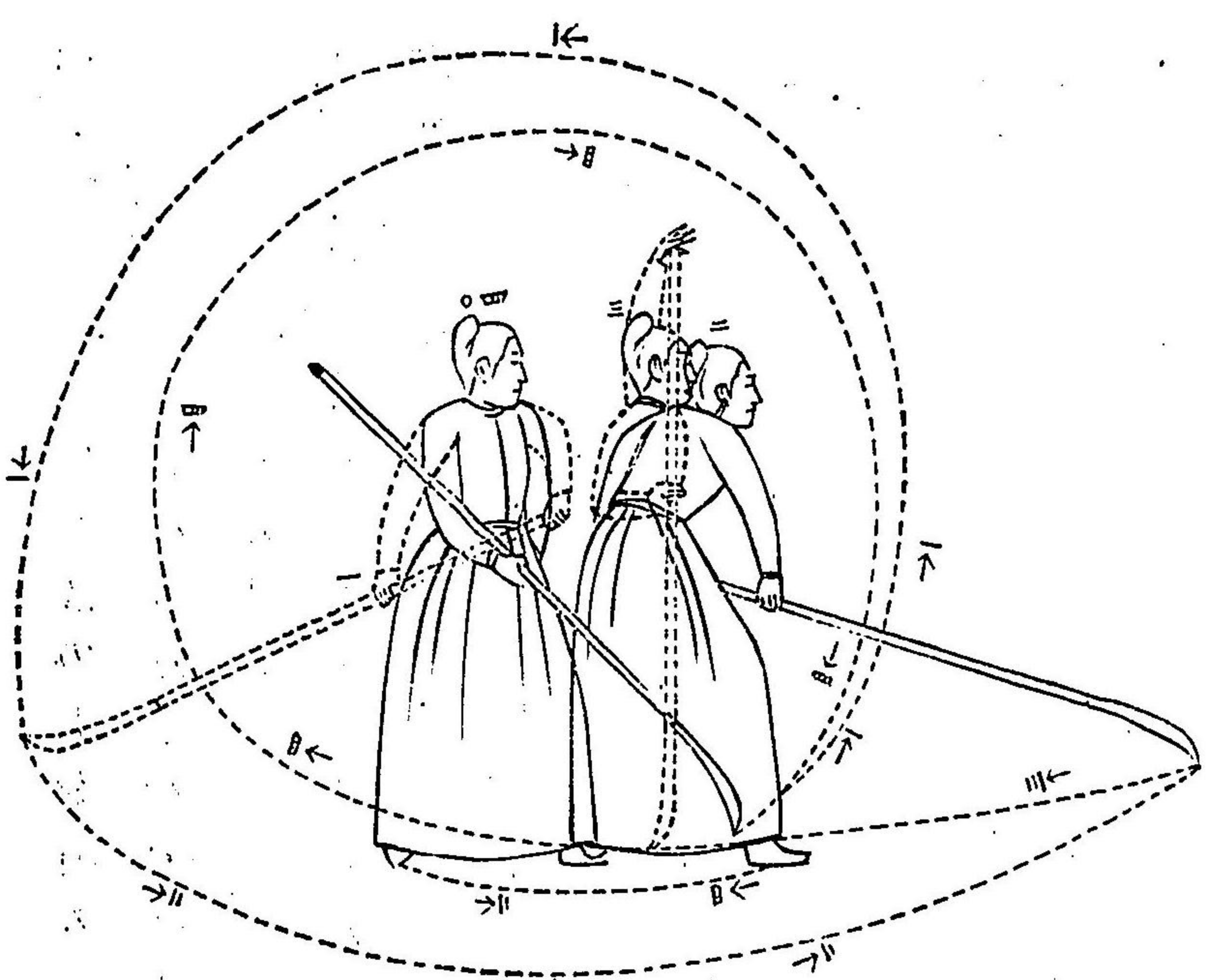
變化打の部分 腰、胴、横面、腋下の袈裟斬

甲動作上の説明

用意の令にて右足を退け右小脇の姿勢を取る
 小脇の説明、小脇に搔込む故に小脇の構と名づく或は之
 れを搔込みと云ふ其方法は右足を退くると同時に右手に
 て薙刀の中央を握りつゝ刀尖を前に仆し(刃を上に向け)地
 上凡そ五寸許りの高さに在らしむ但し右肘は軽く伸ばし
 て鈍角ならしめ右肘と薙刀とを軽く接触せしむべし
 右構動作

一刀尖を上後右前方に廻はすと同時に右足を踏込み敵の
 左脚を斬る
 二右足を退け舊位に復せしむると同時に刀尖を下後上前
 下方に廻はし小脇の構に復す
 分解教授法左の如し

第六節 第二十九圖



一分解一、右手
 にて刀尖を上後
 方に廻はすと同
 時に左手にて右
 手の下際を握り
 石突迄扱き畧脇
 構の姿勢となる
 (脇構と異なる所
 は石突を握れる
 手を下ぐるにあ
 り)
 分解二、右足を
 踏込むと同時に

刀尖を右前方に廻はし敵の脚を斬る
 二分解三、石突を握れる左手を挙げ薙刀を少しく右掌内を滑べらし右前臂を水平にして右手にて薙刀の中央を握りつゝ右肘を後方に引くと同時に左踵を上げつゝ上體を右に捻り且つ左彎曲をなさしむ此の時薙刀尖は鉛直線より少しく後方に寄せ又は右を向け右手は拳を軽く開き左手は指を伸ばし軽く石突を握る但し左手を少しく扱きて石突の頭より二三寸餘すも可なり
 分解四、右足を退け舊位に復さしめ左手を左腰に當つると同時に鐵尖を前下後上方刀尖を後上前下方に廻はし小脇に復す
 此の如くして四回行ふ但し四回目第二舉動は構換法により左構の小脇に變ず

換法

二送足にて退くと同時に左手にて右手の先きを握り左構の小脇に取る
 分解教授法左の如し
 二分解三、左手を放ち左手にて右手の前際を握り
 分解四、右手を離して右腰に當つると同時に送足にて退き左構の小脇に變ず
 次ぎに左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず
 左右交動續いて構換法により四回左右交動を行ひ尙續いて一八番號を用ひ早交動と二回轉とを行ふ
 附り左右交動に續いて早交動及び二回轉を行ふは本節と次節風車のみなり

早交動即ち一回轉

一 最初の一回は右構の小脇より水車の方法により敵の脚を打つこと右構動作一に同じ

二 右足を退け左足に着け左足を踏込むと同時に刀尖を上後、左前方に廻はし敵の右脚を斬る

早交動を二舉動に分解すること左の如し

二分解一、右足を退け左足に踏着け兩足を揃へると同時に左手にて石突を押し放し刀尖の上、後下方に仆れ來るを左手の甲を下にし下より受留め右手の先き凡そ五寸の部分を握るや否直ちに右手を石突に扱き握る

二分解二、左足を踏込むと同時に敵の右脚を切る

四五六七八に至る迄皆二と同一の方法にて行ひ直ちに

轉に移る

二回轉動作(五舉動に分解す)

一 左足を退け右足に着け右足を踏込むと同時に體の右側に於いて刀尖を上、後、下、前、上、後、右、前方に廻はし敵の左脚を斬る

分解法左の如し

一分解一、左足を退け右足に踏着け兩足を揃ふると同時に右手にて石突を押し放し刀尖の上、後方に廻り來るを右手の甲を上にし上より薙刀(左手より凡そ六七寸刀尖に近き方)を握る但し薙刀は水平にして刃を下に向け肩の高さにて前後に一直線内に在らしむ

二分解二、左手にて薙刀を上にし引き放ち刀尖の下、前方に廻り來るを左手の甲を上にし上より握る但し薙刀を前項分解一と同位置に在りて刃を上に向かしむ

分解三、右手を離し右手にて同位置を上より握る
 分解四、刀尖を上、後、下方に廻はし刃を外に向くると同時に左手を離し左手にて鍔を握る

分解五、右足を踏込と同時に敵の足を斬る

此の如くして八迄行ひ氣を附けの姿勢となる

乙 技術上の説明

早交動二回轉共分解法一にて石突を押放つ時は直下に強く押すべし直下に押せば薙刀は前後に一直線内を廻はる可く強く押せば容易に回轉すべし
 構に復するとき分解四を行ふとき石突を握れる上方の手は石突を正しく前方に押しつゝ、他の手迄撫で下すべし左すれば刀尖は體に接近して廻はるべく且つ力を要する事少なくして善く回轉すべし

丙 教授上の注意次節風車に於いても亦略同一の注意を要す

早交動を行ふとき後、下方に至らしめたる刀尖は滞りなく右前方に廻はす可し

刀尖を後下方に在らしむるときは薙刀を前後に一直線内に在らしむ

脚を打込みたるるとき石突は左腰にあらしむ

構に復するとき及二回轉は薙刀を體に近づけ前後に一直線内を廻はすべし

二回轉を行ふとき顔面を正面に向くるは勿論上體を成るべく正面に向け置くべし

二回轉の分解法を少しく早く行ふときは薙刀を水平ならしめざるを可とす

早交動及二回轉を行ふ時前足を退け後足に踏着くるには
定位より前に在らしめざる様注意すべし
教官は適宜三回轉又は四回轉等の號令を下し三回轉、四回
轉等を爲さしむ可し

丁 體育上の説明

用意、右足を退け兩膝を少しく折る故に下肢三關節(髀臼、膝
足跗の三關節)を少しづゝ屈むる運動、左肘を鈍角に折り左
前膊を回前せしめ手腕關節を脊屈せしめ左掌を伸ばし左
手を左腰に當て右肘を鈍角に折り右前臂を回後せしめ右
手を軽く伸ばし薙刀を握る運動

一分解一、右肘を軽く折り右前臂を内旋外旋せしめつゝ
右臂を上、後、下方(體の右側下方)に廻はし右肘を伸ばし右手
掌にて薙刀を握り締むる運動、且左臂を内轉せしめつゝ左

前臂を廻後廻前せしめ左手にて薙刀を緩く握り左臂を少
しく外轉せしむる運動を爲す、同時に體を左半身に構ふる
が爲めに頭を左に向くるは勿論左髀臼關節を外旋せしめ
右髀臼關節を内旋せしむる運動

一分解二、右足を踏込み兩髀臼關節を外轉せしめ上體を少
しく前方に屈め(右側屈曲故右髀臼關節の強き外轉及左髀
臼關節の弱き内轉運動なり)頭を右に向け且後屈せしめ右
臂は前下方(體の右側下方)に伸ばし左臂は左前臂を外旋し
つゝ左肘を少しく折り左手を左髖骨下に當つる運動

一分解三、左前臂を回前しつゝ左臂を前轉して右側頭上に
舉げ左掌を伸ばし薙刀を纒に支ふ、右前膊を回後しつゝ右
肘を折り右上臂を強く後方に引き右手腕關節を脊屈せし
め右掌を軽く開き薙刀を握る諸運動、及左足を瓜立て腰を

右に捻る故に右髀臼關節の内旋と左髀臼關節の外旋運動
 及上體を右側に屈せしむる故に右髀臼關節の強き外轉及
 左髀臼關節の弱き内轉運動
 分解四、體重を爪立てる左足尖に托し右足を退くると同
 時に右側頭上に在る左手を扱下げ放して左腰に當用意に
 同じて右肘と右肩胛關節との運動及右前臂を内旋外旋せ
 しめつゝ右手にて薙刀を一回轉せしむる手指の運動を爲
 し右肘を鈍角に折り右前臂を回後せしめ小脇の姿勢を取
 る運動
 右構換法 送足にて退き右前臂及左前臂を回後せしめつ
 ゝ左肘を伸ばし左手を開閉して薙刀を握り左肘を鈍角に
 折り右肘を折りつゝ回前せしめ右手腕關節を脊屈せしめ
 右髖骨に當て左構の小脇に取る運動

早交動即一回轉 右(左)足を左(右)踵の側に退くる故に左
 (右)髀臼關節の外旋を爲す運動の他第一節脇構の左右構動
 作と左右交動の運動に同じ
 二回轉 手指の練習を能くする外早交動の運動に同じ

第七節

名 稱 風車 小脇より風車の方法にて敵

の面を斬る

變化打の部分 肩より袈裟斬

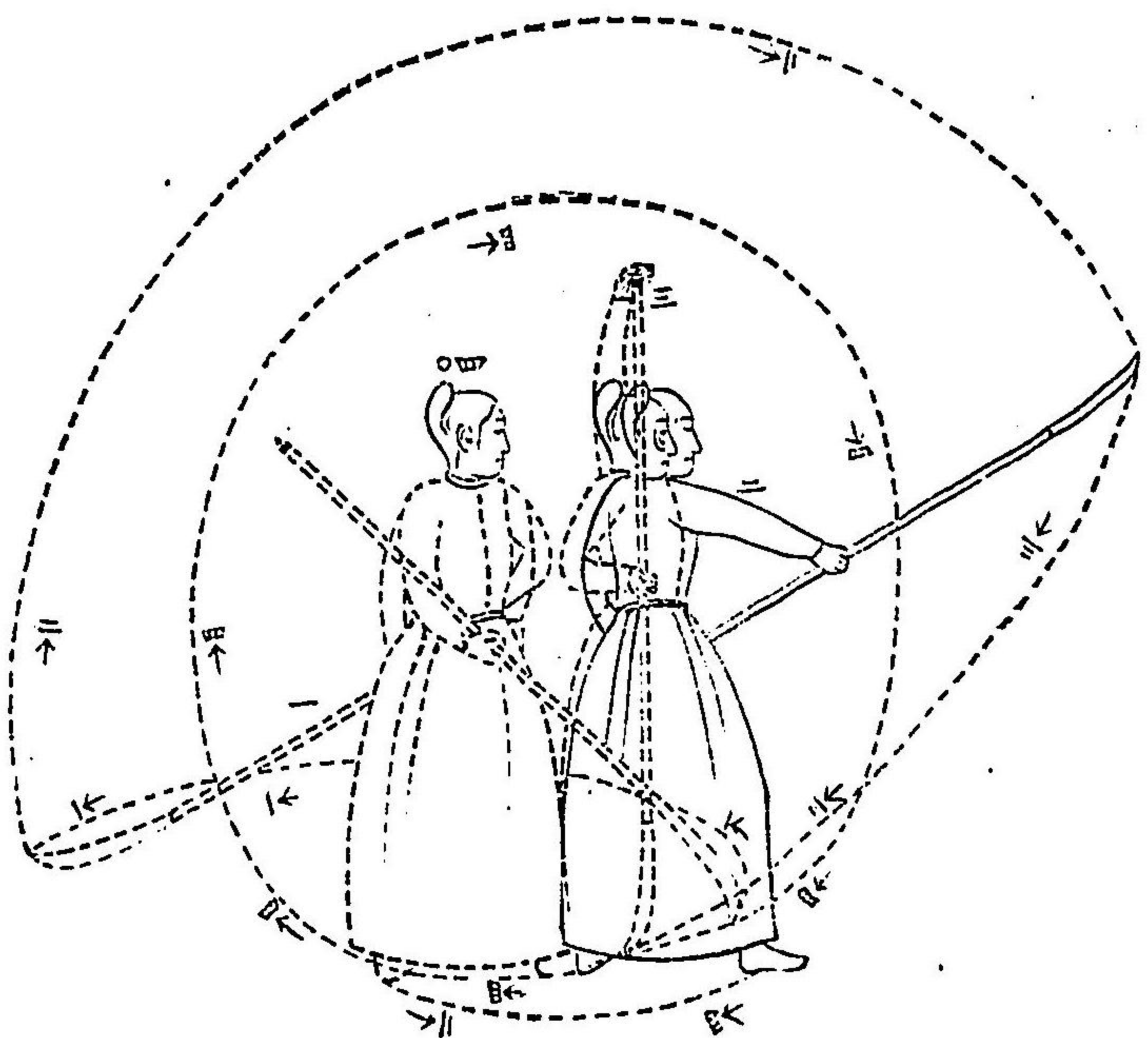
甲動作上の説明

用意の令にて一又は矢と呼びつゝ右足を退け右小脇の構
 を取る

右構動作

一右足を踏込むと同時に刀尖を左後上前方に廻はし敵の
 面を斬る

第七節 第十三圖



一〇四

二前節に同じ

分解教授法左の

如し

一分解一、上體を少しく左方に向け右足(後足)を爪立てつゝ、右手を左腰に廻はすと同時に刀尖(刃を下にす)を左後方に廻はす(刀尖の高さは構に同じ)

分解二、右足を踏込むと同時に刀尖を上前方に廻はしつゝ、左手にて鐲を握り敵の面を斬る

二分解三及び四は前節に同じ

此の如くして四回行ふ但し四回目第二舉動は構換法により左構に變ず

構換法

二送足にて退くと同時に左手にて右手の前際を握り右手を放し右髖骨に當て左構の小脇に取る

但し分解教授法は前節に同じ

左構動作

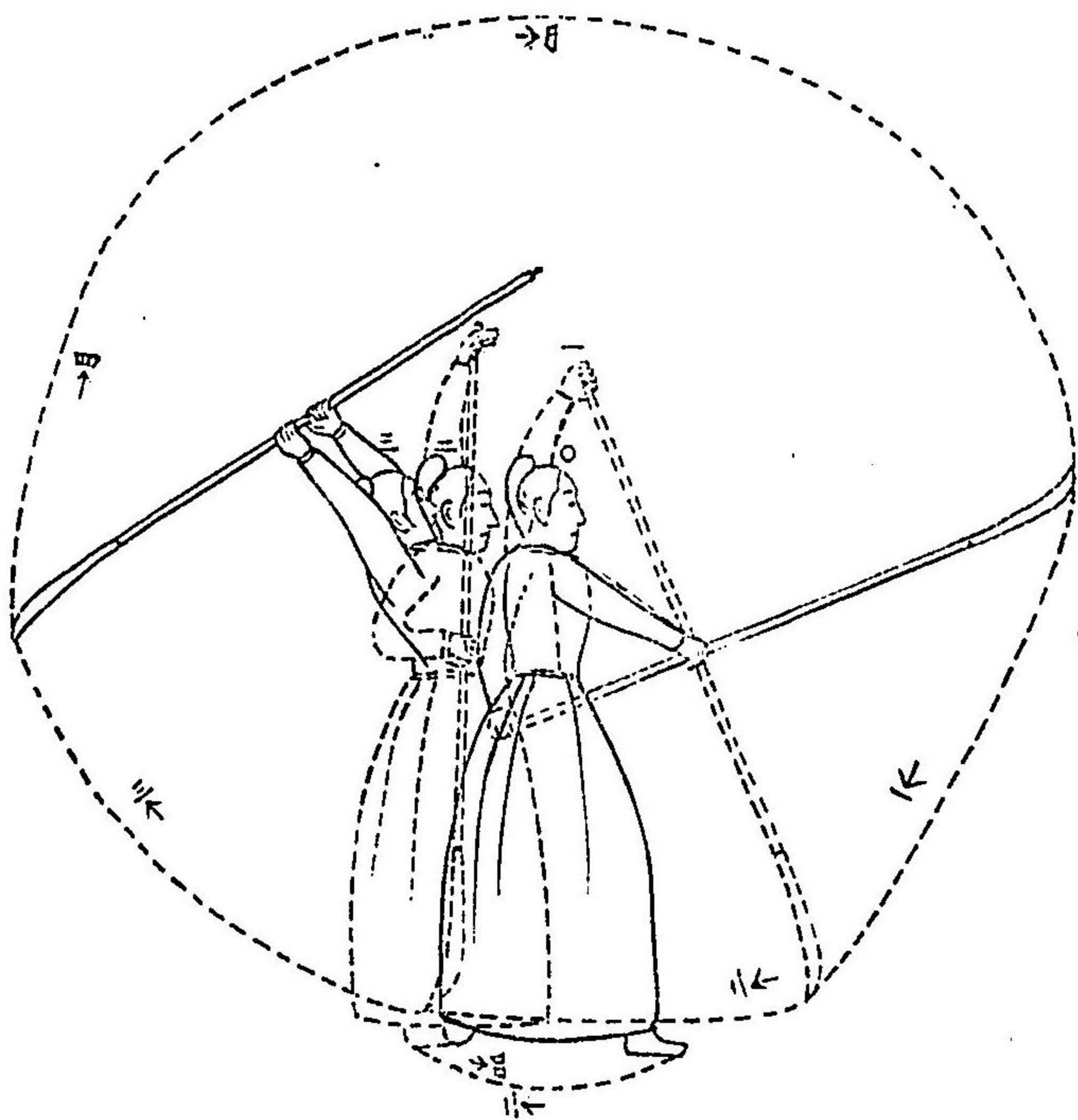
左構にて右と同一の動作を四回行ひ四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず

左右交動

次ぎに構換法により四回左右交動を行ひ續いて一八番號
 により早交動
 及び二回轉を
 行ふ
 早交動(一回轉
 四舉動に分解
 す)
 二右足を退け
 左足に着け兩
 足を爪立て體
 を反らせ左足
 を踏込むと同
 時に刀尖を下、後、上、前方に廻はしつゝ握り違へ敵の面を斬

第七節ノ早交動

第十三圖



る

分解教授法左の如し
 一最初の一回は右構の小脇より風車の方法により敵の面
 を打つ事右構動作一に同じ
 二分解一、左手を頭上に直舉し幾んど下段霞の姿勢を取
 る(下段霞の如く右肘を脇に着けず)
 分解二、右足を退け左足に付け上體を左彎曲ならしむる
 と同時に右肘を後方に引き刀尖を鉛直線より少しく後方
 に垂れしめ左手は指を伸ばして軽く石突を握る
 分解三、體を反らせ兩足を爪立つると同時に刀尖を後、上
 方に廻はしつゝ右手を後上方に舉(薙刀を左掌内を滑へら
 し)げ右手の握部を左手に握らせ右手を添ふ
 分解四、左足を踏込むと同時に右手を扱きて鐵に至らし

めつ、刀尖を上前方に廻はし敵の面を打つ
同一方法により尙ほ三より八迄之れを行ひ續いて二回轉
動作を行ふ

二回轉動作(四舉動に分解す)

一左足を退け右足に着け右足を踏込むと同時に両手を握
換へつ、刀尖を體の左側に於いて下、後、上、前、下、後、上、前方に
廻はし敵の面を斬る

分解教授法左の如し

一分解一、左足を退け右足に踏着け上體を左に捻ると同
時に右手を舉げ刀尖を下げて左側後方に引くや否右手に
て鐵を前下方に押し放ちて刀尖を後、上、前方に廻はらしめ
右手の甲を上にし上より薙刀(左手より六七寸刀尖に近き
部分)を握る薙刀は前後に一直線内に在らしめ肩の高さに

て水平にし刃を下にす

分解二、左手にて薙刀を上につき放ち刀尖の下、後、上方に
廻り來るを又左手の甲を上にして上より右手の腕を握る
薙刀の方向と高さとは一に同じ但刃を上にする
分解三、右手を握り換へ甲を上にする
分解四、右足を踏込むと同時に刀尖を上、前方に廻はしつ
、左手を扱きて鐵に至らしめ敵の面を斬る
同一方法により尙ほ二より八迄之れを行ひ氣を附けの姿
勢を取る

乙技術上の説明

左右構動作分解四の上げたる手にて石突を正しく前方に
押しつ、撫で下げて他手に至らしむる事は前節に同じ
早交動を行ふ時刀尖は風を切りて下、後、上方に回轉せしむ

るを要す

丙 教授上の注意

左右構動作分解一を行ふ時、刀尖の上からざるを可とす
 二回轉を行ふときは頭を正面に向くるは勿論上體も成る
 べく正面を向はしむ

丁 體育上の説明

用意の運動前節に同じ

一 分解一、上體を捻り左前方に向くる髀臼關節の運動及
 右前臂を廻前せしめつゝ右臂を強く内轉せしめ且右手腕
 關節を前屈せしむる運動

分解二、右足を踏込むと同時に右前臂を外旋せしめ右肩
 胛關節の運動を爲しつゝ右肘を折り且つ伸ばし左前臂を
 外旋せしめつゝ左手を左髖骨下に當つる運動

二 分解三、四は前節に同じ

右構換法、前節の運動に同じ

早交動、

分解一、第四節二舉動の運動に同じく只右肘を伸ばすを
 異なりとす

分解二、前節分解三に同じ只前足を退け兩足を揃ふるを
 異なりとす

分解三、兩前臂を内旋しつゝ左右手を後上方に上げ兩足
 尖を爪立て兩脛を少しく折り上體を後方に反らす運動

分解四、左足を進め頭を左に向け左手を前方に出だし右
 手を右髖骨下に當て敵の面を斬る運動

二回轉前節の二回轉運動に畧同じ只水車に於いては後手
 たる左(右)手の回前、回後、回前、回後運動を爲す時本節に於い

ては前手たる右(左手)の回前、回後、回前、回後運動を爲すを重
もなる異點とす
本節及前節の早交動及二回轉は殊に手指の練習と機敏な
る動作とに慣れしむる益あり

第八節 名 下段脚斬 下段(星眼)より送足にて
進み前片足立にて敵の脚を斬る

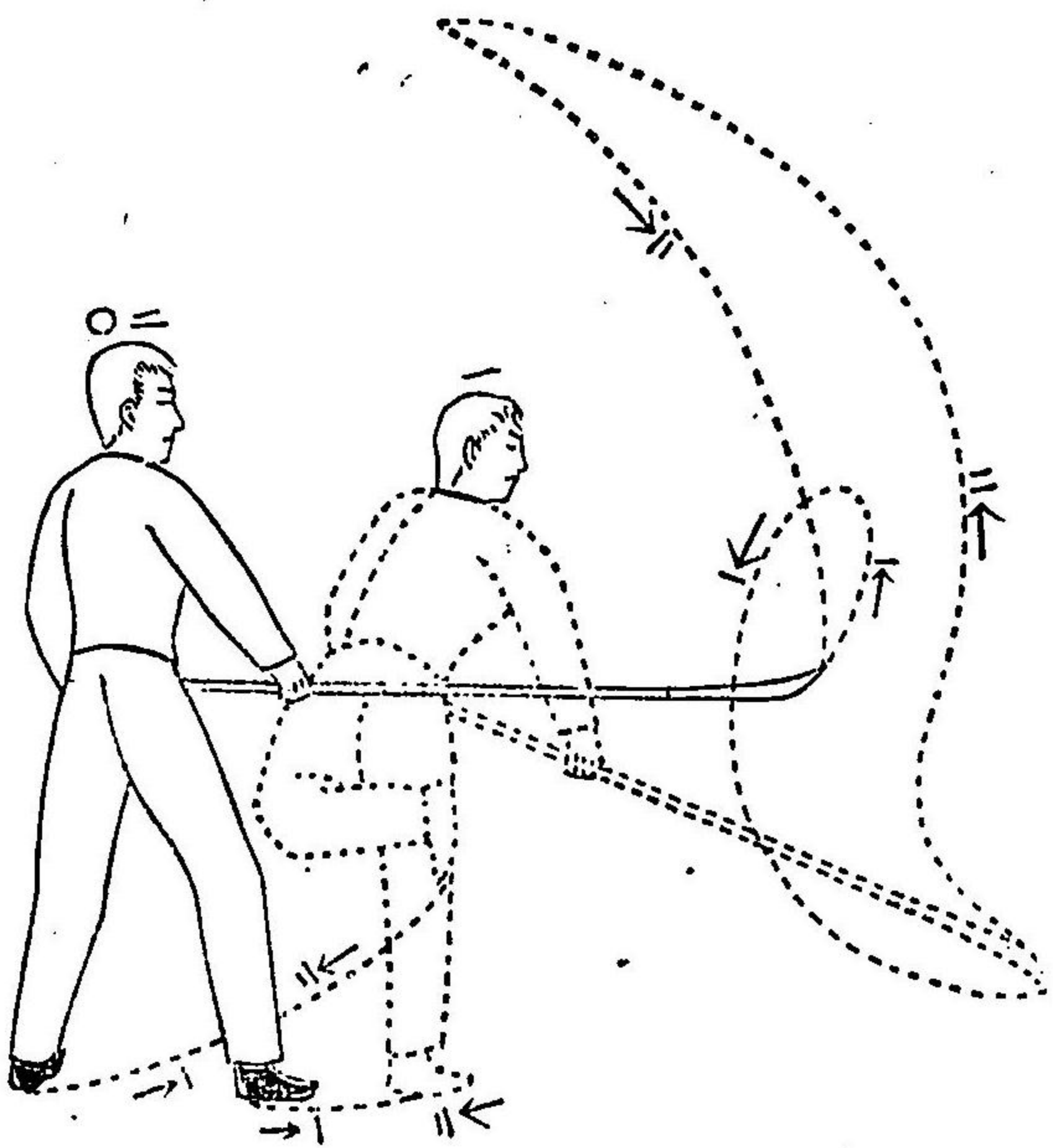
變化打の部分 腰、胴、横面、

甲動作上の説明

用意の令にて一又は矢と呼びつゝ、左足を退くると同時に
刀尖を前方に下げ水平に爲し右、下段に構ふ
但し此の水平下段を或は一文字の構と云ひ刀尖を水平よ
り下げ脛の中央部位に向くるを地摺(スリ)下段と云ふ
右構動作

第八節

圖二十三第



一送り足にて飛び進み左足を後右方に上げ右臑上部に着
け右片足立となり上體を少しく前方に屈すると同時に刀
尖を右、下、左方に廻
はし左手は左腰に
當て敵の脚を斬る
二左足より舊位に
退くと同時に刀尖
を頭上方に上げ面
を打つ氣勢にて下
段に復す
此の如くして四回

行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により左構に變ず
構換法

二左足を右足の一步後方に蹈着け左足を軸として右足を後方に引くと同時に刀尖を上げ左手にて右手の前際を握り右手を石突迄扱き面を斬る氣勢にて左構に變ず

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず

左右交動

次ぎに構換法により四回左右交動を行ひつゝ二舉動にて氣を附けの姿勢を取る

乙技術上の説明

脚を斬らんとするときは右(左手は右左方に寄せず左(右手を體より左右方に離し急速に強く左(右腰に當つれば我れに隙なく薙刀は急速に動き且つ刀尖に能く力の入るもの

なり

脚を打つに必ずしも前片足にて立つを要せざれども本節に於ては前片足立の練習をなすものなり是れ實際に於て片足にて働くの場合無きに非ざる可ければなり

構換法二を行ふ時左右手を握換ふる時は薙刀を緩く握り決して手を薙刀より離す可からず否らざれば薙刀を打落さるゝ患あり

丙教授上の注意

撃ちたるときは石突は左腰に當て刀尖は前方に水平にし又は前下方(地摺下段なれば)に下ぐる様注意すべし

教官は時々待ての號令を下し暫時打込みたる姿勢にあらしむる練習を爲さしむ可し

下段(星眼)に復するときは刀尖を上げ面を斬る氣勢を示す

を要す

丁 體育上の説明

用意第三節の用意精眼に略同じ

一 送足にて進(兩髀臼關節を外轉せしむ)み直ちに左膝を強く折り後(左)足を後ろに上げて臀部を蹴る如くし上體を前方即ち右側に屈し(右髀臼關節を外轉す)右片足にて立ち頭は正面せる故右向きにて後屈せしめ同時に右前臂は回後内旋せしめ前下方に伸ばし左臂を外轉せしめつゝ左前臂を回前外旋せしめ左手を左髖骨下に着くる運動を爲す

二 屈しある左膝を伸ばしつゝ送足にて退くと同時に少しく屈しある左臂を下方に伸ばし復た屈して左髖骨下に着け同時に前下方に伸びある右臂は右肘を折りて肘を右側に張り握拳を右乳部に着け復前下方に伸ばす運動

右構換法、左手にて薙刀を押し放し左掌を開きて前下方に伸ばし左手にて右手の五寸程先きを握り右手は右乳部に持來り石突迄扱きて右髖骨下に着け同時に左脚は伸ばして後方に足尖を踏着力其の足尖に體重を托して右足を後方に退くる諸運動を爲す

本節の打は殊に敏活なる動作に慣れしむる効あり

第九節

稱名 突 星眼より送足にて進み敵の水月を突く

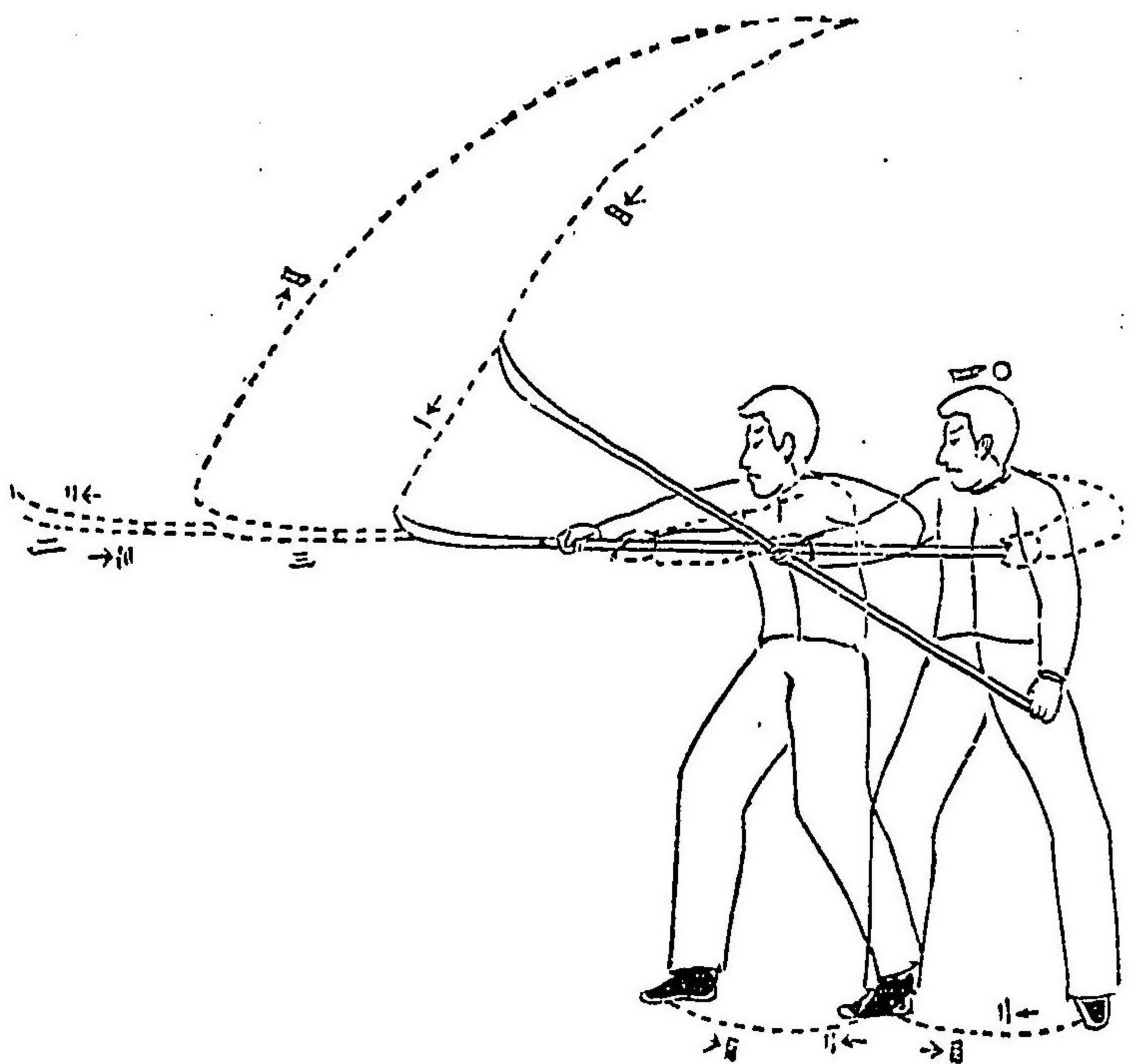
變化打の部分 面、咽喉、胸、下腹

甲 動作上の説明

用意の令にて一又は矢と呼びつゝ左足を退け右構の星眼に構ふ

右構動作(四舉動に分解す)

圖三十三第 節九第



一 送足にて踏
込むと同時に
薙刀を平に水
平にし突出し
て直ちに引く
二 送足にて退
くと同時に星
眼に復す
分解教授法左
の如し
一 分解一、右
手の位置を變
ぜず石突を握

れる左手を左乳下に入れて薙刀を前後に一直線内の方向
に水平にしつゝ、刃を外に向けて平にす
分解二、送足にて進むと同時に左手を前方に突き出し右
手に當つ故に薙刀は右掌内を滑り刀尖は敵の水月を突き
水平を保つ
分解三、左手を引きて左乳下に復せしむ(薙刀は右掌内を
滑る)
稍熟すれば分解二三を合して一舉動(分解二)と爲し分解四、
を三に繰り上ぐべし
二 分解四、送足にて退くと同時に面を打つ氣勢にて星眼
に復す
此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法に
より左構精眼に變ず

構換法

二左足を軸として右足を退くると同時に風車の方法により左構の精眼に取る

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず

左右交動

次に構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢に復す

乙技術上の説明

分解法一の姿勢にあるときは刀尖は突かんとする敵の局部に向はしむべし
突出だすときは刀尖を左右上下にそれしめざる様注意す

へし

突かんとする時伸びたる前手を折りて體に近づけしめざる様注意すべし

突き出したる刀尖は急速に引くべし否らざれば我薙刀を切り折られ又二度目の働をなすに不便なる等の不利あり
突は薙刀の刃を左右上下に向くるの四種あり

突出せるときは後足を爪立て體重を前足に多く托し星眼に復したるときは後足に多く體重を托するを可とす然るときは本節の連續運動をなすに便利なり

丙教授上の注意

毬の如きものを吊し置き之れを突く練習を爲し又突かれ
て動搖し居る毬を突くの練習をも爲す可し此運動は如何なる狭き室にても又廊下にても行ふ事を得て愉快を感じ

つゝ知らず識らず充分なる運動を行ふを得べし著者は庭内に之れを設けて六七才の兒童に試みて大いに効驗あるを實驗せり

又學校等にては竹などにて大なる鳥居様の者を作り之れに多數の毬を垂れ兒童をして突かしむれば大に興味あり

丁 體育上の説明

用意 星眼の運動は第三節に同じ

分解一、左前臂を回前しつゝ左肘關節を強く屈して側方に張る

分解二、送足にて進みつゝ左臂を前方(内轉)に伸出す

分解三、伸出せる左臂の肘を折り強く後方に引き分解一の姿勢に復する運動

分解四、前節構に復する運動に略同じ

右構換法

風車の右(左)構動作分解三四即ち構に復する運動に略同じ只終りに小脇に取らずして左手にて薙刀を握り右手を石突に扱き精眼に取るの異なるのみ

本節の突き運動は殊に敏捷なる動作に慣れしむる効あり

第十節

稱名 打落 上段霞の構より突き來るを打落す

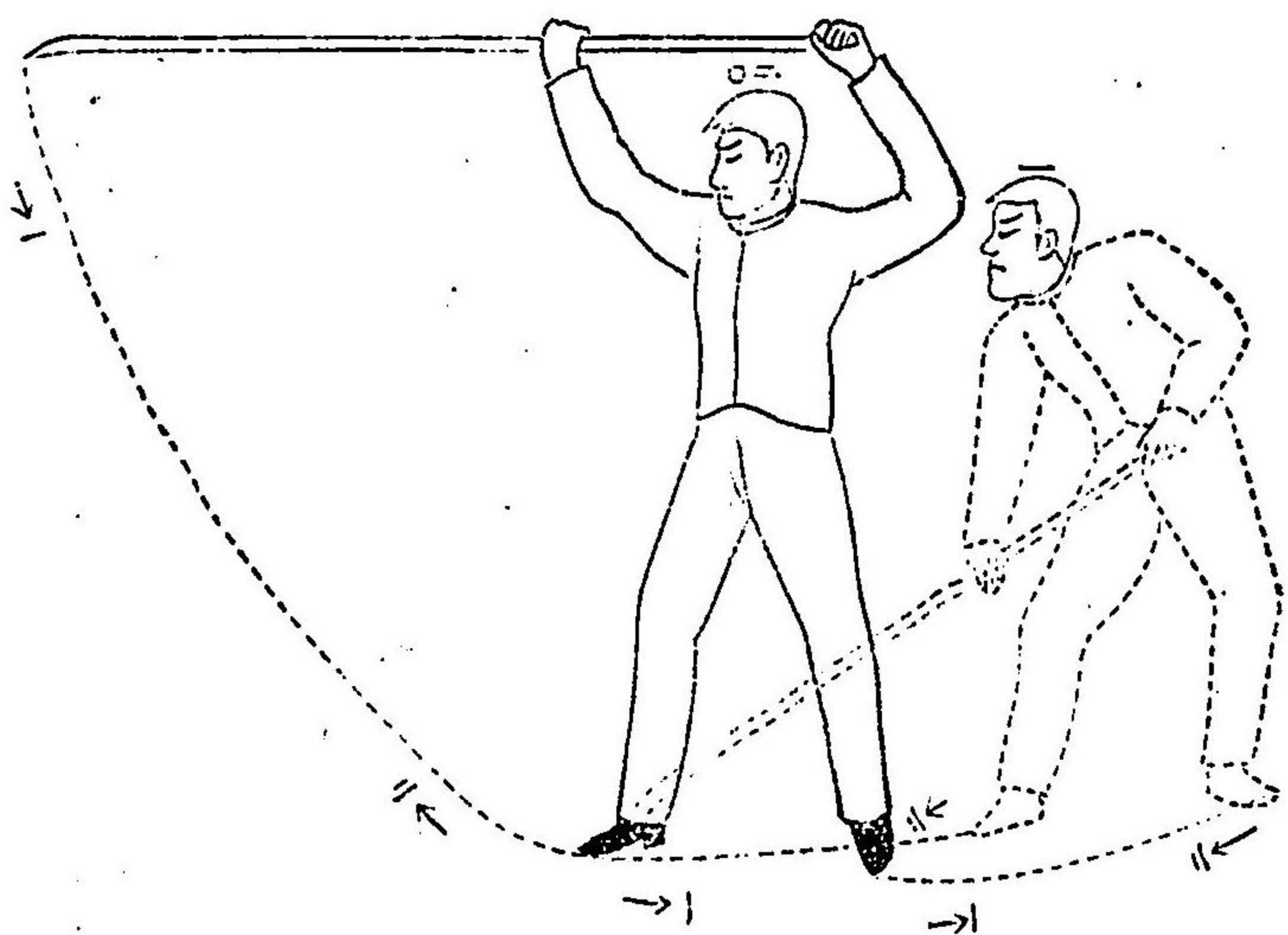
甲 動作上の説明

用意の令にて一又は矢と呼びつゝ左足を退け右、上段霞の構を取る

右、上段霞の説明

左足を退くと同時に刃を上に向け薙刀を頭上にて前後に一直線上に在らしめて水平にす後方なる左肘は鋭角を

第十節 第三十四圖



なし前方なる右肘は鈍角をなす而して顔面を正面に向かしむ(下段霞に比し薙刀の頭上にて水平なるを異なりとす) 右構動作 一左足を後右方(右後隅)に退け右足も連足にて後右方に退くると同時に刃を左下、右方に廻はしつゝ、両手にて薙刀を下ぐ、鎌を握れる左手は左腰部に右手は前下方

(左前隅)に下げ刀尖は地上凡そ五寸許りの所に下げると同時に上體を前に屈め顔面は敵に向け敵の突き来る武器を打落す

二右足より送足にて進み舊位に復すると同時に右、上段霞に復す

此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により左構に變ず

構換法

二左手にて鎌を押し放てば刀尖は體の左側に於いて上、後方に廻り来る可きを以て左手にて右手の後際即ち刀尖に近き方を握り右手を石突迄扱きつゝ、刀尖を左下、前上方に廻すと同時に左足を定位に進め右足を定位の一步後方に踏着力左構の上段霞に取る

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず

左右交動

次に構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢に復す

乙 技術上の説明

敵の武器を打落すときは刃にて打たざる様刃を少しく上に向くべし即ち平にせる薙刀の刀背に力を入れしむ可く又打落すときは刀尖を上方に上げ廻はすこと無き様に注意すべし

分解一を行ふ此時後右(左方に送足にて退くは我が體をかすが爲めなり

後右(左方に退きて我が兩足兩手の位置と薙刀と腰と上體とを皆左(右)前隅と右(左)後隅との方向に斜めに並行せしむるは打落すに仕損じ無からしめんが爲めなり
本節の進退送足は早送足即ち普通の送足と飛退きとの中間位の速度たるべし

構換法にて上段霞に構ふるときは刀尖は敵の腋下より切り上ぐるが如き氣勢にて力を籠むるを要す

丙 教授上の注意

構の時後手は成る可く背後に上げ刀尖の上下せざる様注意し又正面せるが故に兩眼にて前方は勿論左右兩方を等しく見るを要す

構に復する時兩足の位置は必ず前後に一直線上に在らしむ可し

構換法の時前足は殊に定位に復する事に注意すべし

丁 體育上の説明

用意 左足を退け頭を右に向くと同時に左前臂を回前せしめつゝ左肘を鋭角に折りて左手を後方即ち後頭側上に舉げ右前臂を回後せしめつゝ右肘を鈍角に折り右手を前方即ち前頭側上に舉ぐる諸運動

一 送足にて右後隅に退き右髀臼關節を外旋せしむる運動
上體を前に屈むる運動頭を右に向け且つ後屈せしむる運動
左臂を屈したるまゝ前轉せしめて左髌骨下に當て右臂を伸ばし内旋せしめつゝ前轉せしめて前下方に下ぐる運動

二 右足より送足にて進み左右兩臂を前轉せしめて頭上に舉ぐる他用意の運動に同じ

右構換法の運動

左手にて薙刀を押放す伸指筋の運動右前臂を回前せしめ石突に扱き左前臂を回後せしめて薙刀を下より握り屈指筋の運動つゝ左足を定位に進め右髀臼關節を内旋せしめ右足を定位より一步後方に退く(兩髀臼關節の外轉)ると同時に兩手を舉げ頭を左に向け左構の上段霞に取る運動

第十一節

稱名 脛拂 前構より脛を拂ふ

變化打の部分 腰、胸、頸

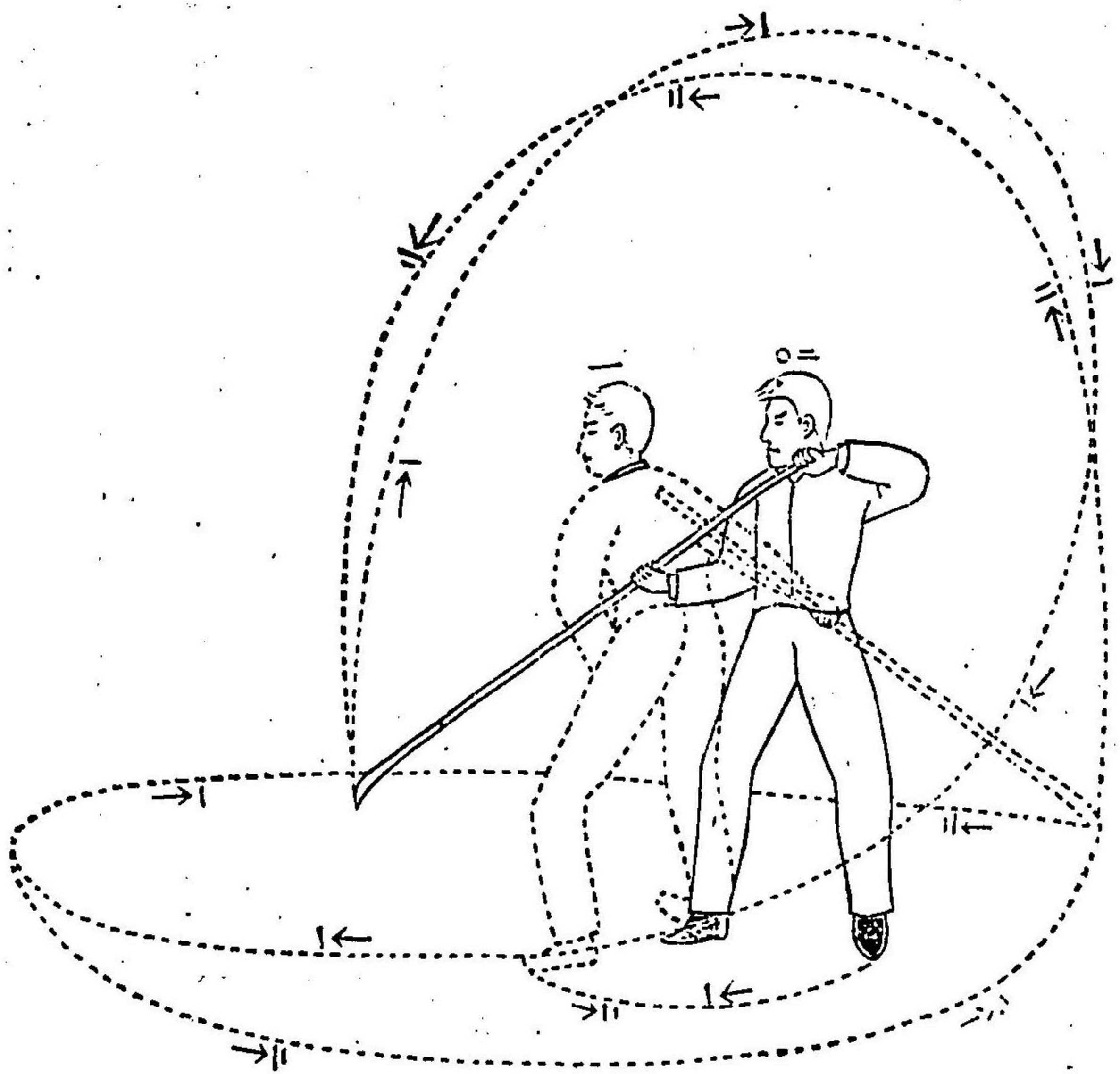
甲 動作上の説明

用意の令にて一又は矢と呼びつゝ左足を退け右前構の體勢を取る

右前構の説明

前構とは下段霞の如く構へ只鍬を頭上に在らしめずして

第三十五圖 第十一節



口邊に在らしむるの差あるのみ
右構動作(四)舉動に分解す
一分解一、
両手を頭上に挙げ薙刀を水平にしつゝ、刀尖を少しく右方にかはし刃

を後に向け薙刀を平にす
分解二、左足を踏込むと同時に刀尖を右後、左下前、右後方に廻はし敵の諸脛を拂ひ左手は左髀骨に當つ此の時踏止みたる前足は直角に折り後足は爪立て後脚は斜めにし體は前に屈ましむ
二分解三、刀尖を右、前、左、後方に廻はし
分解四、左足を退け舊位に復せしむると同時に刀尖を上、前下方に廻しつゝ、左手にて鐲を握り右前構に復す
此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により左構に變ず
構換法
二分解三、刀尖を右、前下方に廻はし左手にて右手の前方を握る

分解四、送足にて退きつゝ左構に變ず

熟練せる後ちは分解三四を同時に行ふ

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず

左右交動

次ぎに構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢を取る

乙技術上の説明

分解二を行はんとする時は前脚の膝を折り體を前に屈せしむるは勿論成るべく右手を前に伸ばじ刀尖を遠く届かしむ可し、演者は何物か前方に的を置き距離を定めて之れを拂ふ事を行ひ順次其の距離を遠くして練習すべし

丙教授上の注意

本節は初段中最も迂鳴を生じ易き動作なれども緩慢なる演習にては迂鳴の生ぜざる者なれば注意して行ふ可し

本節は初段各節に熟練せる後は時に或は飛違への方法により行はしむるも可なり

薙刀を頭上にて廻はすときは石突の下がらざる様刀尖の上がらざる様注意すべし

本節を教授するに方り始めは體を屈せず前膝を折らしめざるを可とす

丁體育上の説明

用意の運動此の前構は第四節下段霞の運動に同じ

一分解一、兩手を舉(兩肩胛關節の運動)げ兩手指にて薙刀を軽く握る手指の練習運動

分解二、左足を前方に踏込み體重を左足に托して左膝を折り左前臂を回前せしめ左手腕關節を脊屈せしめつゝ、左手を左髌骨に當て右手を回前せしめつゝ、右臂を前轉後轉せしめ且つ兩手指の練習及び左髌白關節の内旋と右髌白關節の外旋運動

二分分解三、右足を爪立て内旋せしめつゝ、腰を左に捻(兩髌白關節の運動)ると同時に右臂を内轉せしめて左腰に至らしめ右手腕關節を前屈せしむる諸運動

分解四、左足を退け右前臂を回後せしむる他用意の運動に同じ

右構換法

送足にて退く運動、左前臂を回後右臂を前轉右前臂を回前せしむる運動の他用意の運動に同じ只左構の差あるのみ

第十二節

稱名 足拒面擊

甲動作上の説明

用意の令にて一又は矢と呼びつゝ、右足を進むると同時に

右、精眼に構ふ

右構動作

一送足にて退き

後足(左足)にて立

ち前足(右足)を左

の上腿に擧ぐる

と同時に下段霞

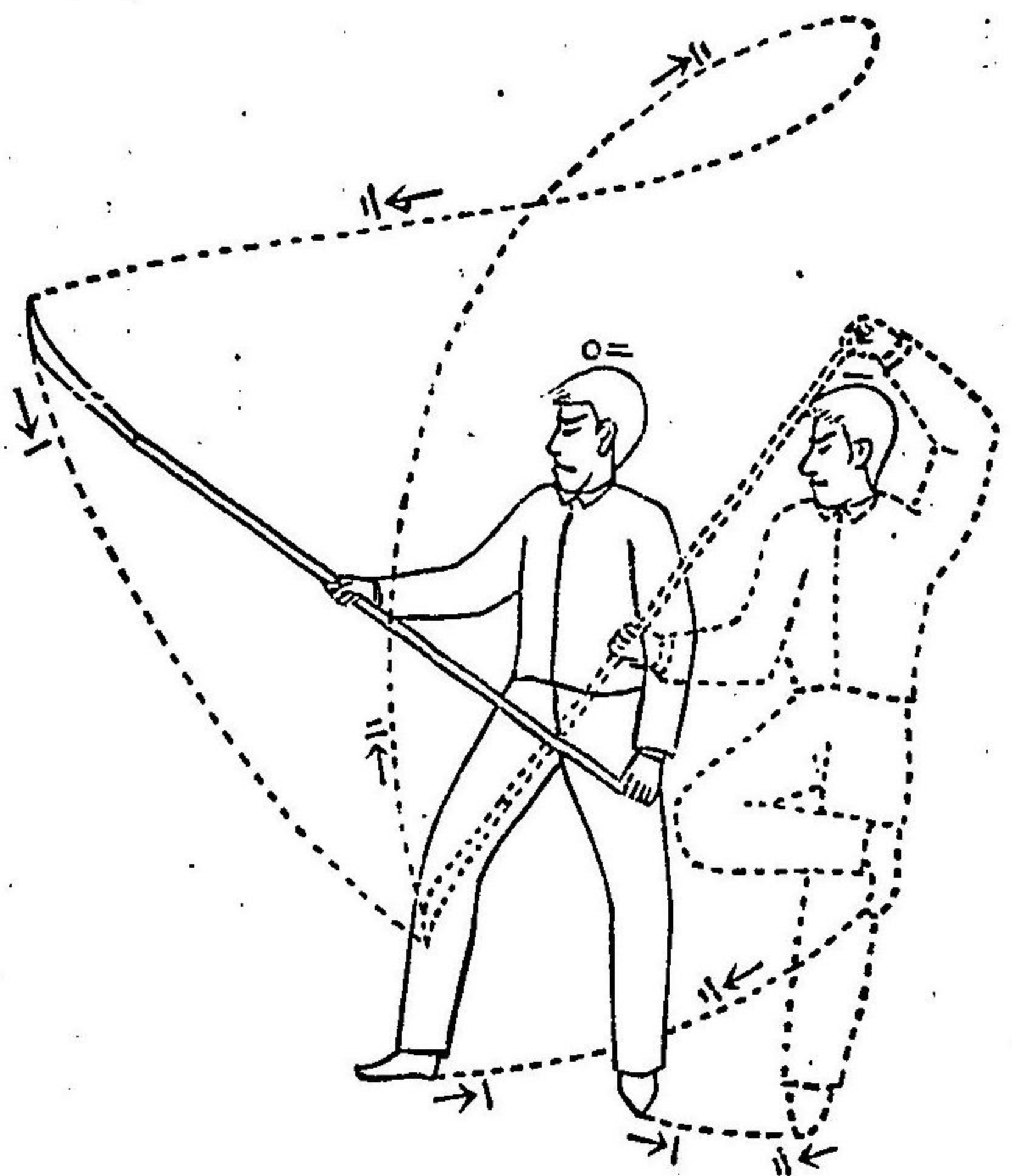
に取り足を拒ぐ

二擧げたる前足

(右足)を踏込み舊

第二十節

圖六十三第



位に復し後足(左足)を連足にて進め舊位に復すると同時に刀尖を右、上、左方(弧形)に上げ面を打下ろし精眼に復す此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は前足(右足)を後足(左足)の一步前に踏着け其の右足を軸とし左足を前に踏込むと同時に風車の方法にて面を打ち左構の星眼に取る

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構の星眼に變ず

左右交動

次ぎに構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢を取る

乙 技術上の説明

脚を拒ぐは只下段霞に取るのみにても宜しく又送足にて退くのみにてても大抵は敵の切先を外づし空を打たすを得べく又前足を舉げ片足立になるのみにても亦大抵空を打たしむるを得べし本節の方法は此三者を兼ねたる者なり下段霞に取りたるときは双を敵の切先に當てざら(若し當つれば双を缺く恐れあり)しむる爲め稍少しく双を外方に向けしむ可し

演者は一の呼唱にて片足立にて正しく久しく安らかに立ち居らるゝ様練習すべし

丙 教授上の注意

第一舉動を行ふ時教授の始めは足を舉げず只送足にて退き下段霞に取るのみにすべし
脚を防ぎたるとき刀尖を注視せざる様注意すべし又前足

を充分に左(右)方に擧ぐるを要す

丁 體育上の説明

用意 第三節の構に同じ

一 送足にて退きつゝ、右膝を折り右髀臼關節を外轉せしめ右足跗關節を伸ばし右趾を前屈せしめ左片足にて佇立する諸運動の他第四節の用意に同じ

二 右脚を伸(四關節)ばし送足にて進む他用意の運動に同じ
右構換法、右足を伸ばし一步前に踏込み左足を踏込む他第九節構換法の運動に同じ

第十三節

名 鐵留 星眼より鐵にて面打を拂ふ

甲 動作上の説明

用意の令にて一又は矢と呼びつゝ、左足を退くると同時に右、星眼に構ふ

右構動作(始めは五舉動に分解し後ちに四舉動に分解す)

一分解一、鐵を握れる左手を後下方に引く(右手は同位置にありて動かさず故に薙刀は右掌内を滑べり薙刀の方向は依然として星眼の方向なり)

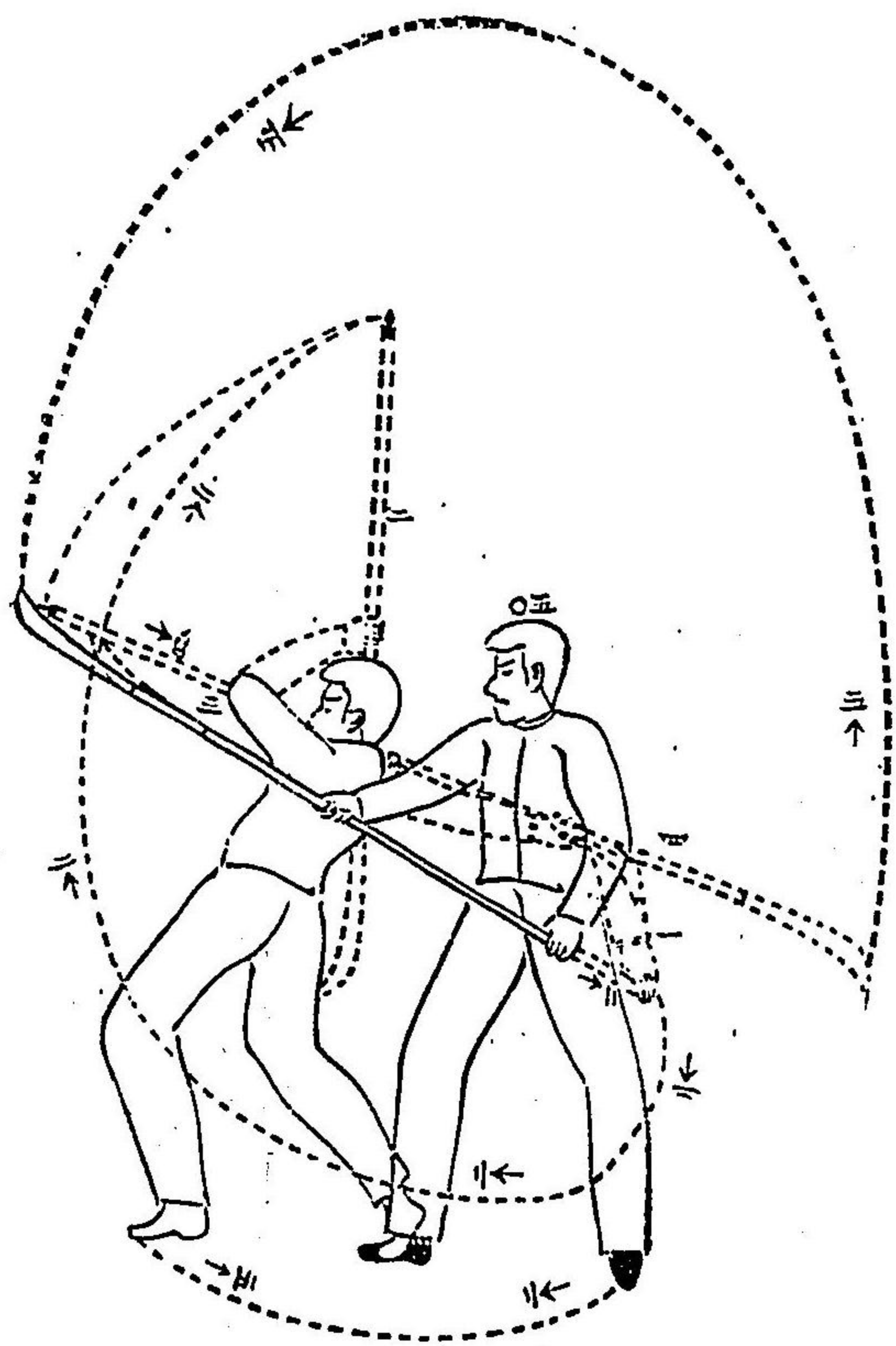
小分解二、右肘を右脇に着け左足を踏込むと同時に石突を左下方より頭上に上げ薙刀を鉛直にしつゝ、左手を扱きて右手より凡そ四寸位隔たりたる部分に至らしむ(但し左右手は指を伸ばし軽く握る)熟練せる後ちは體を反らせ面は敵に向け左膝を折るべし

小分解三、

石突を下げて敵の面に向はしむ此の時右脇に着けある右肘は依然右脇に着け置き右手は肩の高さにて肩より右方四五寸離れしめ左肘は折りて口邊に上げ敵に向はしめ左

前臂と薙刀と幾んど並行せしむ然る時は鍔は我が面部より少しく左上方に在るべし
 二分分解四、右手にて薙刀を後方に引き左掌内を滑へらせ左手にて石突を握る
 分解五、左足を退け舊位に復せしむると同時に切先を上前方に廻はし右構星眼に復す
 此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず
 構換法を行ふ前分解法、二、三、を合併して一舉動(分解二)と爲す然るときは分解四、五、を繰り上げ三、四、となす可也故に合併前の分解二、三、を小分解の二若くは三と名づく
 構換法
 二分分解三、右手にて薙刀を上前方に押し放ち直ちに右手

圖七十二第 節三十第



にて薙刀を撫で下げ石突を握る
 分解四、送足にて退き左構の星眼に取る
 左右交動
 左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉

動は構換法により右構に變ず

左右交動

續いて構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢
を取る

乙技術上の説明

分解法一、の薙刀を後方に引くは二の舉動を行ふとき柄
を長く敵前に出さんが爲めなり

分解法二、の姿勢は一には身體を守り、二には敵を石突に
て突かんとする氣勢を示すべし眞劍なれば拂ひ除くれば
必ず突く可き手なり故に各自演習にては教官は生徒が初
段各節に熟達せる後は或は一舉動にて此の防拂と突撃と
を行はしむ可し此場合に於ては鐵留突の號令を下す可し
丙教授上の注意

本節は進んで構へ退きて演習するも可なり
本節の方法にて敵刀を拂除ける事は餘程熟練せる者に非
ざれば能はざる者なるが故に演者は他人をして薙刀等の
武器を眼前に星眼の構の如く斜めに出だし置かしめ又は
棒切などを眼前に吊垂し置き此の方法を以て拂ひ除ける
練習を爲す可し

丁體育上の説明

用意、前節の運動に同じ

一 分解一、左臂を後轉せしめ左手腕關節を内轉せしめ左
手指を軽く伸ばす運動

小分解二、左足を踏込み左膝を折り體を反らせ頭を左に
向けつゝ前屈せしむると同時に右肘を右脇に着け右前臂
を折りつゝ回前せしめ右手腕關節を脊屈せしめ右手指を

軽く伸ばす運動及び左臂を前轉せしめつゝ左肘を折り左前臂を回前せしむる諸運動
 小分解三、右手を緊握し左肘を鋭角に折り左手腕關節を内轉せしむる諸運動
 小分解二、三を合せて一舉動と爲すは殊に敏捷の動作に慣れしむる効あり
 分解四、右肘を伸ばし右方に張り鋭角の左肘を直角に爲す運動
 分解五、左足を退け頭を右に向くる運動を爲すと同時に右臂を外轉して頭上に運び續いて内前轉せしめ左臂を下げて左髓骨下に當つる運動
 右構換法第三節胴打の構換法に略同じ

第十四節

名 上段横面 上段より鐵にて横面

を斬る

變化打の部分は頸、胸、面なり或は石突にて胸、面を突き或は胸又は面を突きたる後ち胸、面、頸、横面を打つも可なり

甲動作上の説明

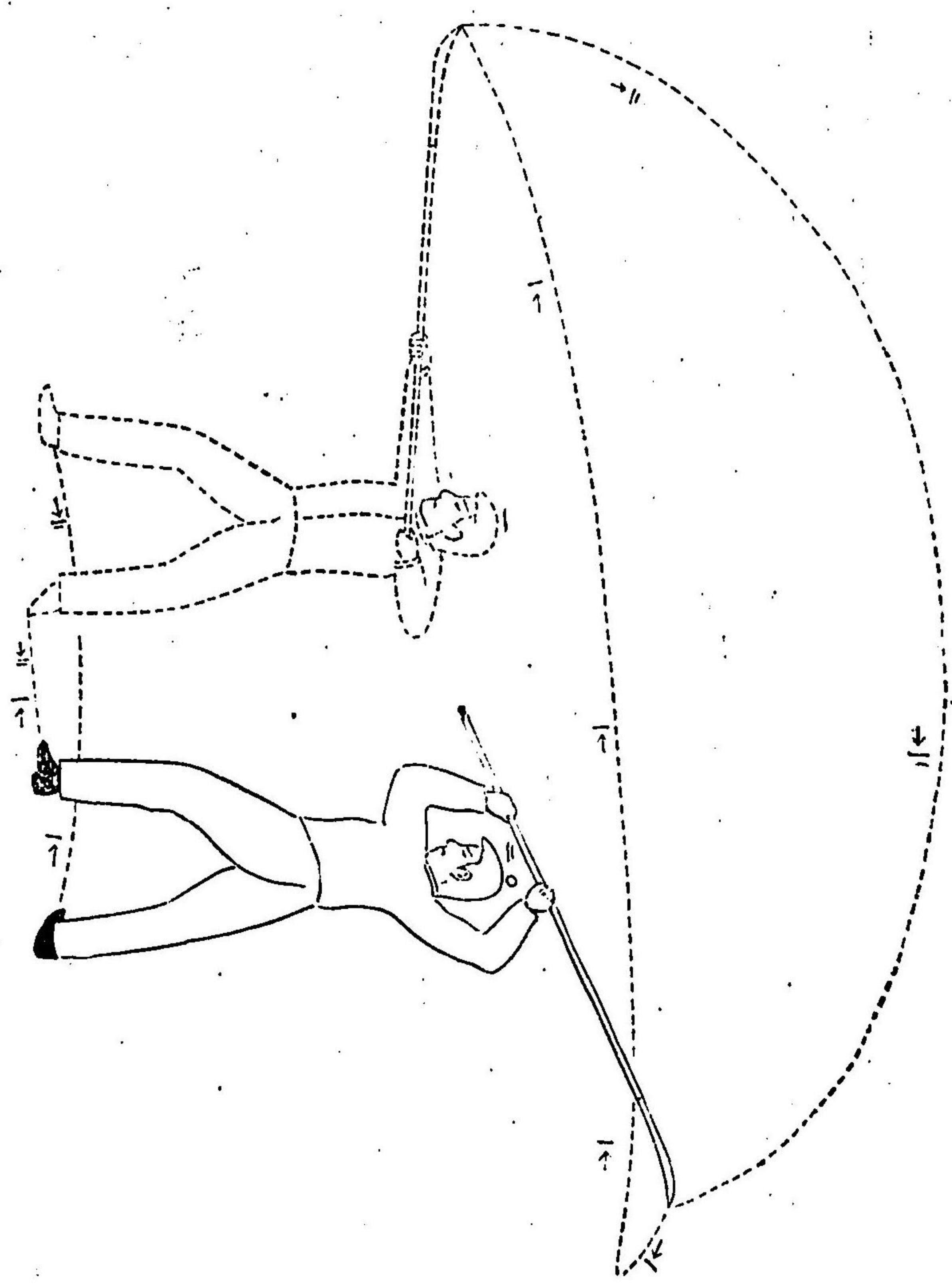
用意の令にて一又は矢と呼びつゝ右足を退け右、上段に構ふ

右、上段の説明

右足を退けると同時に兩臂を舉げ右臂は幾んど伸ばし在臂は肘を鈍角に折りつゝ右手にて鐵を離るゝ事凡そ三尺許の部を握り左手にて石突を距る凡そ一尺五寸許りの部を握り刀尖を後上(少しく右)方に上げ刃を上に向け鐵尖を敵の胸に向はしむ

右構動作

第十四節



第三十八圖

右足を大勝にて踏込み左足を連足にて進むると同時に右手を後方に引き左手にて石突を握り刀尖を右前方に廻はしつゝ、肩の高さに右腕を伸ばし左肘は折りて肩と水平にし左手は肩前に着け敵の左横面を撃つ

注意(右臂は肩の高さに左手は肩前に在らしむる故に薙刀尖は少しく上がりて頸若しくは横面の高さとなる可し)
 二右足を大勝にて後方舊位に退け左足を連足にて舊位に復せしむると同時に右手を石突より三尺、左手を石突より一尺五寸の部分に抜き右、上段に復す

此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により左構に變ず

構換法

二右足より二步退くと同時に左手にて石突を下方に押放

し刀尖の上、後方に廻り来るを撫上げ右手の上際を握りつゝ、右手を扱きて石突を離るゝ一尺五寸程の部分に至らしめ左構の上段に取る

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により右構に變ず

左右交動

續いて構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢を取る

乙技術上の説明

左(右)構の第一舉動の大踏込みは飛込む如く急速に行ひ及び第二舉動大退歩は飛退く如く急速に行ふ可し

丙教授上の注意

本節を始めて教授せんとする時は大踏込を爲さず先づ通常踏込みにて上段の動作に慣れしめ熟するに及び大踏込を爲さしむ可し

丁體育上の説明

用意の運動、右足を退け頭を左に向くる運動を爲すと同時に兩臂を内旋せしめつゝ、前轉して頭上に舉ぐる運動
一兩手を肩と水平の高さまで下げ右臂を伸ばし回後せしめつゝ、右後方に張り左肘を強く折りつゝ、左前臂を回前せしめ且つ右足を大股にて踏込み左足を連足にて進む(是れ兩髀白關節の外轉運動にして又殊に敏捷の動作に慣れしむる効あり)る運動を爲すと同時に左肘を及ぶ丈、後方に引き左手を外旋せしめつゝ、上胸部に着け右臂を前方(體の右側方)に伸ばし且つ頭を右に向くる諸運動

二右足を大腿にて後方に退け左足を連足にて定位に退くる
兩髀臼關節の運動を爲すと同時に兩手を内旋せしめつゝ
頭上に舉ぐる兩肩胛關節の運動

右構換法

右足より二步後方に退く敏捷運動の練習、左前臂を外旋、右
前臂を回前せしめつゝ、頭上に舉げ頭を右に向くる運動

第十五節

名 隅飛胴 精眼より前隅に飛び込
み折敷き胴を斬る

甲動作上の説明

用意の令にて左足を退け星眼(右)に構ふ

右構動作

一左足を左前隅に飛び進め折敷きつゝ、右足を左足の前方
に飛び進め左膝勢を爲すと同時に刀尖を右下方に廻はし

つゝ、刀尖並に兩手を下、前、上、左方に彎形を畫きて進め、薙刀
を前額の高さに水平にし正面より敵の胴を斬る(刀は彎形
に進む方向即ち前上方に向く)

二起ちつゝ、右足より舊位に退くと同時に面を撃つ氣勢を
示し星眼に復す

此の如くして四回行ふ但し四回目第二舉動は構換法に
より左構に變ず

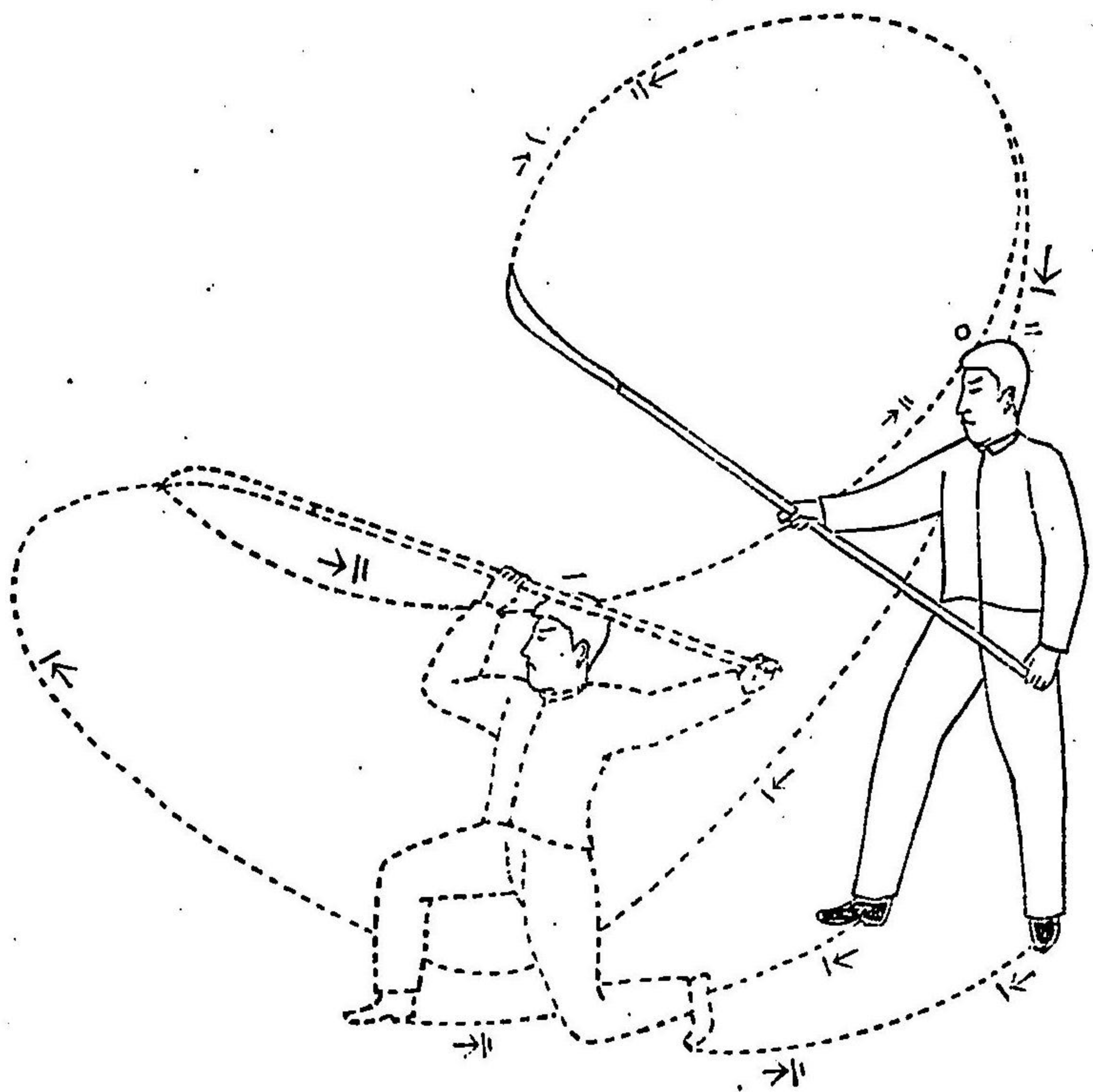
構換法

二右足を大腿にて後右方(構の左足跡)に退け左足を定位(構
の右足跡)に踏着くると同時に風車の方法により左構の星
眼に取る

左構動作

左構にて右と同一の動作を四回行ふ但し四回目の第二舉

圖九十三第 節五十第



一五二

動は構換法により右構に變ず
 左右交動
 續いて構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢を取る
 乙技術上の説明
 前隅飛は敵

の打込む太刀を外つしつゝ、敵に打入る爲めなれば急速に飛込むを可とす
 打入るとき薙刀を彎形に進め又刃を彎形と同方向に進ましむるは鎧の札の間より斬れ込まんが爲めなり而して斬込む時左方に引くは斬れ易からしむる爲めなり
 膝姿を爲せる時後足は爪立て前足は脛を垂直ならしむ可し顔は少しく仰向き右(左)前即ち刀尖の方に向け敵を注視すべし

丙教授上の注意

教授の始めは四舉動に分解し左足を左前隅に踏込むを分解一とし右足を踏込み打つを分解二とし右足を舊位に退くるを分解三とし次に左足を舊位に退け精眼に復するを分解四とす漸く熟するに従ひ分解一二を合して第一舉

一五三

動と爲し分解三四を合して第二舉動と爲すべし
體操場泥濘の爲めに衣服を汚損するの恐れある時は折敷
かずして行ふを可とす又體操場に小石などありて膝を痛
むるの恐れある時は折敷きたる膝頭を地面より二三寸上
げ居るも可なり

丁 體育上の説明

用意、精眼の構の運動は前にあり

一 隅飛蹈込を爲す兩髀臼關節の運動及び隅飛蹈込み折敷
を爲すが故に左足尖と左足跗關節を充分に背屈せしめ左
膝を地に着け左膝關節を銳角に折る及び右膝を直角に折
る運動を爲すと同時に頭を斜めに右に向け左手を回前せ
しめつゝ左臂を前外轉せしめて前頭の高さに上げ又同時
に右前臂を回後せしめつゝ右肘を折り右上臂を内轉せし

むる諸運動

二 立つが故に右膝及右髀臼關節の展伸と左足尖右足跗左
膝左髀臼關節の展伸右足より二歩退き舊位に復する兩髀
臼關節の運動を爲すと同時に右前臂を内旋左前臂を外旋
せしめつゝ精眼に復する運動

右構換法

立つ時下肢の運動を爲すは前項に同じ右足を大腿に退け
左足を連足にて退くるは兩髀臼關節の運動同時に風車の
運動を爲し精眼に構ふるは第九節突の構換法及び第十二
節の脚拒面打構換法に同じ

本節は一二兩舉動並に構換法共に殊に敏捷の動作に慣れ
しむる益あり

第五章 對向演習 第十三節

對向演習十三節の内第一節より第八節迄其の名稱及方法回数等畧前章各自演習の第一節より第八節迄に同じく只相對して演習し打合はすの必要より少しく變ずる所あるのみ即ち第一節と第三節とは斬撃部を變じ第五節は受手のみを變ず第九節は各自演習の第二節と第四節の打合はせにして第十節は第九節と第十節第十一節は、八節と第十二節第十二節は七節と十三節第十三節は十四節と十五節の打合はせなり而して各自演習中に記述せる變化せしめ得べき斬突部は熟練の後は適宜に變化せしめ打合はすを要す打手と受手と構の異なりたる運動に就いては教官は奇(偶)列打の號令を下すべし而して受と打とは毎時間變更す

るを要す假令一時間中と雖とも同演習二回目演習等に便宜打と受とを變更すべし

第一節 脇構

本節は横構に變ぜしむるも可なり

双方共に脇構に取り先づ右にて四回次ぎに左にて四回續いて左右交動を四回行ふ(以下畧之)者なれとも互ひに薙刀を水平にし腰を打つときは打合はす能はざるを以て各刀尖を少しく上げ胴の高さにて打合はす可し但し脚打に變ずるも可なれども脚打より胴斬は容易にして且つ脚打は第八節第十一節及對向演習第三節に在るが故に令茲には成る可く胴打に變ず又場所狹き時は面打に變ぜしむ可し(第四十六圖参照)

第二節 立構

双方立構にて打合はす
但し一方を脇構面打ち又は風車面打等他の面打に變ずるも可なり

第三節 脚打

本節は胴打にては打合はす能はざるを以て脚打に變化す其の方法は分解二を行ふ時後手(左手)を扱きつ、鐵を下左前方に廻はし脚を打つ
但し一方は星眼脚拒ぎに變ずるも脇構横構水車の脚打に變ずるも可なり

第四節 下段霞

双方下段霞にて打合はす
但し一方を星眼の面打脚打に變ずるも可なり此場合には脚を送足にて進退せしむるが爲め一步丈けの猶豫を取り

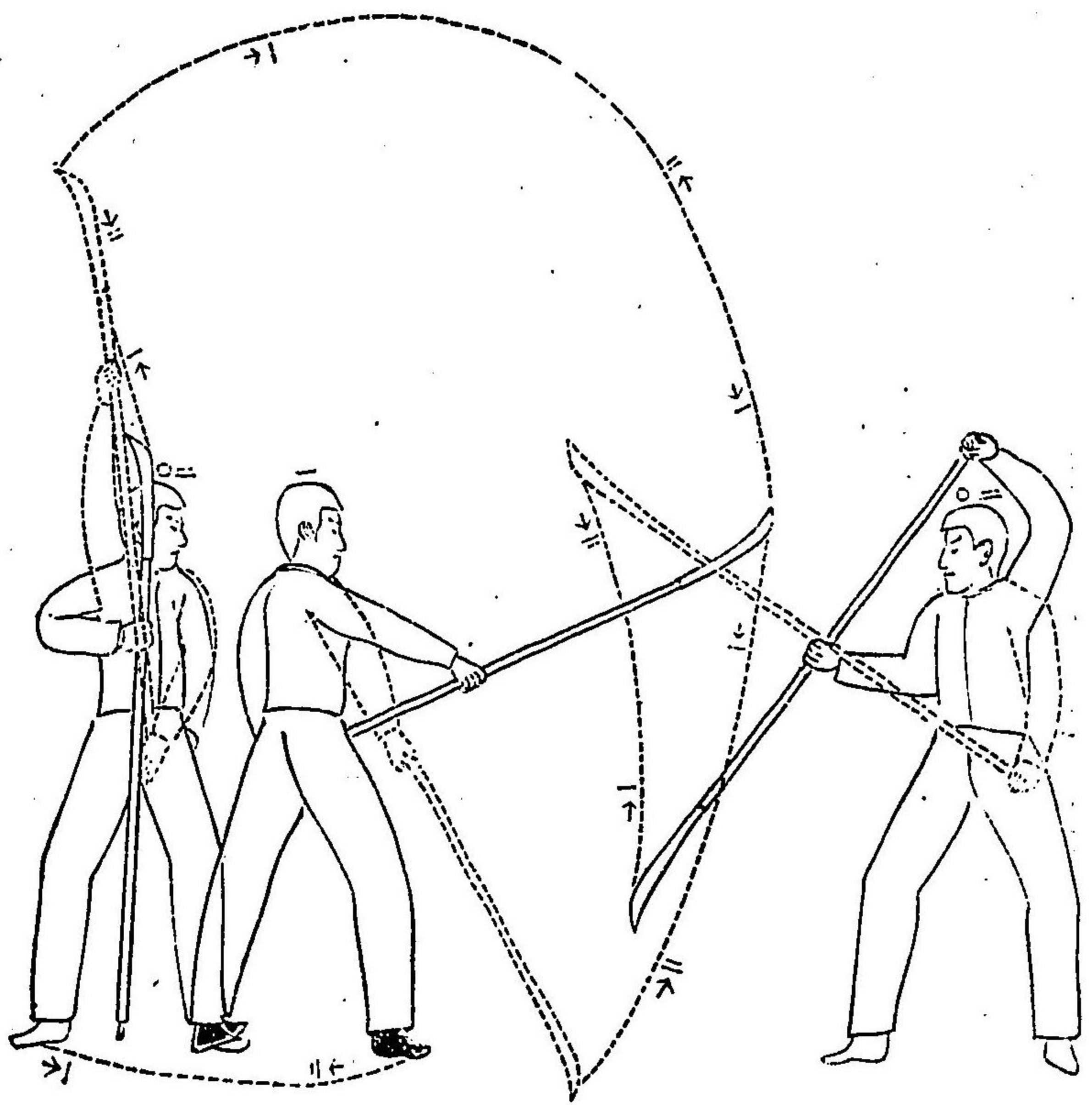
進退せしむ可し

第五節 膝掬(第四十圖)

本節の受手は揃足乳間より左記の動作を爲し以て膝掬を拂ひ除け敵の面を打つなり
一左足を後右方に退け體を替はすと同時に左手を扱きて石突を握りつゝ、刀尖を右前下、左方に廻はし敵の石突を左方に拂ひ尙ほ續けて刀尖を上、右下方に廻はし敵の面を斬る
二左足を定位に進め兩爪先を揃へ爪立ち兩踵を地に着け揃足を爲すと同時に左手を扱上げ右構の揃足乳間に復す此の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は構換法により左構に變ず

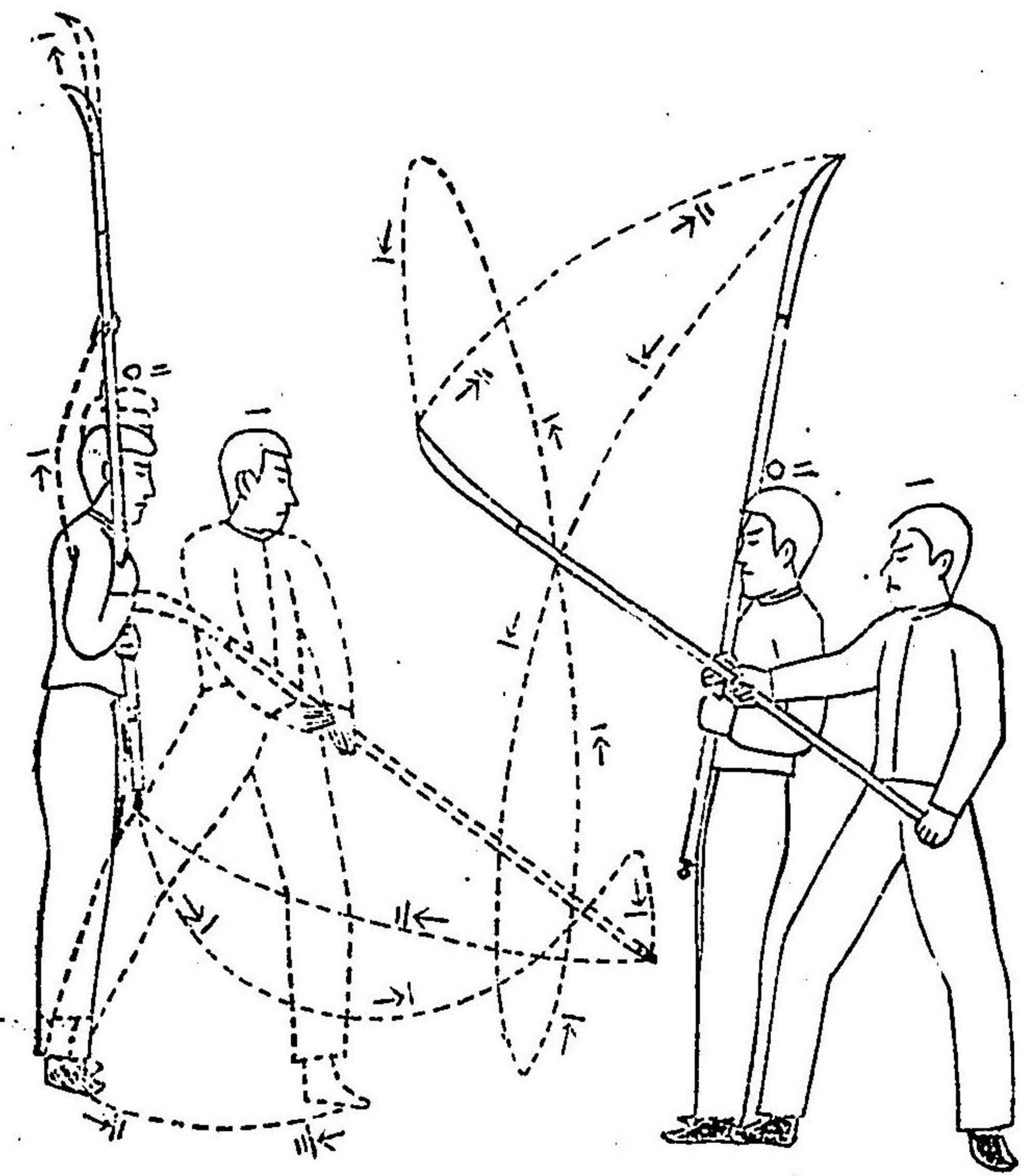
構換法

圖一十四第 節九第



141

圖十四第 節五第



左足を定位に進め兩足を揃へ兩足を爪立ち兩踵を地に着
け兩足を揃ふると同時に右手の握部を左手に譲り右手を

扱下げ左構
の揃足乳間
に取る
左構にて右
と同一の運
動を四回行
ふ但四回目
の第二舉動
は構換法に
より右構に
變ず

一六〇

左右交動

構換法により四回左右交動を行ひ氣を附けの姿勢に復す

第六節 水車

双方水車にて打合はす

但し一方を横構、脇構、精眼、刀尖又は鐲の脚打に變ずるも可なり又下段霞精眼の脚拒きに變ずるも可なり

第七節 風車

双方風車にて打合はす

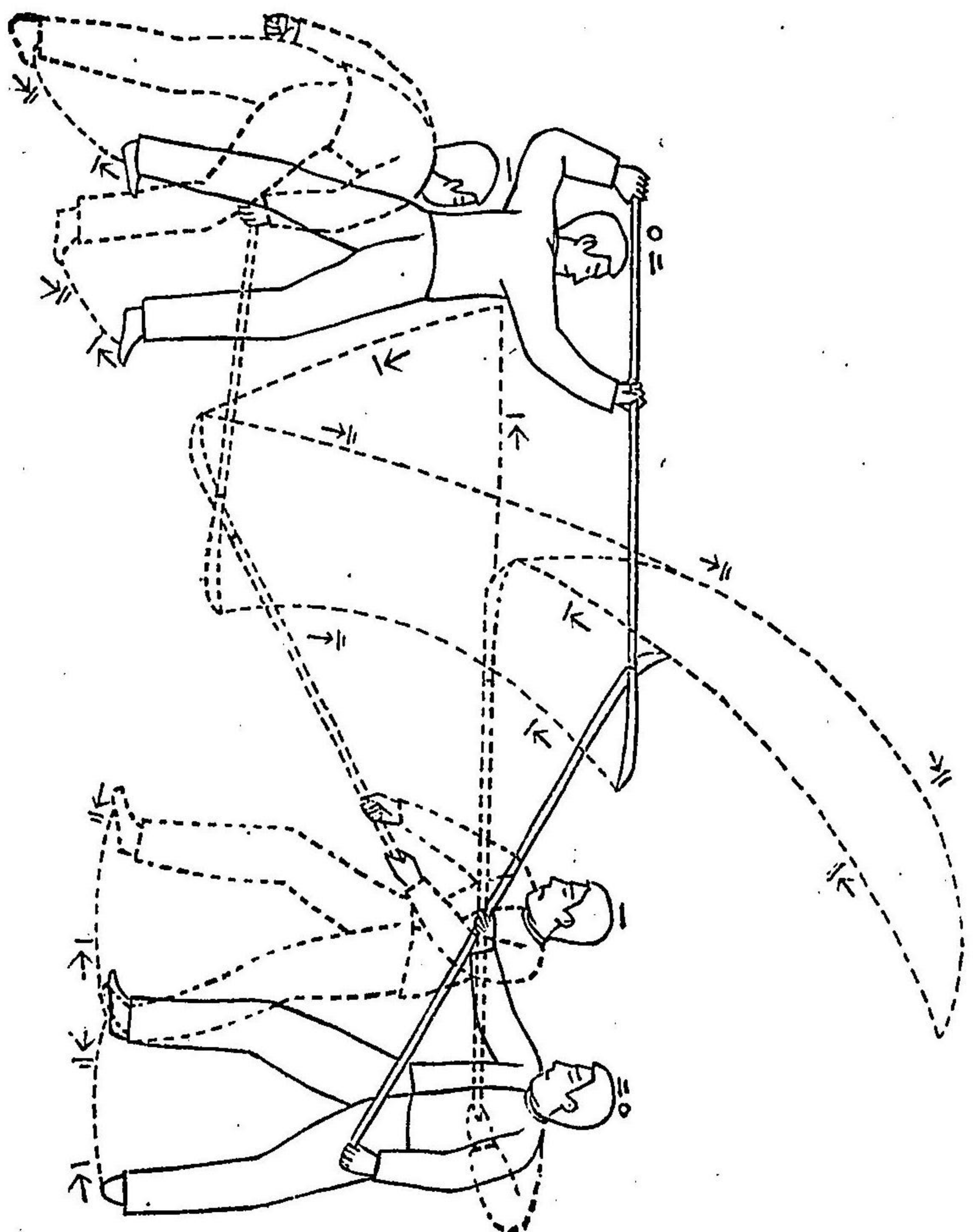
但し一方を立構、脇構、及精眼面撃若しくは脇構、精眼の送足進退に變ずるも可なり

第八節 精眼脚切

双方精眼脚切にて打合はす

但し一方を脇構、横構、水車、精眼、鐲脚撃、精眼脚拒等に變ずる

第十節 第四十一圖



も可なり

第九節 立構と下段霞 第四十一圖

但し立構を脇構、風車、精眼等の面打に變ずるも可なり

第十節 突と打落 第四十二圖

第十一節 下段脚斬と脚拒面斬 第四十三圖

但し打手を他の構の脚打に變ずるも可なり

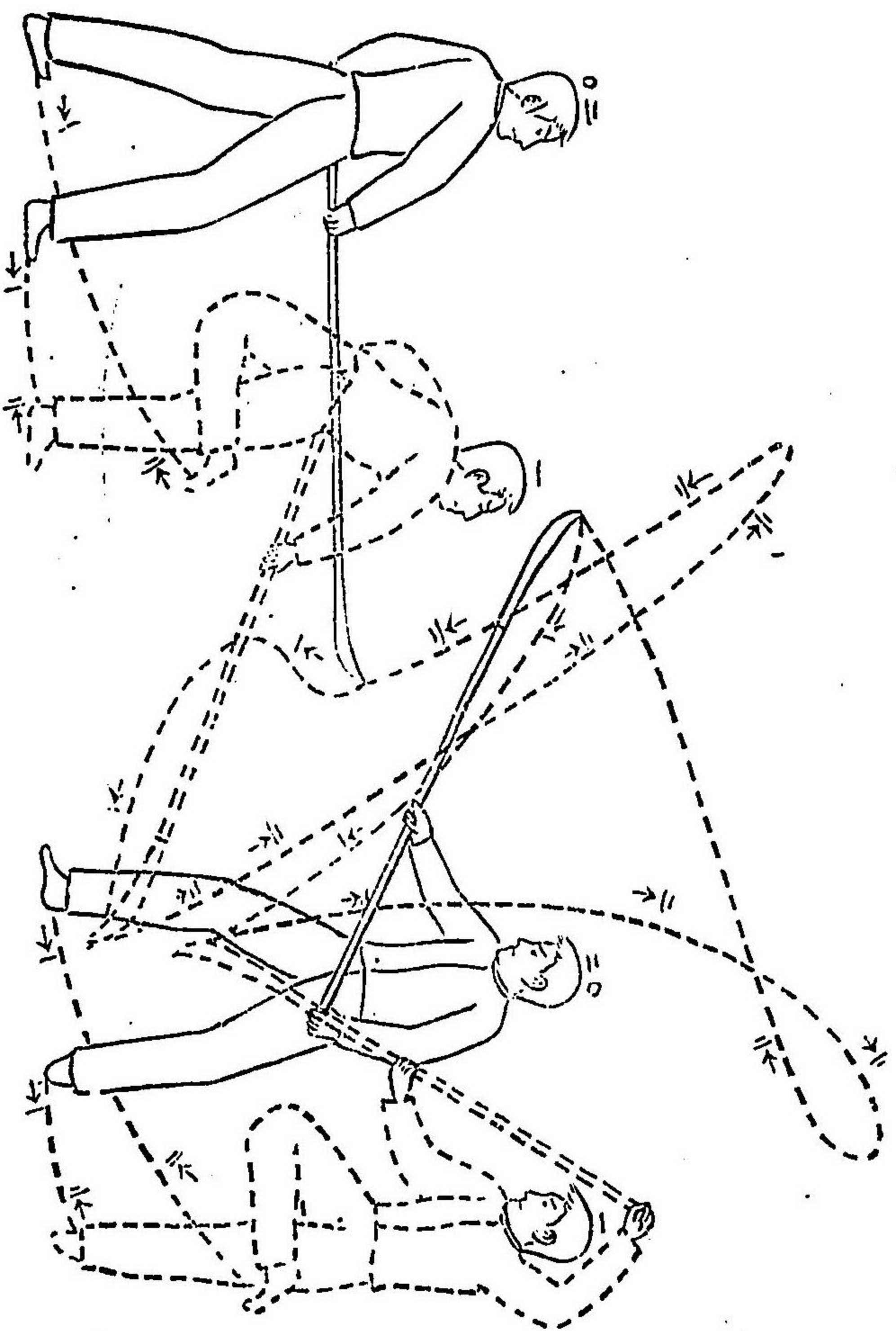
第十二節 風車と鐵留 第四十四圖

但し打手を他の構の面打に變ずるも可なり

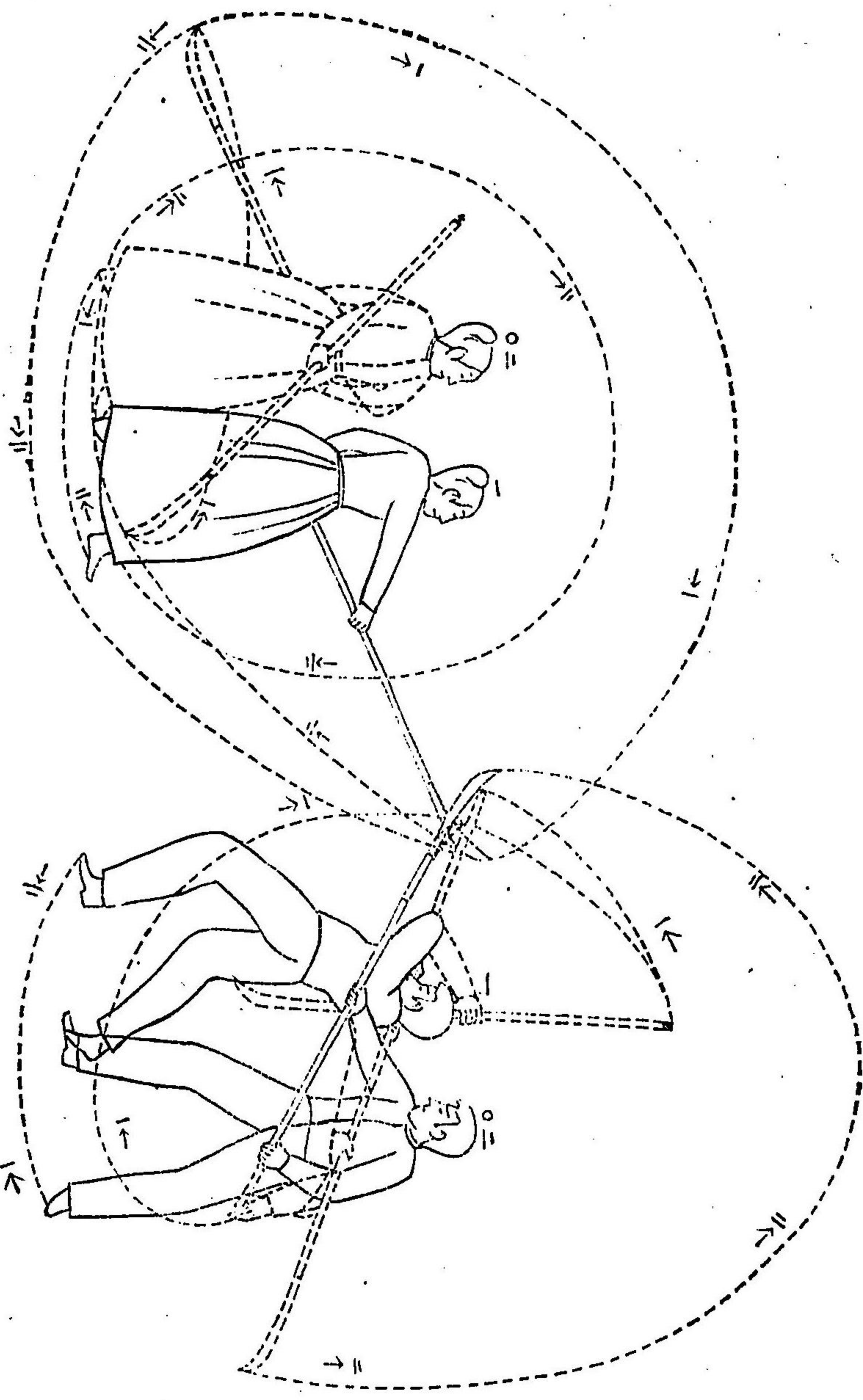
第十三節 上段横面と隅飛胴 第四十五圖

注意横面を打つに熟練せざる内は横面より少し上を打つ可し左すれば對手は過つて横面を打たるゝの恐れ無かる可し

第十一節 第四十三圖

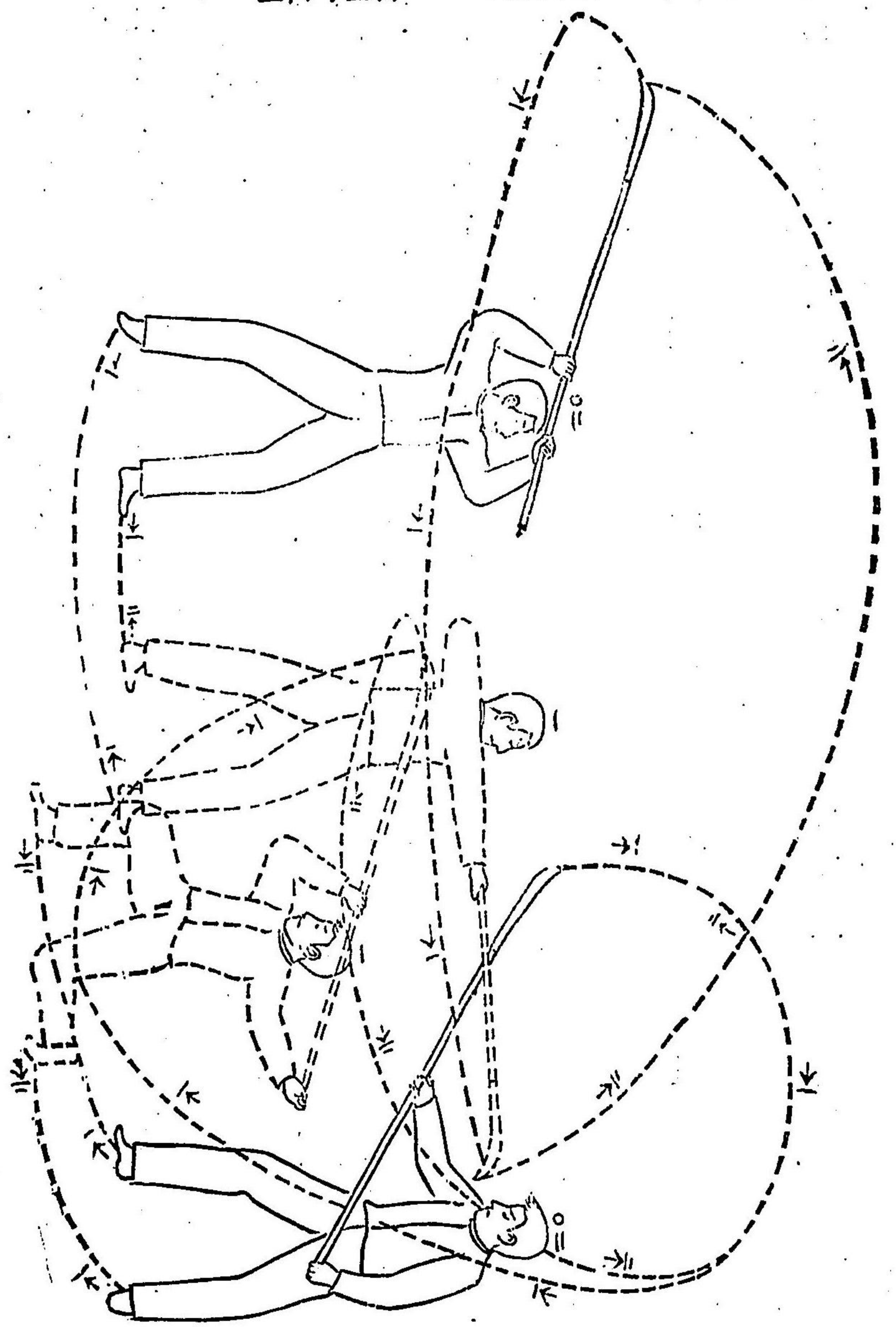


第十二節 第四十四圖



一六七

第十三節 第四十五圖



一六七

第六章 狹所演習 八 節

雨天等にて狹き雨中躰操場若しくは狹き教場等にて行はんとする時は各自演習十五節中狹き場所にて行ひ得べき運動及び狹き場所にて行ひ得らるゝ様變化せしめたる運動のみを行ふ可し之れを名つけて狹所演習と云ふ狹所演習の節名及名稱は各目演習の節名と名稱とに従ふ

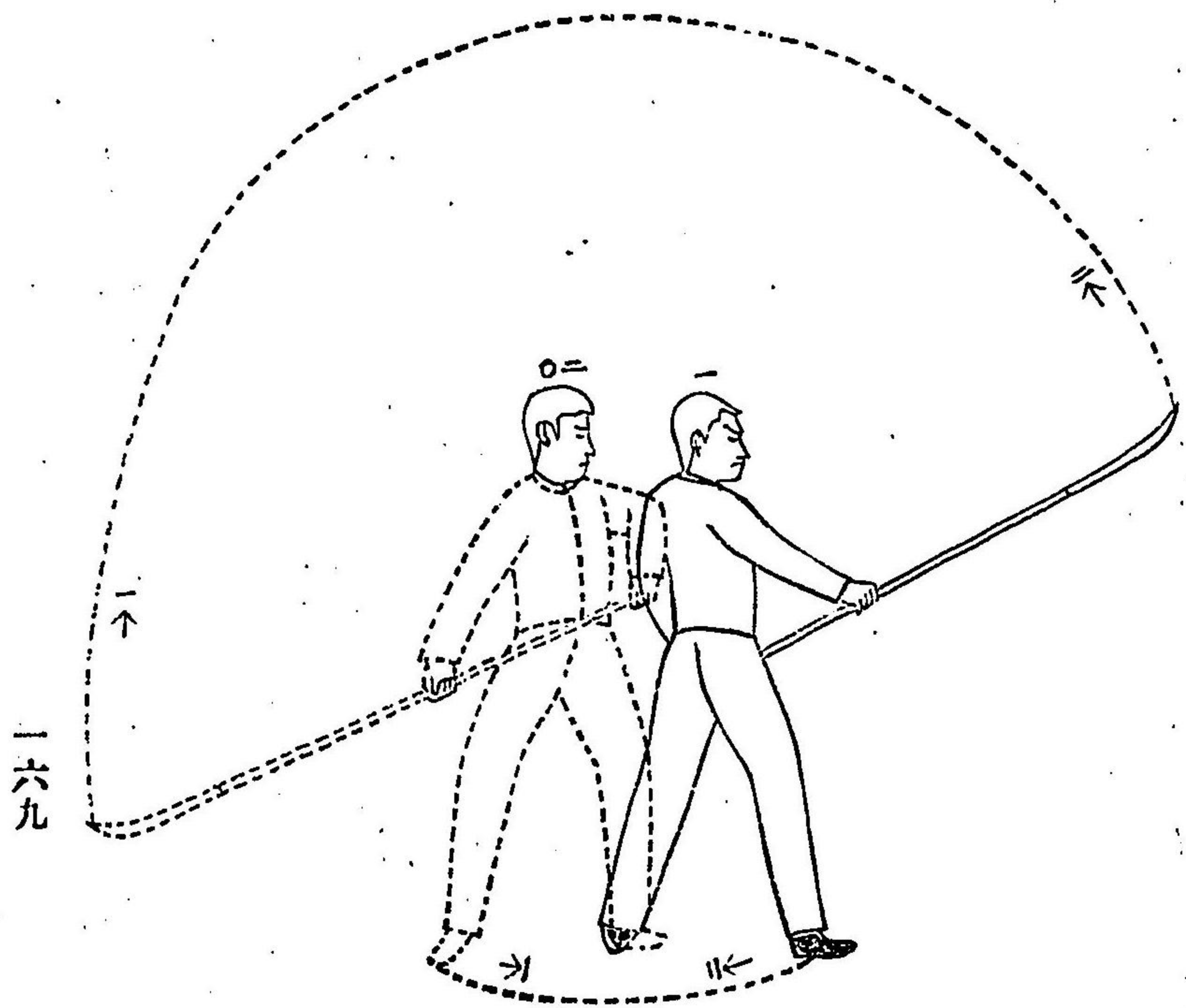
第一節 脇構、脇構より面を打つ 第四十七圖

一 脇構より右足を踏込むと同時に刀尖を上、前方に廻はし敵の面を打つ

二 右足を舊位に退くると同時に刀尖を上、後、下方に廻はし脇構に復す

右の如くして四回行ふ但し四回目の第二舉動は左構に變

圖六十四 第一節



じ左構にて同じく四回行ひ續いて左右交動を四回行ふ等
第一節に異ならず

第二節 立構 本節は場所大いに狭くして薙刀を右側に
立つる能はざる時は薙刀を右前に立て演習すべし

第四節 下段霞 本節は左右構動作は左右交動のみを變
化せしむ變化の方法は第八節の左右交動と同じ方法に従
ふ可し

第五節 股掬

第七節 風車の早交動及二回轉のみを行ふ

第八節 下段脚斬

第九節 突

第十二節 脚防面打

以上八節の内場所大いに狭くして窮屈なるときは第七節

は熟練者に非ざれば之れを除くを可とす
第九節突を除きたる他の七節は對向演習を爲さしむるも
可なり前章對向演習の部を参照すべし

薙刀體操法 初段終

小澤卯之助先生撰定

木型薙刀

發賣所は 寶文館校具部なり

定價は奥附の裏にあり

明治三十六年八月一日印刷
明治三十六年八月四日發行

薙刀体操法初段

定價金七拾錢

著者 小澤卯之助

發行者 吉岡平助

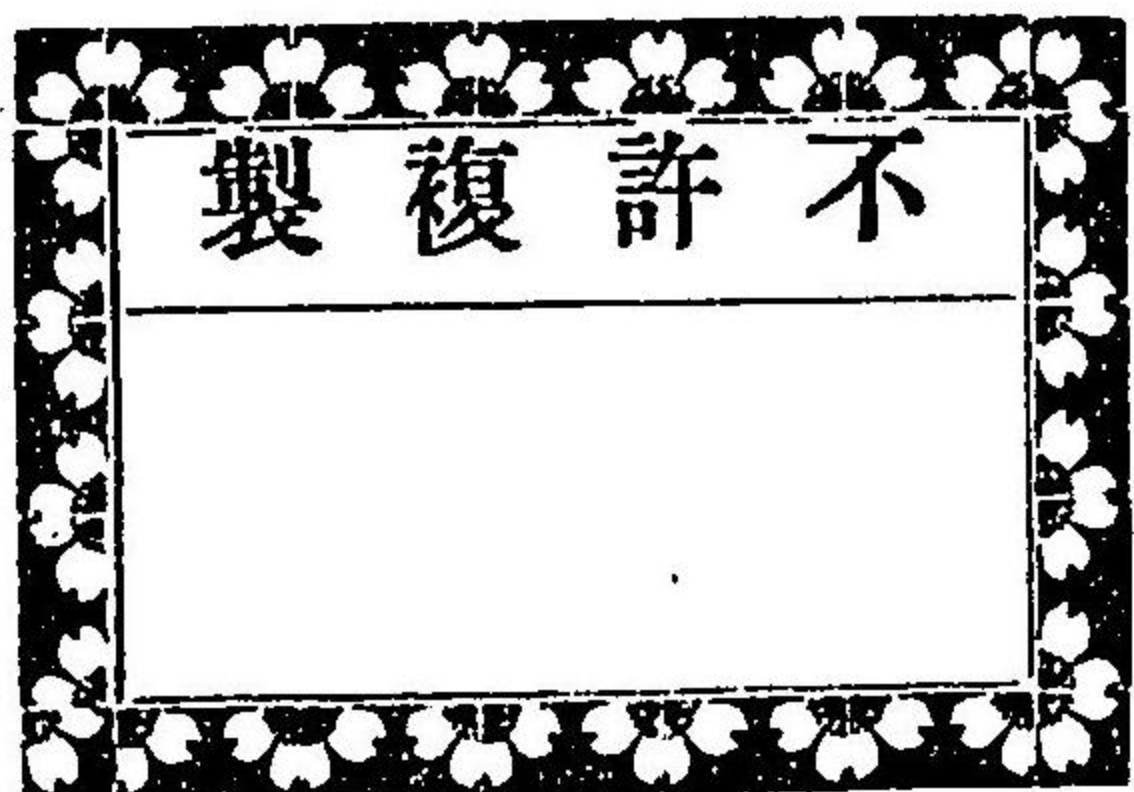
大阪市東區備後町四丁目七十八番邸

發行者 大葉久吉

東京市日本橋區本石町三丁目十七番地

印刷者 三島宇一郎

東京市神田區表神保町二番地



發兌

東京市日本橋區本石町三丁目
大阪市東區備後町四丁目

寶文館

日本體育會體操學校講師 小澤卯之助著
日本武術體操創始者

● 薙刀體操法

編讀

近刊

● 木劍體操法

近刊

武術體操創始者小澤卯之助先生撰定

武術體操用器具

木型薙刀

兒童用

五尺二寸 定價金五拾錢

五尺五寸 定價金五十五錢

教員用

五尺八寸 定價金六十錢

發賣所

東京市日本橋區
本石町三丁目

寶文館校具部